歐人の眼に映じたる日露戰爭

中央公論

第十九年第七號

要目

武士道と日露戰爭　井上哲次郎

時局と歴史教育　三上參次

水の說　巖谷小波

生きたる教科書　社說

日露戰爭とウヰッテ●公海に水雷布設の可否●黄人榮えんか、はた衰んか●新三國同盟●日本の新聞紙●英國旅行者の露國談●戯曲作家としてのダンヌンチオの缺點　（海外思潮）

東京市の殖民地　横山天涯

戰時の教育　長谷川天溪

北歐自然派の戯曲論　上田敏

THE CENTRAL REVIEW

明治卅一年一月廿九日第三種郵便物認可
每月一回一日發行明治卅七年八月一日

中央公論

本號目次

口繪　中央亞細亞の風光

公論
●生きたる教科書　社説
●武士道と日露戰爭　文學博士　井上哲次郎
●時局と歷史敎育　文學博士　三上參次
●水の說　巖谷小波

海外新潮
大勢●日露戰爭とウイツテ●公海に水雷を布設することの可否を論ず●戰爭の悲劇●黃人榮えんか、はた衰へんか●日露戰ぱ槪觀●新三國同盟
雜纂●日本の新聞紙●英國旅行者の露國談●戲曲作家としてのダンヌンチオの欠點

雜錄
●北歐自然派の戲曲論　上田敏
●東京市の殖民地　橫山天涯
●戰地情報　西山榮久

思潮
●我國民將來の理想●活動の時期●戰爭と家庭敎育●戰死者の妻女●冥想の樂

詞藻
●俳句（漱石選）
●和歌（柴舟選）●野の草（甲山）

評論
●戰時の敎育●帝國教育會の學制調査●社會主義と戰爭●社會非耶個人非耶●綠蔭漫言（成川）

社會
●賣藥屋　沈鐘堂
●新柳樽（久良岐選）

雜評
●隨感錄　醉美生

讀者の文壇
●學生と妻帶　高山血來
●短文「納涼」
●新刊批評
●戰爭彙報







中央亞細亞の風光

上圖――前方遙に雪を戴きて聳ゆる峻嶺は一万七千呎のカンダル嶺にして近き此地點は俗にグンバズと唱ふ、屹然たる土塔はキルギス或はサートの墳塋たりしならむも今は唯旅客の一夜の雨露を凌ぐの小舍に代えらる

中圖――ヤルカンド河の上流ザラフサン河の渡渉點にして圖は旅客の駱駝の背によりて彼岸に渡れるを寫したるもの

下圖――ホータンダリヤ地方跋涉の際率ゐたる一行を撮影したるもの右より數へて第三に當れる騎馬の人は本派本願寺法主の命により二年の歲月を中央亞細亞聖蹟の探險に費したる渡邊哲原君なり

中央公論



第十九年
第七號

活きた教科書

允文允武、英明今古に絶し玉ふ、我が天皇陛下は、日夜軍事に御心を惱ませ玉ふ中より、大學の卒業式に臨幸ましますさへあるに、特に文部大臣に勅語を賜はりて、軍國多事の際と雖も、教育の忽にすべからざる旨、懇ろに諭し玉ふた事は、何人も感佩に堪えぬ所である。

實に鶴の一聲とも云ふべき、此優渥なる勅語は、一旦濃霧に包まれた觀のあつた、不幸なる我が教育界を探海燈のそれよりも明かに――然り、正しく天日の耀々として、隈無く照らし賜ふたのである。

が、翻つて考へて見るに、此の勅語に諭し玉ふ所は、やがて民意の存する所。曩に彼の近眼者流の爲めに醸された、教育事業の蹉跌に對しては、國民等しく不當を鳴らし、無法を憤つて居るのを、聰明なる君主の夙に洞察し玉ひ、さてこそかくは勅語を賜うて、當局者を誨へ玉ふたのではあるまいか。果して然らば、君の御聲は即ち民の聲、昭代今日の如き時にあつては、是元より然る可き現象である。

されぱこそ久保田文部大臣は、親しくこの勅語を賜はりて、本領安堵の御沙汰を得て、常世其人より一層の面目を施し、直ちに訓令を全國に發して、大御心の存する所を、遍ねく天下に知らしめた。於是乎教育界は、大旱の膏雨を得たよりも、更に活氣を呈するに至るは、元より論を俟たぬであらう。

さりながら、已に此の難有き御沙汰を受けた以上、

教育界の當局者たる者、果して何程の覺悟を以て、この大御心に報ひんとするか。思へば彼等の任たる、層一層の重きを致した、而も今日の所謂る教育者たる者、能くこの重任を荷ひ得るてあらうか。

由來壓迫を受けた者の、一度びその自由を得れば、忽ち倍度の力を以て、飛揚を敢へてするの理は、兒童の弄ぶゴム毬を見ても、明白なる事實てある。然らば今日の教育界は、一旦受けし蹉躓の反動として、正しく大活動を演ぜねば成るまい。

大活動當さに演ず可し但し活動の手段に依りては、更にその効を見難いのみならず、却つて消極的蹉躓よりも、更に憂ふべき弊害を招く事の、決して無きを保し難いのてある。

蓋し活動にも種々あるが、世人の動もすれば新事業を企て、新團躰を結び、乃至資を投じ、財を抛つ事をのみ、活動飛躍と心得るのは、寧ろ誤解てはあるまいか。

何々會を組織して、何々の事項を取調べる、若干圓を寄附して、何々の事業を起す、此等は成る程活動には、相違あるまいが、それも時と場合による。兎も角も軍國多事の今日、此等の活動は、決して當を得たものでは無い。而も彼の御沙汰を楯に、强いて之を爲さんとするのは、眞に禍なる哉てある。

然らば則ち、何が此際に於ける、至當の活動と云ふ可きてあらう。余を以て之を云はしめるなら、軍國多事、今日の日本の如きほど、教育に非常の便宜を有しその効果の容易に顯はれる、好い時代はあるまいと思ふ。

見たまへ今日の日本には、百の教育家、千の教科書よりも、乃至幾多の學校、幾多の教育會などよりも、更に何倍かの實力を有し、良く且つ大なる教科書の、現在眼前に繙かれつゝあるては無いか。云ふまても無くこの教科書とは、——日露戰爭その物てある。

まことに日露の戰爭は、活きた最良の教科書てある我々日本國民は、此度の事件に依つて、從來知り得なかつた所を、新たに教へられた事項の、實に何程ある

か知れぬ。而已ならず、此度の事件に際して、平素敎へくれた所を、幾度温習し得たか知れぬ。

之を思へば日露戰爭は、一面敎科書なると同時に、一面學年試驗でもある。而も我が國民は、この面倒なる大試驗に、着々好成績を得つゝあるのは、何人も亦是認する所であらう。

便に之を委しく云へば、我には此度の事件に依つて東亞の地理を敎へられ、露淸の語學を敎へられ、軍事上の術語を敎へられ、下瀬火藥に依つて應用化學を學び、無線電信に依つて、電氣工學を學び、其他些少の事項に至つては、擧げて算へ難いほど、諸般の智識を得たのである。

智育は已に斯の如し。更にそれよりも貴重なる、德育の側に於いては、一入それよりも多くの敎訓を受けて居る。

彼の裏店の嬶の、夫の從軍を勵まして、天子樣の御爲めならば、留守に餓死しても厭はぬと云ふこの美しい愛國心だ、果して誰に敎へられたのであらう。田夫野人の徒の如きも、身を節して財を蓄へ、これを軍資に献じやうと云ふ。この勤儉の美德は、何に依つて敎へられたのであらう。

忠君と云ひ、報國と云ひ、義勇と云ひ、博愛と云ひ忍耐と云ひ、廉恥と云ひ、平生倫理の敎場に聞き、修身の課程に聞く所のものは、一々その實例を以て、極めて適切に、敎へられつゝある。

然り、我々は敎へられつゝある。而もこの敎材を與へたる、所謂る時局の當事者は、即ちこの試驗をうけて、見事及第しつゝあるのだ。

思うて此に至れば、縱令我が敎育界の、一旦蹉跌したとは云へ、一方この良敎科書に依て、その缺陷を補ひつゝあると云つても、亦不當ではあるまいでは無いか。

が、只こゝに注意すべきは、この目前の良敎科書をして、無意味に卷を蓋はしめる事無く、却つて之を活用して、新帝國の基礎を、此所に置かしめる樣にせねば成らぬ。

蓋し教育の國家に缺く可らざる、人間に食事の欠く可らざる如く、教育を廢して國家の成立を求めるのは食を與へずして人間の生存を期するが如く、迂愚の之より甚しきは無い。

されば人間の食物に、滋養物と不消化物とある、教育にも亦其通り、滋養的効果の歴然たるものと、勞して功無き不消化事項とがあるのだ。而して之を識別するのは、一に教育當事者の明不明にありとするならば決して忽には成らぬ次第。恐多くも天皇陛下の、玆に御心を用ひさせ玉ふのも、決して偶然とは云はれまい。

今や日露戰爭なる。帝國空前の良敎利害の、眼前に横はりつゝあるの時、余は教育當事者の、所謂る無益の活動にのみ走つて、勞して功無き不消化敎育に、帝國の前途を誤まるなからん事を、切に希望するのである。

時局より見たる武士道

文學博士　井上哲次郎

（本論は博士の談話を聽いて筆記したるもの、文責全く記者に在り。）

一　時局と武士道

今回の日露戰爭は獨り吾が日本に取てのみ非常なる事件といふのみならず、抑々また世界の歴史上に於ても同樣に非常の事件といふべきでありますが、爰に內外人の最も注意を惹きました事は、日本の軍隊がどうして斯の如き目覺しき勝利を得ることになつたのであるかといふ事で、その原因の果して那邊にあるかを知らんと欲するものが多く、また之れに就いて揣摩臆測の說を立つるものも鮮からぬのであります。もとより日本の軍隊が勝利を得るといふことの原因は、推究めたならば種々ある事で、決して唯一の原因に依て解釋し得らるべき事ではありません。例へば日本が維新以來、出來べきたけの改革を行ひ、進歩を圖り、西洋の鋭利なる機械を購入したといふやうな事が大なる原因であるに相違ありません。戰爭をするには軍艦、大砲を初とし、精巧なる機械がなくては戰勝の目的の達せらるゝ筈はありません。併しながら、此處に吾々の

見る所では、歐米諸國の人の一寸注意をしない一の大なる原因があるではあるまいかと思ふ、即ちそれは他ではありません、武士道であります。何故ならば、戰爭は固より精巧なる機械を利用して勝利を期すべきでありますけれど、機械が幾許精巧であつても、必ずしも勝利が期し得らるゝとは限らぬのであります。若し機械のみをいひましたならば、先の日清戰爭の場合に於ても、支那の軍艦大砲は決して左程に吾が國のより劣て居たといふ譯でもありますまい、が矢張り美事に支那は敗北を取たてはありませんか。又今回の日露戰爭の場合に於ても、露國の機械が我が國のよりは遙かに劣て居るなどゝいふことは到底いへないことであります、機械の點に於ては我より優ることがあるとも劣れりとはいへますまい。然るに露國は矢張り敗北を取て居るのであります。之に依て見て。戰の勝敗は機械のみに依るのではありませぬ、其の他に大なるものがある、即ち機械を運轉する精神が第一であります。軍艦大砲が如何に精集してあつても、之れを運用する精神がなかつたならば、是等の機械は何の用をなしませうか、既に精巧なる機械があつて、更に之れを運用する精神が添ふて居りますれば、初めて機械も十分に其の効用をなす次第であります。我が國に於ては從來歷史的に發達して來た所の武士道の精神があります、其の武士道の精神たるや實に壯烈なるものであつて、あらゆる文明の利器を應用し、戰爭の目的を決行するに欠くべからざる所のものであります。今回の日露戰爭に於て、我が國の軍隊が斯の如く名譽ある大勝利を得るといふ、其の原因の一の大なるものは此の武士道の精神に外ならぬことゝ思はれます。特に彼の廣瀨中佐の行動に就いて考へて見まするに、全く武士道の精神の顯現に外ならぬと思ひます。又彼の金州丸、常陸丸等に於て、軍人兵士が體面を重んじて降參を拒み、切腹して終りを全うしたといふやうな事は、矢張 武士道の精神の顯現と外思はれません。斯る場合に於て、斯の如く數多の軍人兵士をして空しく死せしむるといふことは、如何にも遺憾に堪へないことであります。乍併斯る軍人兵士のあるといふことは、日本民族をして永く世界に存續し、且つ發展せしむる徵候と見做して差支へありますまい。其の他日々戰地より報道せらるゝことを見まするに、皆武士道の精神の特殊の境遇に觸れて顯現せるものでないといふことはないのであります。或は支那若しくは露西亞に於ても、武士道は

あるてはないか、武士道なるもの何んぞ獨り日本のみに限るべけんやといふやうな疑問を發するものがありますけれども、それは抑も我が國の武士道を十分に理解せざる所から起る謬見であります。支那には決して我が國の如き武士道は發達して居りませぬ。宋末、明末に於てはなか〳〵慷慨義烈の士も出て居りまするけれども、朝廷の一變したるが爲めに武士道は發達することと出來ずに居ります。日本の武士道は我が民族あつてより以來發達して來たものであります。而して其の淵源と、又其の根底の深い譯であります。露西亞に於ても武士道が多少發達して居らぬといふことはいへないのでありますが、乍併其の所謂武士道たるや、決して日本の如き歷史的發達を遂げたものではありませぬ。如何に遠く溯るも、僅かに數百年來のもので、到底我が國と比較すべきものはありませぬ。又其の人種の不統一といふことが武士道の發達を阻害して居るのであります。假へ多少武士道が露國にありとしましても、其の武士道たるや、固よりいふに足らざるものであります。論より證據、今回の戰爭に於て連戰連敗を以て之れを證明しつゝあるではありませぬか、日本の軍隊の勝利を得る原因が、一は千百年の養成を待て發達したる、我が國の武士道の精神にあること決して疑ひないのであります。

二　武士道の復活

武士道の淵源を尋ぬれば、實に古い事で、神話の中に既に其の萠芽を發見するのであります。降て帝室を護衛したる佐伯氏大伴氏の事蹟か武士道の發達を兆するのであります。乍併武士道の著るしく發達して來ましたのは、鎌倉時代より戰國の末に至る間でありまして、其の間に源賴朝はいふに及ばず、武田信玄、上杉謙信、織田信長、豐臣秀吉等はいふに及ばず、無數の英雄豪傑の戰術武略を經て、特に武士道の發展を促した次第であります。德川氏三百年は誠に文恬武熙泰平の世でありまして、甚だしき戰爭もなかつたのであります。併しながら封建の制度であつて、各藩の敎育は即ち武士的敎育でありまして、其の例證とする所は即ち戰國の武士でありました。而して德川時代に於ては、戰國時代の武士道を敎育に依て皷吹し、傳播して、其の精神の普及を計たのであります。それでありますからして、別段甚だしき戰爭などはなかつたにしても、決して武士道の精神が消滅するなどゝいふことはなか

つたのであります。でありますからして、徳川氏の末造に至て亞米利加の軍艦が浦賀に來て通商貿易を促すに際し、國内の騷擾其の甚だしきを極むることゝなりました、が武士道の精神は茲に勃然として復活して來たのであります。武士道の精神といふのみならず、武士道の實行が活發なる態度を取て來たといふありさまであります。固よりかゝる變動の時代でありますから、附和雷同して起つた浪人風情も多くありませうし、又山師的の觀念を抱いて何か甘い仕事をしやうと試みたものもありませう。乍併吉田松陰であるとか、横井小楠であるとか、藤田東湖であるとか、其の他無數の志士は武士道の精神を抱いて決起したものとほか思はれませぬ。つまり武士道が久しく敎育の力に依て傳へてありましたから、一朝有事の日に當て勃然復活したことは疑ひありませぬ。維新後に至ては封建制度が全く取除けられました事でありまするからして、武士道の發達には都合の宜敷くない方であります。加ふるに武士道を破壞するが如き拜金宗一派の生臭き風俗が流行して來ました爲に、武士道の炎危は一層甚だしくなつた譯であります。乍併武士道が幸にして、其の後屢々復活されてあります。江藤新平、前原一誠等の亂は左程の事でもありませんけれども、十年の西鄕の亂は武士道の復活には少からぬ影響を及ぼして居ります。西鄕が海南の子弟を帥ゐて、熊本に於て實彈の演習をさせしめたのであります。西鄕が征韓論の爲に不平を起して、斯の如き亂を致しましたのは彼の爲に惜むべきでありまするけれども、彼れが實彈の演習に與り、大に志氣を鼓舞し來つたといふことは、彼れの賜物といつて差支へありますまい。それで熊本籠城中に在た人が日清戰爭に於ても、日露戰爭に於ても隨分重要なる要務をなし遂げて居ります。故の川上參謀長、今の兒玉大將、寺内陸軍大臣などは、皆熊本籠城中の人であるといふことであります。其の後日清戰爭のあるに當りましては、十年の戰爭に於て、實戰を經た、其の技倆を以て支那を討したのであります。支那人の敗北を取たといふも、彼等に斯る武士道の殆んど全く缺乏して居つたからの事であります。日清戰爭に依て大に我が軍隊の武士道が復活されたる後に當りまして、又北清事件が起て、之れに依ても軍事上の實驗を經る機會が得られました。此の北清事件は大に日露戰爭にも關係があるやうに思はれるといふは、北清事件に於て、日本の軍隊が英、米、獨、佛、以等の諸國の軍隊と行動

を共にして、親しく歐米諸國の軍隊の實際の狀態を知るの機會を得たのであります。彼の日英同盟の如きも、必ず此の時に萌した事であらうと思はれます。英國が親しく日本の軍隊の行動を知り、又其の將來賴むに足る事も併せて知たに相違ありません。そこで其の後幾許もなく、日英同盟が實行せられました。日英同盟が實行されて居たからこそ、日露戰爭が實行し得られたのであります。而して我が國の軍隊が彼の北清事件の際に、露國の軍隊が以外に與みし易きを看て取たのであります。されば日露の問題が愈々切迫するに當ても、彼の國の軍隊の實狀を知悉して居るが爲に、我が國に成算の有た次第であります。

之れを要するに、武士道の精神が維新以後屢々復活されてあります、即ち十年戰爭、日清戰爭、北清事件、そして今また日露戰爭に於て復活されて居ります。斯の如くして武士道の精神が我れに存して居るが爲に、大敵の出づる每に之れを粉碎して進みつゝある次第であります。

三　古今武士道の異同

然らば武士道は如何なるものなるかといふに。武士道を說明したものは甚だ少いのであります。武士道は組織的の知識に依て求むべきといふよりは、むしろ實行に依て直覺すべきであります。而して其の解釋はしばらく之れを措いて、其に古今の異同あることを一言辯じて置きたいのであります。武士道は必ずしも古今一徹といふべきではありません、其の精神は固より古今一徹であります、併し其の形式は古今異同あることを免れないのであります。武士道の何たるかを了解しやうといふに、若し其形式に拘泥しましたならば、意外の謬見に陷ることを免れないのであります、形式は時勢と境遇に依て異らざるを得ないのであります。德川時代と今日とを比較し來つても、既に其の形式は異つて來て居ります、德川時代に在ては、武士道は各藩の藩士が君主に對して夫れ〲忠節を盡す上に存して居たのであります。乍併今日では軍隊組織となつたのでありますから、軍隊が天皇に對し、また國民に對して其の忠節を盡す所に武士道は存して居ります。それで其の武士道を實行する形式は、德川時代と今日とは同一だとはいへないのであります。乍併自分より高いもの、即ち自分より一層大なるものに對して忠節を盡すといふことは、寸毫も古今に依て異同のある次第では

ありませぬ。例へば封建制度の時代に於て、或一地方の藩士が其の主君に對して忠節を盡すことが、武士道であつたとしましても、今は其の範圍が擴充せられて日本全國となつたのであります。今日の軍隊が天皇に對して忠節を盡すのは、矢張り封建制度の時代に、特殊の藩士が君主に對して忠節を盡したのと同じ精神であります。只其の範圍の廣狹が違つて居るだけであります。何しろ武士道は自我より一層尊きものを發見して、之れが爲に身命を擲つことであります。古來の語を借りていへば、即ち忠節を盡すので、之れが爲に身命を鴻毛よりも輕しとするのであります。是れ忠節に比べては、身命の如きは尊ぶべきものではないのであります。固より身命を保つて忠節を盡すことが出來るならば宜しいが、身命を保たんが爲めに忠節を汚すといふやうならば、最早何の爲に躊躇すべきことがある、切腹をして忠節を盡す次第であります。さういふやうに武士道に於ては、自我より一層尊きものを發見して之れが爲に身命を放擲するのであります。

尚ほ今後の武士道を考へて見まするに、人道の爲め、正者の爲め、生命を擲つといふやうな事が、次第に武士道の範圍に入て來ると思はれます。左樣に知識が進み、見解が新なるに從て、自我より尊きものも倍々高大となり、遂に正義人道との一致を要求するといふやうな、最後の調和を期することに立到るであらうと思はれます。假へ其處に到ても、武士道の精神は寸毫も變るものではありませぬ、人道の爲め、正義の爲めに活動するにしても、矢張りそれが即ち其の時の節義であります。此の節義の爲に己れが死生を決するといふことが、即ち武士道の精神であります。

四　武士道の精神

今回の日露戰爭に於て、日本の軍隊が着々勝利を博しつゝあるといふ事に就きましては、歐米の新聞紙などに色々批評を試みて、其の原因の果して那邊に在るかを揣摩臆測しつゝあるのでありまするが、其中には武士道なども大なる原因として擧げてあるのであります。隨分日本人の精神を捕へ得た所もないではないのであります。乍併槪して之れを言ひますと、まだ〳〵皮相の見解が多數を占めて居るやうに思はれる。固より日本の軍隊が斯の如く强大である原因は種々ありまして、之れこそ唯一の原因であると確言することは困難であります。例へば日露の兩國を比較して見まする

と、我れの方の普通教育が、一般に彼れのよりも普及して居るといふことも、確に其の一原因でありませう。また地形の上からいつても、我れの方に便宜が多いとか、其の他色々の原因を數へ擧げることが出來るやうであります。併しながら我々の見る所では、武士道の精神は是等の原因中の極めて重大なるものであると信じて居ります。彼の閉塞隊の如きはいふまでもなく、凡べて戰場に於て壯烈なる精神の發揮を見るといふことは、全く我が邦人中に潜在して居る所の武士道の精神が、境遇に觸れて發現せるものと見るべきであります。或は我が國の勝利は、維新以來西洋の文明を輸入し、又あらゆる精巧なる機械を購求したからのことである、と斯樣に論ずるものがあります。それも一應尤もなる事であります。戰爭をするには大砲軍艦を初めとして、精巧なる機械がなくては叶はぬとであります、我が國の勝利の原因として之れを數へることは、決して無理からぬことである。乍併我が邦の勝利を以て、全く舶來の利器を應用したといふことに歸するのは、未だ一を知つて二を知らざるものであるといはねばなりませぬ。機械は戰爭に必要であるけれども、之れのみにて戰爭の出來るものではありません、機械を運用する精神が第一であります、精神が本で機械は其の用具たるに過ぎぬのであります。若し機械のみをいひましたならば、日清戰爭の際に於ても彼我の間に格別優劣はなかつたやうに思ひます、むしろ軍艦などは彼れの方が優て居た。今日の日露戰爭に於ても機械の點からいひますと、露國が決して我れより劣て居るとはいへぬのであります。只淸國よりも、また露國よりも遥に優て居るものが我れに存して居るといふべきは、即ち武士道の精神であります。此の精神の活動をなすに當ては、如何なる敵も粉碎せられざるなしといふ、壯烈なる結果を生じて來るのであります。これは古今の歴史的事實に依て證明し得る所であります。若し機械を以て勝利の唯一の原因としましたならば、勳功は全く機械に在るので、軍人兵士は毫も與らざる次第でありませう。然らば金光燦爛たる勳章は機械に附與すべきであります。處が吾々の見る所では決してさうでない機械は凡べて借物で、之れを運用する精神が勝利の大本原であります。或は武士道は獨り我が國に在るのみでなく、また他の國にもあるではないか、即ち淸國露國等にも等しく武士道なるものが存して居るではないか、若しさうであるとすれば、何も武士道を以て我が

國の勝利の原因とする譯には行かないのではないか、と斯樣に論ずるものがあります。乍併淸國には殆ど武士道が發達して居らぬ、尤も古來武士道の如きものがないではない、例へば宋末明末等には志士が節に殉したといふやうなことがあります。例へば文天祥の如き其一人であります、又我が國に渡來した朱舜水のやうな人は、餘程武士道的の精神が有つたやうに思はれる乍併支那では度々朝廷が變つた爲に、武士道が引續いて發達することが出來なかつたのであります。

露國に於ても、何分我が國に比べて建國以來の年數が甚だ少いが爲に、我が國の如き武士道はまだ發達しては居らぬ。論より證據、露國の軍隊は我が國の武士道の精神に觸れて、其の壯烈なるに驚き、悉く辟易して寸進尺退の有樣ではありませぬか。

五　武士道は日本國民の自我

武士道は我が國民の最も得意とする所であります。今申した通りに、淸國露國其他の國々に斯る壯烈なる武士道を發見することは出來ないので、是れは獨り我が國に著しく發達したものであります、夫れ故に最も我が國に固有なるものといつて差支へない。武士道のシムボル即ち標號として日本刀があります、之れを內にしては武士道の精神、之れを外にしては、日本刀であります。日本刀は日本人の最も得意とする所のもので、今日に在つても之れを廢することが出來ませぬ、聞く所に依れば、將校以上の人は皆日本刀を持て戰場に臨むといふことであります。外形は劍の形であつても中の正身は全く日本刀で、之れを持て戰場に向ひ、縱橫突貫することが我が軍人の最も得意とする所であります。日本刀の廢すべからざるが如く、矢張り武士道も廢すべからざるものであります。

我が國が維新以來國威を發揚して來たといふのは、此の武士道の精神に依ることが多いのであります。然るに若し武士道の如きものを、日本の國民性から全く除却したならば何うでありませう、日本國民は誠につまらないものになつてしまうでありませう、否々武士道は決して日本の國民性より除却すべきものではありませぬ、日本國民の顯著なる特質は實に此の武士道に在ります、此の點から之れをいひますと、武士道は實に日本國民の自我といつて固より差支のあらう筈はありませぬ。古今二千五百年を瞥見するに、武士道は日本國民をして日本國民たらしめた所の大精神大骨頭であ

ります。

六　武士道と將來の道德

武士道は獨り戰場に於てのみ發揮するものと思ふものあらば、それはまだ武士道の眞相を看破し得ぬものであります。武士道は古來日本の社會に發達したる一種の單純なる道德であります、武士道は單に暴力を逞しうして敵を殄滅すれば足れりとするのではないのであります。武士道は仁愛心と併行するものでなければ眞の武士道たることが能はぬのであります、即ち正を助け、邪を懲すことが武士道の目的であります、之れを外にして武士道なるものまたあることとなしてあります。

露國の如く利己的行動を逞しうし、隣國の境界を侵し、友邦を侮蔑し、條約の明文に背くといふやうな無法な事があればこそ、我が國は今回の義戰を起して彼れを懲罰しつゝある譯であります。武士道の精神をいへば、凡べて文明進歩の妨害を爲す不義不正を斷然撲滅して、正義人道の發展を助けて行くことを目的とする次第であります。戰爭は其の目的を達する爲の方法として重大なるものであつて、決して目的其物ではない、目的は其以上に在るもので、戰爭は單に方法たるにすぎないといふことを忘れてはならぬ。而してまた正義人道を發達せしめて行く方法は獨り戰爭のみではない、無形の範圍に於てはまた無形の手段方法を用ゐて行かなければならぬのであります、例へば道德の範圍に於ては、不正不義を筆誅して正義人道を奬勵するといふやうに、凡べて文明進歩に裨補することを力めて行かねばならぬのであります。斯く紛々たる社會の要件に對して、壯烈なる武士道に由つて其目的を斷行して行くことは、戰場に於ける武士道と寸毫も異りたる所はないのであります。でありますからして、今後我が國に於て道德を進めて行かうといふには、矢張り此の武士道の精神を以て斷行することを力めねばならぬのであります、是れが武士道と將來の道德との間に密着不離の關係のある所以であります。但し武士道に精神と形式との區別あることを知らねばなりませぬ、武士道の精神は古今一貫、千年經つてもはた萬年經つても變るべきものではありませぬ。乍併其の形式は一定せざるもので、其の時々の境遇如何に依て千變萬化することを免れざるものであります。例へば德川時代に於ては復讐を慫慂したといふやうなことがありましたが、是れは只武士道の形式に屬することで

ありまして、其の精神には關係ありませぬ。法律の整頓したる今日に於て、復讐をしないからといつて、寸毫も武士道の精神を傷くる譯ではありませぬ。武士道の精神は强固なる意思の活動を意味するとであつて、決して其の時々の形式に拘泥して之れを蔽ふべきではありませぬ。

七　武士道と將來の敎育

德川氏三百年の間に於ては、武士道が敎育に依て傳へられました、それは當時封建制度が行はれて居たが爲に、各藩に於て武士的敎育を施して、此れに依て武士道の精神が所在養成された次第であります。維新以來封建制度が廢止されましたが爲に、武士道の敎育に甚だ不便なる影響を及ぼして來ました、加之武士道の精神を腐蝕するやうな生臭い拜金宗の風俗が傳播して來たといふやうなことがあつて、一時は頗る識者の憂患を招いたこともありました、乍併其の後屢々戰爭のあつたが爲に、武士道の精神は之れに依て復活されて今日に至て居ります。さて今後は如何でありませうか、武士道の敎育が國民敎育に依てなし遂げらるゝでありましやうか、或人は其の甚だ困難なることを論じて居ります、之れも封建制度のなくなつた今日の事でありまするから、一應尤もな申分であります。乍併敎育は何うしても獨り智育のみではなくして、必ず之と共に德育を施して行かなければならぬ、所が其の德育なるものは、德育に關する智識を得たゞけでは何の役にも立たぬ、其智識の通りに實行せねば其の目的は達せられませぬ。斯の如く實行といふことをいひますれば、百難を排し斷々乎として斷行する所の壯烈なる精神を要するのであります。此に敎育と武士道とが聯絡するのであります。而してまた德川時代に於けるが如く、武士道の適例を引用して、兼ねて武士道の精神を兒童の頭腦に吹込んで置くことを要するのであります、太平の時に在つてはあらゆる職業に關する智識を付與することが必要でありまするけれども、何日何時戰爭が起つて國難に當るやは、誰れも精確に豫言することの出來ないことであります、それであるから兼て武士道の精神を國民敎育に十分普及さして置いて、いざ國家の大事といふ時に當つては、國民一般全然統一の實を擧げて、今回の如く敵國を擊退するやうにしなければならぬのであります。

今回露國との戰爭が、始まつて見れば、始めて平素の

教育の結果が如何に偉大なるかといふことが分明に見えて來たでありましやう。それで過去は過去として、更に今後の教育をして一層偉大なる功果あらしむるやうに、非常の計劃をして掛からねければならぬのであります。

時局と歴史教育

文學博士　三上參次

左に掲ぐるは、三上博士が、先頃第二回時局學術講話會に於て講話せられたるものを、特に請ふて筆記したるものなり。若し誤謬あらば全く記者の責任なり。

私は時局の始まる前に、歴史の上から見たる國民の覺悟と云ふ題で、或二三ヶ處で演説をしたことがあります。其演説の筆記は新聞若くは雜誌に出ましたから、或は諸君の中にはそれを御讀み下すッた方があるかも知れないと思ひますが、其趣意と云ふものは實に陸海軍人の忠勇無雙なるが爲めに、我國の成功と云ふものは無論少しも心配はない。けれども外國人の多數竝に我國民と雖も心配をする者は、若し此時局が長く續いたならば、今日國民の持ッて居る所の敵愾心と云ふものが、今日の如く張切ッたる調子で長い間續くであらうかどうであらうか、もう一つは、縱し其敵愾心と云ふものが續いたにした所で、國家の財力と云ふものがそれに堪へ得るであらうかどうであらうか、此二點に付ては當人の心配する所である。併しながら吾々の祖先は實に國家の難局に堪へて、獨立の體面を汚さずに來て居るのである、實に其敵愾心の旺盛なること、並に國家が戰爭を續ける間は最早個人的と云ふやうな觀念を抛棄して仕舞ッて、銘々資產のあらん限りは時局の爲めに貢さなければならぬと云ふ、眞なる模範を示して居る。殊に六七百年前の蒙古の來襲の場合と、今日の場合は能く似て居る。吾々先祖が斯の如き忍耐と盛なる敵愾心の手本を示して與れたのを、吾々子孫として今日の時局に堪へぬと云ふとであるならば、何の顏あッて祖先に見えやうか、又何の顏あッて歴史の體面を維持することが出來るであらうか、それに就て北條時宗などの功を盛んに述べたことでありますが、其後北條時宗公に御贈位の御沙汰があッたのである、是は無論外の事情でありませうが、吾々の述べた事が丁度それに暗合したやうな譯で、竊に得意に思ッて居ッたのであります。今日はそれの引續きでありますけれども、モウ少し歴史と云ふものゝ見解を廣く見て御話を致さうと思ふ。其後連戰連捷今日の如く好結果を收めつゝあるに付ては、色々の原因が錯綜して居るごこでありませうけれども、私は歴史教育の効果が顯はれて居ると云ふことが其原因の一つ、而も其原因の著しい一つであると云ふことを述べやうと思ひます。

此歴史と云ふ文字に付て、私は大變廣い意味を採ッて居ることを御斷りをして置きます。嚴密に申す狹い意味の歴史でなく、教育上に於ける修身の科は固より、國語科などに於きましても、苟も歴史の中に現はれた所の人物事件を採ッて說明をして居る所のものは、皆私は歴史教育と看做して居る、それから又進て

社會教育の一部分を爲せる彼の寄席芝居

に於ける題目、即ち寄席に於ける所の軍談講釋でも、淨瑠璃でも、又芝居に於ける所の時代物に致しましても、矢張り是れも其事實を如何に敷衍を致したり又曲げて飾りを附けてあッたにした所が、歴史と云ふものゝ上に現はれた人間を種にしてある以上は、私はそれを歴史教育の一部分と看做すのです。

此點に付ては科學的の歴史と云ふものを、教育的殊に社會教育、卑近なる教育に於ける所の歴史と云ふものとは餘程樣子の違ッたものであることは、私が申すに及ばず、諸君に於て御承知を願ッて置きたい。吾々の先輩として畏敬して居る所の重野先生は、兒島高德を抹殺された。それに付て私は色々研究をし、又岡山縣に出張して有らゆる取調を爲してどうかして復活させやうと思つたけれども、其材料と云ふものが一つも旨く蒐まらなかッた。て其事を出張先から重野博士に報告した所が、重野博士は或席に於て私の書面を證據として、愈々天狗の鼻を高くせられたと云ふことを聞いて居る。けれども教育上から見る時には、兒島高德と云ふ者は、歴然と存在して居ると認めて宜しいのてある。科學としての歴史と、通俗教育に於ける所の歴史と云ふものとの長短に就ては別に考がありますけれども、今日はそれを議論することは致さない積りてある唯だ私の歴史に就ての見解がさう云ふ風てあることを前以て一寸御斷りして置きたい。

モルトケの申した言葉の中に、普佛戰爭に於て普魯士が佛蘭西に勝ッたと云ふものは、固より色々理由のある事であらうが、教育の效力と云ふものか其最も多さに居ると云ふことが言ッてございますが、諸君も御承知の通り、實に動かない所の言葉であるだらうと思ひます。其教育と云ふ言葉は固より廣い意味てありまして、大砲の打方を教へるとか、又はそれに類した所の軍事上の知識を與へると云ふことも勿論教育てありますけれども、精神教育と云ふものが其中に餘程重きを置かれて居ると云ふことも、亦諸君が御許しになるてとてあらうと思ひます。其精神教育と云ふものが、軍の場合に於て如何に効力があるかは、私が特に申すにも及ばぬことてありますけれども、私は是より一般教育殊に其中て小學校、中學校に於ける所の歴史教育が非常に重きを成したものてある、又それと並んで小學校、中學校以外に於ける所の社會教育、寄席、芝居、其外總て其類のものが大いに働きを奏すると云ふ事を申さうと思ひます。固より極く卑近なる歴史教育てあ

りますけれども、極く高尚なる歷史教育の上から言ひましても、此時局と云ふものは歷史の上に大變に利益を與へる、現に私共は其利益を受けつゝあるのであります。

例へば是迄の歷史に就て戰爭の記事を見ましても、能く了解の出來ぬやうなものがあッた、所が今日の戰爭の報告を得て、それと較べて見ますると云ふと、是迄理解の屆かなかッた所が大變に能く分る、又一通り分ッて居ッたものは、今日の戰報と較べて見ると、一層の面白味を以て了解することが出來ると云ふやうなものである。先々月私は滋賀縣を回ッて居りましたが、彼の名高い賤ヶ岳の古戰場に登りました。其賤ヶ岳の古戰場と云ふものは、御承知の方もありませうが、此方に琵琶湖があッて、一の地峽を隔ッて余吾の湖がある、實に狹い山である、其上に佐久間盛政が陣を取ッて居ッたのを、彼の七本槍と言はれた、

福島正則、片桐且元、

兩加藤其外の者が先を爭ッて奮擊した處は此邊であると言ッて案内者が懇々と說明して呉れた。其時に如何に大きな大砲も無いとは云ひながら、能くも斯う云ふ處を驅上がることが出來たものだ、どうして七本槍の功名をすることが出來たかと疑ふやうでありましたが、其事情を今日の南山の激戰に較べて見ると、成程さうであるかと言ッて了解することが出來た。それから又先日の鴨綠江の戰報を見ると、彼の宇治川の合戰の戰況が明瞭に分る。それから旅順の攻擊と云ふものが、又兩三日の中に在るでありませうが、私は之を日本歷史の中に在る戰爭と較べて見たならば、新田義貞が鎌倉を攻めたとか、或は寬永十五年に西國の諸大名が島原を攻めたのと同じ事で、此旅順の戰報が來たならば、定めて愉快に感ずるだらうと思ひます。御承知の通り鎌倉と云ふ處は一方は陸で、三方が海である。それから島原の方になると、就中旅順に地形が善く似て居る。島原に立籠ッて居ッた所の兵と、今日旅順に立籠ッて居る兵と數とに於て格別大きな差は無いやうに思ふ、島原城に籠ッて居ッた所の兵は皆宗敎に熱心なる所の、死を決した凄しい者である。今日の旅順も袋の鼠同樣であるが、如何に露西亞とは云ひながら、流石に白旗を揭げもしない、死を決して居る、さうして海の方は我艦隊に圍まれて居ると云ふことは、島原の兵が西國の諸大名、一時は和蘭の兵など

も加はッて、海上から圍まれたのと同様である。それで黒田細川などの兵が陸の方から攻めたのでありますが、城の後の方に壕を堀ッて、其土を塀のやうに積んで壕の中に這入ッて頻りに石火箭や大砲を打ッた、之が爲めに敵は餘程弱ッた、隨分色々と方法を講じて終には大きな山を方々に拵へた、さうして其上に高い櫓を建てゝ、其處に登ッて二の丸三の丸の中の様子を見ることにした、それで遂に糧食も盡きて幕軍の攻撃に堪兼ねて、殆ど守兵が鏖殺しにされるやうな結果になッたのであります。それ等の模様は、今度旅順の細かい報知が來たならば、大變に能く理解されるであらうと思ッて、今から樂んで待ッて居る。隨分其時にも色々と困難をしまして、或時の如きは幕府の方で大きな穴を城の下に堀ッて、それに十石許りの火藥を詰めて本丸をば海の方に顚覆させやうと云ふ計畫をした、それが宜からうと云ふことであッたけれども、それ程大きな地雷火であッたならば、寄手の方も傷くだらうと云ふので、是れ許りはお止めになつたと云ふことが、細川家の手紙などにありますが、隨分苦心したものである。今日旅順の方で、我日本軍は定めて色々とそんなやうな評議も凝らして居るだらうと思ひます。さう云ふやうに軍の仕方が面白く、且つ明瞭に分るのみならず、今度の軍を見ますると、此前の日清戰役の時、尙ほ蒙古來襲の時であるとか、秀吉の朝鮮征伐の時であるとか、是迄の歴史に於て分明ならざる所の兵站、輸送の事であるとか、衞生の事であるとか、さう云ふ方面の事に吾々が大變に注意を拂ッて見ることが出來る。是迄は漠然と、唯だ軍の外面許りを見て滿足して居ッて、其材料は發現されなかッたけれども、さう云ふ方面から考へると、さう云ふ材料も出て來るので、吾々は其利益を受けつゝある、即ち歴史を研究する上に於て、時局に依て得る所の利益と云ふものは決して鮮くない。けれどもそれはそれとしまして、私はそれを逆に、

古の歴史教育が今日の時局に如何に有効なる働きを爲しつゝあるか

と云ふ事を申上げたい。

私はその賤ヶ岳に行きました時に、大津の三井寺に行ッて書類を調べた、所が其三井寺は恰も大津聯隊の豫備兵、後備兵の宿舍に充てられて居ッた。私が一の部

屋で本をイヂッて居ると、隣りの部屋では士官などが頻りに何か話をして居る。或日の午後四時半頃に私が仕事を仕舞はうとすると、部屋の外に頻りに騒がしい物音がする、怪んで聞きまずると、今愈々明日出發と云ふ命令の下ッた所であると云ふ話です。其日私は京都に歸らうと思ひまして、圓城寺の森の中を通ると、彼方の樹の下に一團、此方の樹の下に一團と人が集まッて居る、それは今思出しても實に感激に堪へないのでありますが、多くの人の妻子か若くは老父母が訣別に來て居るのである。其中を通ッて私は寺の境内を外に出たのでありますが、一面には實に凄惨荒寥の感を起すと同時に、又一面には實に愉快に堪へない所の感を起したのであります。それは他ではない暫くの間さう云ふ人々の集まッて居る中を通ッた間に、固より途切れ途切れてあるが、シト／＼話聲が聞える、或場所を通る時に、もう六十歳位な老夫婦でありましたらうか、一人の出征する者に向ッて、長い話は聞きませぬが―是れも天子様の爲めであるからと云ふ言葉が私の耳に入ッた。此一つの言葉を吾々は如何なる感じを以て聽取ッたかと云ふことは、申上げずとも御推察を願ひたい、其時の感情と云ふものは、私は此處て詳に申上げることは到底出來ませぬ、お話をしやうとすれば涙が先に溢れると云ふやうな事になッて仕舞ふ。其翌日又京都から近江の方に出ました時に、彼の大阪山の眞中に在る所の大谷の停車場に出ますと、昨日見た所の兵隊が新しい軍服を着て、汽車に乘らずに行軍と云ふ扮装で大阪に出て、それから船に乘つたと云ふことであります。其時の有様を愉快に感じたと云ふことは今日も尚ほ忘れられない。其日又大津から北に向ッて行ッたのでありますが、汽車の中で大阪の朝日新聞を見ますると、實に感激に堪へない所の一つの記事が新聞に出て居つたのです。それはどう云ふ記事であるかと言ひまするど、早く朝鮮の方に行つて病氣若くは討死をした人の遺族の話が出て居つた。其未亡人には一人の小さな子供があつた、それて、始終、

お父さんの土産に何貰ふ、
金鵄勳章に敵の首

と云ふ歌を唄つて居つた所が、其出征をした所の人は、金鵄勳章も敵の首も取らずに、遺骸となつて還つて來た。けれども其未亡人は、是れも御國の爲めである、といつて悲まぬ、さうすると子供も、私も早く大きく

なつて、天子樣の兵隊になると言つて居つた。さうして其未亡人も、方々を訪問する所の大阪朝日新聞の社員に向つて、何でも此子供を大きくして軍人にして、又天子樣の御役に立つやうにしたいと言つたと云ふ記事が出て居りましたので、昨日の森の中の景況と合せ較べて、私は一層の感懷に堪へなかつたのである。斯う云ふやうな記事は、其後の新聞を見ると尠からず出て居るのでありますが、それはまだ早い內でありましたから、私は酷く感じて今に記憶に存して居るのである。

近頃の有樣を見ましても、或は野戰病院に於て人事不省の間にも、天皇陛下の万歲を唱へる。或は金州丸、佐渡丸の乘組員の如き、悲慘なる場合に當つても矢張り、天皇陛下万歲を叫んで最後を潔くする。昔の人は死に臨んで如何なる事を叫んだかと云ふと、唯だ南無阿彌陀佛と言つた。昔の南無阿彌陀佛が今日では天皇陛下万歲と一定して仕舞つた。或は兩國橋の眞中で情死をする人でゝもあつたならば、依然として南無阿彌陀佛を唱へるかも知れぬが、非常なる最後を遂げる時には、是れから後は天皇陛下万歲と云ふ言葉が、昔の南無阿彌陀佛に代る言葉であると思つて居る。それから又東京から出征する兵士は、皆かどうか知りませぬが、新橋を立つ前に當つて、二重橋に行つて夜中に万歲を唱へる、暗に天皇陛下に御暇乞を申上げる、さうすると城の壕の上に當つて提灯を振つて、宮中からも、何方か—定めて侍從か何方かでありませうが、之に和して万歲を唱へられる、其時には出征の兵士は何も彼も打忘れて我が君の爲めにと云ふ決心を堅くすると云ふことであります。斯の如き意向と云ふものは、固より君と云ふ者があり、臣と云ふ者があつて國家を爲して居る以上は、何れの國にもあるには相違ありませぬけれども、私は其深厚なる情と云ふものは、到底他の外國に於ては見ることは出來ぬものと信じて宜からうと思ふのです。固より外國の皇室と云ふものは、其臣民に向つて頗る接近せらるゝ度が、日本の皇室と臣民との間よりも多い。即ち其御所を見ましても、或は道の眞中に連つて居るのでありまして、日本の宮中の如く、壕や池で以て奥深く境せられて居るやうな場合は少い。英吉利などは少し日本に近いやうな所がありますけれども、和蘭邊りの皇室などでありますると、町並に在りまして、極く上下の接近と云ふものが著しい譯であります。人民が皇室に向つて万歲を唱へれば

其主權者が皇室の窓から挨拶をせらるゝと云ふことは、隨分新聞の繪などにも書いてあつて御承知でありませうが、是等を見ますると、日本などは上下の間が非常に隔絶して居るやうでありますけれども、併しながら眞逆の時には一命を抛つ、其外何事を抛つても、唯た我が君の爲めと云ふ、極く濃厚なる情に至つては、外國に於ては到底見ることは出來ない。是は二千五百年の歷史を持つて、萬世一系と云ふ、他に比類の無い所の皇室を戴いて居るからして、斯う云ふ美しき情が起るのである。殆ど學問上の理由を以て說明すべからざる情誼が其間に存して居ると云ふことを吾々は許して宜からうと思ひます。

それで武家時代に在りましては、我國民には君主と云ふ者が、一は皇室、一は武家即ち將軍若くは尙ほ其下に大名若くは大名の家老と云ふやうな、或場合には主人が三人も四人もあると云ふやうな事であつた。けれども其封建制度が維新と共に倒れてから以來と云ふものは、是迄自分の直接の主人、大名、家老さう云ふ者が退いて仕舞つて、直接に万世一系の天皇に向つて、忠義の情が現はれると云ふことになつた。之が又實に我國の仕合せな所であつて、維新後の天皇に對する忠義の情と云ふものは、決して万葉集に歌はれてある所の

海行かば水つく屍、山行かば草むす屍、大君のへにこそ死なめ

即ち君主の命を奉じて如何なる處にでも命を棄てると言つて忠義の情を發現したる所の王朝の時代よりも劣つては居らない、立優つて居ると云ふことは、吾々は充分に證明することが出來やうと思ひます。斯う云ふやうな万世一系の皇室に對する國民の情と云ふものが、實に今日の我が出征將士をして非常な働きを爲さしめると云ふ、大きな理由であると云ふことは申すに及ばない事であつて、何時でも東鄕長官、又陸軍の司令官が勅語に奉答する文章の終りには必ず「大元帥陛下の御稜威に依る」と云ふ語が附いて居る。それを尋常一樣の形式の言葉、恐惶謹言と云ふのと同じ意味と見れば見られるでありますけれども、決してさうで無い、即ち今私が申した如く、立派な學問上說明の出來ぬ、意味の深い言葉であるのです。日本外史をお讀みになつた方は御承知でありませうが、賴山陽が北條氏の事を書いた本文に於て、蒙古來襲と云ふ大事件を僅か

一頁か半頁位に簡單な書方をして居るけれども、其終りに至つて有名なる言葉がある、それは『兵之勝敗在人不在器』と云ふ一句である。此簡單なる言葉が此頃にあつて非常に面白味のあると云ふことを感ずるやうな次第であります。

是れから武家の世に在つてのお話をしやうと思ひますが、其前に飛離れて居りますけれども、チヨツと御注意を願つて置きたいのは、彼の滿州鐵道を破壞しやうとして敵の爲めに捕虜となつた所の横川、沖と云ふやうな人、其他近頃又同じ仲間で捕虜となつた人もあるやうでありますが、其等の人が銃殺された時の有樣を見ると、伊企灘が捕虜となつた時に「新羅王我が臀肉を啗へ」と言つて國體を辱めなかつたと云ふ事を聯想するのである。それは小學校の話にもあることであります、其事を知つて居る人は万一捕虜になつても、さうムザ／＼と國體を汚すやうな事は有り得まいと思ひます。假りそめにもそんな事があつたならば、小學校の歴史教育の効能と云ふものは、殆ど無視せられて居ると吾々は認めなければならぬ。

それで武士道と云ふもの丶沿革玆に其一々の例に付ては、此て繰返す時間を持たぬ。併しながら、どう云ふ書物が、淨瑠璃だの軍談師、講釋師などの種本になつて居るかと云ふことを申上げなければならぬ。それは餘り多くの書物でない、僅かであります、早い所で申すと平家物語、源平盛衰記、義經記、それから南北朝になりましては太平記、それから又降つては太閤記、それから上杉と武田との事を書いた所の甲陽軍鑑、それから徳川時代の大久保彦左衛門の譚を書いた所の武藏鐙、それと足利時代から專ら行はれた所の謠曲等が土臺になつて居る。併しながら此謠曲と云ふものは、廣く行はれたものでありますけれども、其謠曲の中の歴史の部分は、何から採つてあるかと申せば、今言ふた平家物語、源平盛衰記、太平記等の書物から種を採つてある。又

大久保彦左衛門

と言へば、硬骨忠勇の志士として三河武士の代表者となつて居る。さうして江戸時代の人間から欽慕せらる丶やうになつたのは、勿論尾に鰭を附けて面白く書いた武藏鐙が本である。それを或は芝居でやり、或は講釋師が述べて居る。それから彦左右衛門自身に書いた所の三河物語と云ふものが面白い。是は歴史上有力な

る材料であると同時に、少し教育のある人が見ると武藏鐙より尙ほ其方が面白い。三河武士の眞面目が躍如として現はれて居る。三河物語を見なければ、三河武士はどうである、斯うであると云ふことは殆ど言へない程のものである。其等の書物が或は高尙なる形に於て現はれ、或は通俗的な翻譯物になつて現はれ、若しくは之が音曲に現はれ、又謠曲の土臺ともなつて現はれて、吾々が今日見る所の武士道となつて居る。

武士道

と云ふものは、維新以前に於ては武士の專有物であつたのでありますが、今日は國民一般に普及して、極く範圍の廣いものである。兩三年以前、武士道と云ふものに付て世間で喧しかつた、どうも甚だ武士道が廢れて居るに依て、今に於て之を鼓吹しなければ前途如何と言はれたのである。今日私が見る所に依ると、武士道の盛んなる發現と云ふものは前古無比、實に今日を以て其最極の點に達して居ると見て宜しからうと思ひます。先づ彥左衞門が三河武士を代表したるが如く、今日迄に出征將士の中で、最も勇ましき死を遂げた所の、彼の廣瀨中佐の事を言つて見やうと思ひます。旅順閉塞隊員の壯烈なる擧動と云ふものは、實に世界の人をして驚かしめたのでありますが、極く手近なる外史を御覽になつても、源平、南北朝あたりに於て、之に似寄つたる先例を見出すとは難からぬと私は思ひます。併し今日私か先例を一々擧けたからと言つて、或は私が言ひ誤りの言葉からして、今日の軍人の非常なる偉功を貶しめると云ふやうにお聞きになつては困る。實に今日の軍人の働振りはえらい、世界万國に卓絕して居るのである。それは則ち我日本歷史があるに基く所以であると云ふことを申す積りであります。私の言葉が足りぬ爲めに、アンダーバリユーすると云ふやうにお取りにならぬことを希望します。彼の廣瀨中佐の擧動は、源平の時で申したらば、義經が暴風雨を冒して讃岐に渡らんとする時に、軍評定が始まつて、梶原が義經のことを猪武者であると言つたと云ふことが外史などに出て居りますが、其時の義經の樣子と能く似て居る。それから義經が鵯越に向つて鹿を二疋放つた所が、一疋は傷き一疋は起つた、そこで『鹿四足、馬四足、等耳』と言つて飛踰えた。さういふ勇敢なる擧動に於て能く似て居る。それから廣瀨中佐が旅順閉塞に行く時に、自分で「七生報國」と云ふことを書いて居る、それを見

れば直ちに楠公の湊川の最後を聯想せざるを得ぬ恐らくは歴史中の人物を標本として居る所は、楠公ではあるまいか、楠公が死を決するに方て『謂正季曰死而何爲曰願七生人間以殺國賊正成欣然曰是獲吾心耦刺而死』と云ふことが外史の上に見えて居る、廣瀨中佐は或之を手本として居つたと云ふことを言つて宜からうと思ひます。或は偶然の暗合であるかも分らぬけれども、私は歴史の研究に從事して居る結果、充分にさう云ふ事を言ひたい、又多分さうであらうと思ひます。それから廣瀨中佐が三度船の中に這入つた、一人の兵曹の見えなかつたのを探がしたけれども、どうしても兵曹が見えない爲めに、端舟に移らうとした途端に、終に敵彈に中つて斃れた。此最後と云ふものが、一段に廣瀨中佐の美を濟して居るのでありますが、如何にもそれは美事なことであるに違ひない、けれども我日本歴史の上には

大將が其士卒を愛することと自分の子の如くす

ると云ふ事は澤山あるのであります。其の一例は或は少々違つて居るかも知れぬが新田義貞が藤島城に戰死した時のことである。僅かの兵を以て援兵に赴いた所が、敵の兵數百騎に出遇つて、敵は飛道具を持つて居るけれども、此方はそれを防ぐ楯が無い、そこで部下の者が義貞の前に行つて身を以て楯と爲して義貞を蔽ふた、此時中野宗昌と云ふ者が、義貞に單身で此處をお退きになつたら宜しからうと言つて勸めた所が、義貞が言つたには、部下の者を苦めて大將獨り去ると云ふことは吾が志に非ずと、斯う言つて馬に鞭つて前進した所が、白羽の箭が中つて終に最後を遂げたと云ふことであります。義貞は固より勤王の士である、天子からして『討賊之役朕一煩卿』と云ふ宸翰を賜つた人である。さうして今申した如く、自分一人逃れるは吾が志に非ずと言つて、進んで斃れる位の人であるから、自然部下の者も敬愛するやうになつて、身を以て義貞を蔽ふて自分が斃れると云ふことになる。廣瀨中佐のみならず、新聞の傳ふる所に依て見ると、一般に南北朝時代若くは源平時代の猛將勇將を手本にして居るかの如く見えるのである。大きな所に至つては北條時宗、豐太閤の如き人を慕つて居る人もありませうけれども、下の士官若くは下士卒などの多數に至りますると、自ら

正成、義經、八幡太郎、辨慶と云ふやうな人が模範的の人間になつて居るらしく思はれる。近頃去る教育雜誌に或小學校に於て理想として居る所の人間を子供に投票させた所が、楠正成が最高點て、女子の方では紫式部が最高點であつたと云ふことを報じて居りましたが、それは啻に小學校の生徒のみならず、矢張り下士卒などの多數の人の理想となつて居ることであらうと思ひます。

御承知の通りに、最近數年間に於て教育の進歩と云ふものは實に著しいものでありまして、三十四年の徵兵檢査の結果に依て見まするると、自分の姓名を自記し得ざる者の數は極めて少い、て前申した風の結果と云ふものは何であるかと言へば、小學校で受けた所の歴史教育若くはそれに作隨して居る所の修身教育、左もなくば社會教育としての淨瑠璃なり、芝居なり、講釋なり、軍談なり、乃至祭文でも、チヨボクレでも、何でもさう云ふものから受けた所の利益、或は最も手近い所の昔噺などから受けた所の利益であつて、要するに形こそ變はれ、歴史教育の結果と言つて間違ひは無いのである。て廣瀨中佐が下に向つてさう云ふ風の憐みを盡されたと云ふことは、實に結構なことでありますからして、之と同時に士卒の方に就ても、隨分是れに譲らない所の美談と云ふものを續々新聞紙は傳へるのであります。それは南山の激戰の時に、第一聯隊長の小原大佐が負傷をした、新聞に其時の記事が出て居りましたが、今の義貞の話に餘り能く似て居りますから私は其新聞を切抜いて置きましたが、斯う云ふ事であります。即ち軍旗を持つて居る者も斃れて仕舞つたから、已むを得ず軍旗をば稍々後の方に退けて、小原大佐自身も少し退却をした、此退却をする迄に如何に多くの猛將勇卒が斃れたかは推察が出來ることである、此時に二名の兵卒が來て、小原聯隊長を救はんとて其身を以て鐵砲丸の楯になつた、恰も義貞の藤島に於ける時の有樣と同じて、小原大佐が退けと言はれたけれども、兵士の言ふには吾々は丸が中つても宜しうございますが、聯隊長殿は吾々とは違ふからと云ふて、無理に聯隊長の兩足を引つ張つて危險を避けしめた。此猛烈なる敵彈の下に於て、己れを犧牲にして聯隊長を救はんとする

其精神は、全く歴史教育

の結果に因ると言はなければならぬ。實に感嘆措く能はざる所の振舞ひである、私は此記事を見ても新田義貞の戰死が思遣られるのである。又是れと同じやうな例ば、彼の源平屋島の戰に、義經が自分の弓を流して、それを鞭にて拾はうとする時に、敵が頻りに攻掛けて來た、能登守教經が義經に向つて箭を番へた時に、佐藤嗣信が身を以て義經を蔽ふて仆れたと云ふことがある、是は名高い話で繪にも書いてある。また次の樣な事も歷史上に在るのであります、永い間專ら行はれた所の、追腹を切る即ち大將が死ぬと、必ず其の馬前に於て腹を切つてお供をして行かなければならぬと云ふ風が、終には太平の御世になつて迄、主人が死ぬと其恩愛を蒙つた者は二君に仕ることは出來ぬと言つて、殊更に追腹を切ると云ふことが習慣になつた、死んでどうするかと言へば、彼の世に御供をする、一向あてにならぬ事でありますが、併しさう云ふ事が行はれた、主人の爲めに命を棄てると云ふ習慣が太平の御世になつても續いて居つた。それから仇討などと云ふことも大變稱讚を受けるやうになつて來た。尤も此仇を討つのと追腹を切るのとは太平の世になつては宜しくないと云ふので、追腹を切るのは、四代將軍の時に禁ぜられて居ります。仇を討つと云ふ方は德川時代に在つては積極的に奬勵はしないけれども、消極的に禁じはしない。太平の世になつては或は習慣と看做されるけれども、其起りを遡つて見ると、戰場に出て君の馬前に於て必ず討死をする所から稱美したことを忘れてはならない。それて今日の時局の有樣などを見ましても、隨分日本の軍人は勇ましい死を遂げて居る話が多いのでありますが、是れも歷史をお讀みになつた御方は直きに彼の三形原の戰爭を聯想されるのである。甲州の武田信玄の家來共は、三河武士の屈强なるには殆ど舌を捲いたのである。三河武士の死骸は北即ち甲州の方を向いて居るものは皆俯伏しに仆れて居る、濱松の方に頭をやつて仆れて居るものは皆空を仰いで仆れて居る、實に死ぬ時迄も三河武士と云ふ者はえらいものであると言つてある。それが軍談講釋などにも敷衍されてあるのでありますが、是は一歩も退却しない、死に至る迄常に先きへ〳〵進むと云ふ氣性を現はして居ることを言つたのであります。之に似寄つた擧動が今日の我忠勇なる士卒の中には餘程多いやうに思はれる。

時局に對する婦人の感情

はどうであるかと言ひますれば、是れも極く最近の讀賣新聞の雜報に出て居つた事でありますが、名古屋市の或老母が、自分の長男が後備兵として出征するに當つて、潔く立たせ、其後て、赤穗義士の話にも斯う云ふのがあつたと言つて、先月の十九日の午後九時頃に自分は短刀て自殺をして仕舞ひ、生前其趣を出征して居る所の息子に報知して後顧の憂なからしめ、充分に君國の爲めに働けと言ふてやつたと云ふ事であります。其擧動と云ふものは少し常道を逸したと云ふ非難が無いでもありますまい。又多くの場合に於て自殺と云ふものは稱讃すべきものでないと云ふことも繰返されるてありませう、若し狂人と言はゞ言へるでせう。けれども彼の南北朝時代の婦人の代表者と言はれて居る所の瓜生保の母の擧動を考へて見ると分る、若し之に劣るまい之を凌駕しやうと云ふ精神の婦人てあつたならば、恐らくは精神の變調を來たすてあらうと思ふ、瓜生保の母は二人の子供を戰場に出して、其が二人共討死をした、けれども新田義治に向つて若し我が子が皆還つたならば申譯がない、實に子供の力めざるが爲めに里見公を亡つたけれども、二人の子供がお供をしたのは責めてものことであると言つて歡んで、敗軍の將士に酒を献じたと云ふ美談がある。是は固より婦人教育の上に於て模範にされて居る、若し今の老母にして之を知つてやつたとしたならばどうですか、我は又斯う云ふ非常の場合に於て、思はず知らずやつたのであるとしても心の中には万斛の涙を吞んでも、出陣する時には潔く立たせたと云ふのは、露西亞の停車場で出征兵士の細君、阿母さんが其頸に抱き附いて泣くと云ふのと大いに趣を異にして居る。其腹の中には勿論親子の情愛はありませうけれども、之を抑へて國の爲め君の爲めに潔く命を棄てゝ來いと云ふ、瓜生保の母の擧動に倣ふ婦人のあるのは吾々は大いに心強く思はれるのである。

是迄は專ら忠勇と云ふ側の方の事を言つたのでありますが、是より少し方角を更へまして、

禮儀廉耻

と云ふやうな精神が、此頃の新聞に依て見ると大變に多いと云ふとを申さうと思ひます。例へばマカロフが死ぬと日本の新聞が筆を揃へて褒める、或人は西洋と

の戰爭であるが爲めに務めて居るのだと云ふやうな事を言ふ。又松山の病院に於て敵の捕虜が大變に優待される、是れも西洋諸國に向つて御附合上彼様やつて居るのであらうと云ふやうな事を、餘り大きな聲ではありませぬけれども言ふ人がある。併し私はそれは非常な間違ひであると思ひます。さう云ふやうに、敵將の死を愍み、敵の捕虜を厚遇すると云ふやうな事は、他國には知らず、吾々の先祖が多くやつて居るのです。そんなに細かい例を申すにも及ばない、彼の上杉謙信と武田信玄とは久しい間の仇敵である、丁度日本と露西亞との如き關係で永く續いて居つた、所が信玄は今川と北條との聯合軍に攻められて鹽を送る途を絶たれた、そこで謙信は自分の仇であるけれども鹽を甲州に贈つたと云ふことである。此謙信は餘程義俠の人であつた、其美談と云ふものは色々な形に於て傳つて居る。固より高尚なる歴史の研究の上から見れば、信玄と謙信とでは信玄の方を立優つた成績の多い人と見るのでありますが、併しながら普通教育、殊に社會教育に於ては信玄の方は可けないもの、謙信の方がえらい人、强い人になつて居るのであります。即ち謙信と云ふ者が歴史教育の標本になつて居るのです。

近衞師團並に第四師團などは出征前迄は餘り好い評判は受けて居なかつたのです、殊に第四師團の如きは所謂上方人が多數を占めて居るので、他からは輕蔑の念を以て迎へられて居つたやうでありますけれども、其幾分かの嘲りと云ふものが如何なる結果を現はして居るかと云ふと、矢張り南山の戰で分るのであります。其時に或大隊長の話に、我師團も此一戰で以て名譽回復と云ふものが出來た、それて大隊長から部下の將卒に向つて、實に御苦勞であると云ふ挨拶があつた、けれども部下の者は實に此簡短なる一語の爲めに、生存して居る者は涙を流して、尙ほ此稱讚を再び受けやうと云ふ決心を起し、死せる者も大隊長の此一語を得たならば悦んで瞑目するであらうと云ふ通信が新聞に出て居る。是等の恥に向つての抵抗心と云ふものは實に近頃に於て著しきものであらうと思ひます。之を以て見ても、源平の戰に於て兩軍互に鎬を削つて戰ひ、又南北朝に於て、新田足利と云ふやうに、關東に於て互に顏を見知り、若くは名を聞合つて居るやうな連中の戰であるに依て、恐らく非常なる働きをして、從て死骸も多かつたであらうと云ふやうな事も、吾々は直ぐに聯想するのである。それから又金州丸の時にもさう

云ふ事を聞きましたが、近頃の佐渡丸の最後に於きましても、星野少佐は泰然として、若しも敵の大將が此方に來た時には、見苦しいと言つて、船中に散亂れて居る物品を皆海中に棄てゝ、部屋の掃除をしたと云ふことである。其事は

壇浦の役に、知盛が

關東兵に笑はれてはならぬと言つて、船中を掃除して悉く汚物を棄てたと云ふ先例と、符節を合せた樣に思ふ。さう云ふ樣に我將校は非常に忠勇で、又最後の場合に當つても一絲亂れずと云ふやうな、整然たる擧動をするのでありますが、同じく南山の戰役に於て捕虜となつた敵の或中佐の如きは、日本人に向つて如何樣なる苦役に從事するも苦しくないに依て、死だけを免かれたいと云ひ、又捕虜の或者は頻りに日本人に御世辭を使つて、手に接吻を試みて擲られたと云ふやうな話もある、我軍に於てはさう云ふ者は恐らくあるまいと思ひます。併し歴史中には不幸にして露西亞の將校の如き人が一人ある、それは誰かと云ふと平宗盛先生である。宗盛は傘屋の子であると言はれたのであるが、戰に於て死ぬべき場所で死なずに、阿容〳〵鎌倉に引張られて賴朝の前に置かれた、けれ共一向に臆せず、命を助けられたいと請ふた。賴朝は切腹をさせる積りであつたけれ共、一向感じが無い、感じても知らざる裝風をふて居つたのかどうか、兎も角も平氣で居るから、俎の上に魚を置き刀を加へて諷示した、それでもどうしても分らぬと云ふ樣な無神經の男である、恰も露西亞の中佐のやうな人である。併し今日我軍には幸にさう云ふ人は一人もありませぬから御安心を願ひたい。

露西亞の死傷者を保護し、若くは捕虜を優遇することの例として、謙信が鹽を贈つた事を申しましたが、また謙信が信玄の死んだことを聞き、箸を投じて吾好敵手を失つたと言つて歎じた事もある、如何にも我將士が敵將のマカロフを弔つたのと同じやうな話ではないかと思ひます。

また家康と信長と一緒に勝賴の首を見た、

其時に信長は傲然と勝賴の首を見たが、家康は床几を下りて其首に恭く禮をしたと云ふことであります。信長の方は少しく宜しくない例でありますが、それは嘘であつて、信長が勝賴の首に對して極めて不敬であつ

たと云ふことは事實無い話であります、是は如何樣にも證據立てられる。之に反して家康が勝頼の首に向つて敬禮を表したと云ふことは僅かに言へる、敵ながらもさう云ふ風に禮儀作法のあるものであります。又毎々繰返しますが、藤島の戰に義貞が死んだのは敵の流矢に中つて死んだのでありますが、其首を持つて來ても始めは義貞であるかどうか分らなかつた、けれどもに外の者と違つて扮装が立派であつたから、是は常人ではあるまいと云ふので段々詮議をした、若し義貞であれば左の眉に傷痕があるに違ひない、そこで其面を洗はせて見た所が、果して傷痕があつた、尚ほ例の宸翰の勅書を持つて居つたので其義貞なることが分つた。それから足利尊氏は寺僧をして供養を營ましめて、其首は敵將の首でありますから、京都に送つて獄門に梟すると云ふことになつた、是はどうも已むを得ぬことでありますが、兎に角其場合に於て許す限りは敬禮を表して居ると云ふことは吾々認むることが出來やうと思ひます。

それから又是れも講釋師が立派な侍の禮儀として話すことでありますが、關ヶ原の戰ひに鳥居元忠が伏見城に籠つて居つた、其處に雜賀孫一が攻めて來た、其時鳥居元忠が呼ばつて、我れは鳥居彥右衛門である、汝我が首を得て功名をせよと云ふた所が、雜賀孫一は後に下つて鳥居と云ふ御大將の御名は聞いて居る、貴方の如き御身分のある御方を吾々の手に掛けると云ふことは實に心苦しい、どうぞ御自身に御最後を遂げられて、某に御首を賜はられたいと言ふた所が、鳥居彥右衛門も尤もだと言つて、直ちに腹を切つて自分の首を敵に取らせたいと云ふことがある。實に武士道の禮儀は斯う云ふ事であるのであります。今日吾々が擊劍の試合を見ますると、妙に御辭儀をしたり何かするのは可笑しいやうでありますが、是れも眞の武士道の禮儀作法から出たものであると云ふことを思合はすことが出來やうと思ひます。又攝津の住吉の戰でありますが、楠正行が敵將山名時氏の兵を大阪迄追擊した、敵の軍が淀川に溺れたものですから、それを援けて――日本外史に依て見ましても溺卒五百人に衣甲を與へて禮を盡して還へしたと云ふことになつて居る、是等の擧動をした所の人間と云ふ者は、卑近なる歷史教育に於て敬慕されて居るのでありますから、敵の捕虜を優遇するとか、傷いた者を保護してやるとか、マカロフの死を悼んだとか云ふ事を以て、西洋各國に對して御世辭にやるのであると云ふのは、吾々歷史教育に從事

して居る者を輕蔑したものである。

尙ほ高野山に行つて見ると、奥の院に行く迄十八町の間と云ふものは兩側に石塔が並列してある、而して左側の方に一つの大きな角石が建つてある、それは島津家で以て朝鮮征伐の時に慘らしき殺され方をした朝鮮人の冥福を祈る爲めに建てられたものである、是等の思想と云ふものは決して西洋の思想が入つて來てから日本人が眞似をしたと云ふ譯では無いのであります。西洋に行つて見ますると、英吉利が埃及を征伐した時に、向ふのオベリスクを持つて來て墓地に建て居る。また佛蘭西でも其樣な事をして居る、けれども其意味が違ふ。併し埃及人が若しテイムスの川岸に大きな三角塔が建つてあるのを見たならば、愉快な感じが起るでありませう、又今日朝鮮人が高野山に行つて島津家の建てられた石塔を見たならば感謝の意を表するのであらうと思ひます。斯う云ふやうに禮儀作法の擧動と云ふものは、啻に西洋の禮であるのみならず、實に吾々の祖先と云ふ者は、それよりも一歩進んだ所の擧動をして居るのであります。」

斯樣な事柄に就いて、古と今とを對比して御話をすると、私の記憶に存して居るものゝみでも隨分長く掛りますから、例を擧げることは此位にして置いて、今迄申した事を簡短に繰返しますれば、詰り私の考へる所では今日の連戰連捷の結果と云ふものは、色々の理由があることでありませうけれども、教育の結果が現はれて居ることが著しいのである。其教育と云ふものは歴史の本體竝に修身、國語等に現はれて居る所の、即ち

歴史に種を有ッて居る所の教育

と云ふ者が餘程與つて力のあることであると思ひます。然るに如何に時局の爲め經費節減を要するとは言ひながら、或地方に於きましては教育費に削減を加へた、殊に普通教育に向つて大なる削減を加へて之が爲めに學校教師の數を減じ、さうして二部教授をやつて居ると云ふ、已むを得ぬことゝは云ひながら、實に今後愈々盛にしなければならぬ所の日本の教育を經營する方針としては、吾々は甚だ感服をしないのである。他の或費目を減ずることが出來るのならば、教育費の方を減ぜずに、他の費目を減ずるやうな方針を執つて貰ひたいと希望するのであります。幸に文部次官も御出でになつて居りますから、此席で申上げるのは失禮であ

りますけれども、私は今日大變に好機會を得たのを悦ぶのであります。小學教育は勿論のことであるが、此帝國教育會に於いて學事取調會と云ふものがあつて、其決議として中等教育に於て歴史科の教材を減ずる、特に高等女學校に於て歴史の廢止をすると云ふやうな建議にもなつて居ります。是は私は贊成をしない。今日の日露戰爭が豫定通り立派に終局を告げると、此前に私が演說した如く、成功が大きければ大きい程、我國の外國に向つての心配と云ふものが重くなる。それて國民の意思を強くしなければならぬ、それには一般の教育は勿論、殊に歴史教育と云ふものが必要なものである。此場合に方て歴史科の教材を減ずると云ふやうな事は甚だ宜しからぬことである。寧ろ歴史科の教材と云ふものを增加しなければならぬ場合である、尤も歴史本部に於て減じても、之を修身なり、國語なりに持つて行くと云ふことであれば、吾々は一向異存はありませぬけれども、さう云ふことをせずに唯だ歴史科の教材を減ずると云ふことであつては吾々は反對をしなければならぬ。尤も教育會からは吾々の所に原案を回して越しましたけれども、私は其席に行つて自分の說を述べることが出來なかつた、それは遺憾ではありますけれども、已むを得ぬことである。併しながら其席に出なかつた者は、それが惡いと言つて反對を唱へることは出來ぬと云ふ譯も無いのでありますから、私は飽迄も反對を唱へるのであります。今後は歴史的の通俗教育と云ふものは尙ほ一層注意しなければならないと思ひます。それはどう云ふ事であるかと言ひますると、今日の戰爭が思ふ通りに局を結ぶと云ふことになりまするど、今日は沈靜して居る社會は戰後に其反動を來して、如何に節しても**芝居、寄席、軍談、講釋又小說**などが續々出來て來るであらうと思ひます。是等社會教育になる所の材料として、歴史の中から面白いものを擇んで來る、即ちそれは歴史教育を通俗的に普及するのであると云ふとの考をば一般に持つて貰ひたい。私は斯う云ふことには文部省は隨分干渉をしても宜しいものであらうと思ふ、故外山博士が文部大臣で居られた時に、警視廳は頻りに**寄席の取締**

をすると云ふことがありましたけれども、それは事實嘘であつた。若し今後歴史の通俗教育と云ふものに重きを置かうと思へば、當局者に於てさう云ふ側にも幾分の干渉を試みられると云ふとは、決して悪くない事であらう、少くとも提灯行列に向つて加へる位の注意は、寄席に向つても加へられることにしたいと思ひます。そこで歴史教育と云ふものが、今日の時局の爲めには大いに與つて力がある、今後も日本に於ては歴史教育を十分皷吹しなければならない、それは固より一般の智育、躰育と伴ふべきものであることは申す迄もないことゝ思ひます、

（完）

水の說

岩谷小波

最も有りふれた者て、而も最も貴重なものは、即ち水てはあるまいか。酸素と水素の加合物などゝ、その成分を解剖せずとも、若し此の世界に水なるものが、一滴も無く成つた曉には、人類と云はず獸類と云はず、動物と云はず植物と云はず、凡そ生きとし生ける者、殘らず御陀佛に成らざるを得まい。

一寸世界圖なる物を見ても解る。東西両半球の大部分は、即ち水色も畫せられ、これに五大洲各地に於ける、湖水、河川を加へ、更に地の下何尺か掘れば、至る所に水の出る所を見れば、世界は水の世界と云つても、強ち無理もあるまいか。

さてこの水の貴重なる所以は、之を飲用に供する點に於て、已に認められる所であるか、更に之が大功德は、其力の利用に現はれるのである。

水力の利用とは、取りも直さず船舶の運用を云ふのて。世界に於ける國々の進歩が、水力の利用の巧拙に依つて、其の度を異にして居る事は、何人も認め得る所てある。

古代に於けるフキニシャの文明、近くは英國の隆盛、それ等が皆水力の利用、即ち船舶の運用にその妙を得て居た故てある。

また各地の都なるものゝ側には、必ず川が流れて居る。そしてその都會の進歩は、この河流と正比例をして居るのを見ても、水力の人化に及ぼす功德の、決して少からぬを知る可してある。

早い話が、今度の日露の戰爭の如きも、ある意味から解釋すると、一種の水爭ひなるものだ。由來露西亞と云ふ國は、古から水に渴して居る。それは地圖を見ると直ぐ解るが、露西亞は國の位置として、海と云ふものを多く持たない。否、持たぬ事は無いけれども、

その海たるや大方氷澤山て、飲むにも不便なら、力の利用も一向出來無い。

そこて多年智慧(無論惡智慧)を搾つた揚句、遼東半島を乘取つて、此所に旅順口と云ふ口を開き、年來渇望して居つた、支那海の水を飲む、否、その水力を利用する事が出來たのてある。

無論彼は、太平洋の水も飲み度い、太西洋の水も利用したいのてある。が、其方面は堅く閉されて居り、とても手の出し樣が無いので、取りあへず支那海の水を以て、當分我慢をせねば成らぬ次第だ。

而もまた彼露西亞は、次に朝鮮をも手に入れて、日本海方面にも、然る可き水飲所を作らうとして居た。是が即ち今度の戰爭の、大きな元因に成つたのてある。

蓋し我が日本の立場から云ふと、日本海は無論の事、支那海及太平洋の一部を、當然自個の水飲所にせねばならぬ。また現に仕つゝあるのだが、其所へ餘計な邪魔者が、横合から差出て來て、勝手に水を濁されては、所詮默つてうつちやつては置けない。

是が即ち今度の戰爭を、水爭てと云つた所以てあるが、さてこの水爭が、今後何う決着するかゞ、さし詰め問題となるのてある。

が、それは委しく云ふまでも無く、常から水心ある者が、水爭も利を占める道理てある。さればこの日露の兩國、果して何れが水心に長けて居るか。云ふまでも無く我國は、四面海の島國てある。云はゞ大きな船の如き者だ。苟も此國に民たる者の、水心無くして濟まされうか。

さればこそ今までの所、戰爭は着々我が利に歸して、支那海に於ける制海權は、已に我が有に成つたては無いか。

が、玆に聊か懸念すべきは、戰時によく水力を利用し得た我邦が、平時にも猶よく水力を利用し得る乎。即ち此點てある。

由來我日本の武國にして、戰爭には不思議に長じて居るが、外交乃至商業に於ては、殘念ながらそれと反比例を呈して居る。さればたとひ此際に、見事武力を以て制海權を得ても、平時の商業上に於て、何者にかこの權を橫奪されたら如何だ。それこそ大骨折つて。鷹の餌、差引草臥儲と成つて、天下の胡盧となるに過ぎない。

於是乎余は思ふ、苟も海國たる我が日本は、今日以後ます〳〵進んで。水に親しみ、水を究めて、前よりも一層二層の、水力利用に從事すべき事を。

さるにわが國民の、四面に水を扣へながら、猶且つ川柳の愚を學んで、その水の流れをのみ眺め、遂に之を利用するを知らなければ、憐む可し我が邦は、到底世界見ずと成つて、見す〳〵餘所の狡猾見に、うまい汁、てはない水を、飲み盡されてしまふてあらう。

水なる哉、水なる哉、感ずる所あつて水の說を作る。

(基督教青年會雇人歡迎會に於て話したる概要なり)

海外新潮

歐人の眼に映したる日露戰爭

海外大勢

日露戰爭とウイッテ氏

（一九〇四年五月廿五日 チスウオホデテーニエ）

和蘭にて發行せらるゝ「アルゲ、ハンドレスブラッド」新聞の編輯長シヤルル、ブワーセウエン氏は露都、聖彼得堡に於て露國內閣會議々長ウイッテを訪ひ時局問題に就き談話する所ありしがウイッテ氏は終に自己の胸中を吐露して曰く

予は始めより露國の爲め平和なる商工業發達の主唱者にして開戰の反對論者なり故に我露國か旅順口を占領したるの當時に於て予は之に異論を挾みたるなり然るに衆論は予の意見を容れさりき是より先き日本人は太平洋に於ける優勝權の爲めに露國と一戰を試みんと欲し既に久しく戰鬪準備に鞅掌し我露國の軍備未た或る程度に達せさるに乘して砲火を開かんことを企圖せしか會ゝ我露國か旅順口占領の擧に出てたるを視、此れ實に天與の好機にして亦好個の口實なりとし乃ら意を決して戰を開きたるなり是れ予か當路大臣と意見の合はさるを以て大藏大臣の職を辭したる所以なり

と言ひ畢りてウイッテは喟然として歎して曰く予は母國の商工業を發達し朝野士民の爲めに厚生利用の道を樹てんと欲し過去十年苦慮盡瘁して國庫に貯存せる其資財を今盡く軍用に充るの已むを得さるに至れり又予か西伯利の山河を橫斷し大鐵道を太平洋まて敷設したりとて予に今回の開戰に於ける責任を負はしめんとするもの有れとも此れ實に寃枉の極なりと云ふへし喩へは假りに予を一學校の教員として我か生徒中シエクスピヤの作を撰み何等歟の演劇外題を想定するもの有りとせん乎此の時に方り予は細心注意して如何に玆より趣味ある演劇を實現する歟を觀んと欲す然るに此瞬間に生徒は竊かに予の背後より劇場を去りて最寄の喫茶店に闖入し同店の玻璃窓を破りたらんか此場合に於ては脚本の原作者たるシエクピヤ罪ある歟抑ゝ又其舞臺に上りし生徒の罪なる乎予の計畫せる西伯利鐵道に於けるも亦然り予は始めより此の大鐵道をせめて浦鹽斯德まて貫通するの心算にして清國の門戶を開放して和蘭、獨逸、英國其他の列國の爲めに共通貿易場たらしめんことを希圖したるなり予は初めより旅順口を掌握するの企圖あらさりしなり予は商工業を以て經國の本となし兵力を以て其の末となせり然し今回の戰爭は之を文學に喩ふれは小品の拔萃に過きすして長篇大作と云ふ可からす今や我露は數度の戰に利あらさるか如くなるも內國の生產力は無盡藏なるを以て將來に於ける我露國の利益に多大の影響を及ほすこと無かるへし我露國の富力は今日に在りては未た幼穉なれとも一旦平和克復せは富强の實將さに益ゝ擧るへし

此の如く露國內閣會議議長ウイッテ氏は世界公衆に對して露國の東亞に

於ける政策施行の結果遂に今日あるを致したる其責任を擔さんことに實を用ゐ居れるか此れ固より同氏か西伯利鐵道敷設計畫の爲めに自己の發畧を汚かされんことを恐れて躊躇する所なるもウイツテ氏の我か露國東亞政策に對する意見は全く判然ならす然し今日に至るまでは氏を旅順口占領主張者派と同 興味の人なるべしと思料すへき事由なきにあらす我か露國政策の動作は總ての場合に於て過る五年間同氏をして大藏大臣の職に在るを妨けさりしか如きは亦其の一事由なるへし吾人の思攷する所を以てせはウイツテ氏か大藏大臣の職を辭したるは此東亞に於ける日露の衝突問題に因由すと云ふよりも寧ろ他の或る事情に因るものなるへし、蓋しウイツテか他の或る大臣等と共に大守府を極東に設置することには全く反對の意見を有せるは既に衆庶の知る所なり然れとも同氏並他の大臣中一人も自己の地位を犧牲にして以て其設置の無用なるを廟堂の上に正色抗議したるもの之なきは爭ふ可らす特に此事はアレクセーフ、ベゾブラゾフ一派が深く相結託して種々陰險なる行爲を肆まにし此二氏とウイツテ氏との間に横はれる反目嫉視の關係を解除すへき地位に立てるクロパトキン將軍の尤も希望せる所にして將軍はウイツテ氏等の平和派か中朝に立ちアレクセーフ等の黨與か外に出るときは其朋黨反目の念慮自から氷釋し國家の經理上却て利益なるへしと觀念したれは極東に大守職を設置することには強ゐて反對せさりき



軍神—"黒鳩,一躰お前は何處に行くんじや"
黒鳩—"ハイ,後ろに居る奴を追うて世界を廻るのですよ"

佛國「エコー、ド、パリス」新聞の一記者か偶ゝウイツテ氏を訪問したるに今や氏は全く大藏大臣の要位を捨て閑職に在るか如くなるも而かも軍費借入の困難なる問題は新たに氏を起こして其手腕を振はしめさるを得さることゝなれり

ウイツテ氏は理財貨殖の事業に就ては實に獨得才識を具有せるを以て露國の財政困難を告け複雜を重ぬるに隨ひ氏の手腕を待つ所の要は亦益ゝ多きを加ふ露國在朝中の高官貴紳中に在りて深く國民一般の信用を得歐洲列國及米國に於る理財界に敬重屬望せらるゝもウイツテ氏の右に出る者恐らく之無かるへし左れは氏か露國内外の重大なる政事經濟の爲に再び政府の樞機を把握し朝野の重望を一身に繋ぐ可時期は既に目睫の間に在り然るに前記「エコード、パリス」新聞の報告と相前後して余輩の落手せる通信に依れはウイツテ

氏は自ら告白して云く元來日露談判の破裂前に予は皇帝に對し既に今日の禍難あるへきを奏聞したるに事實は予の言ふ所に違はす國步の艱難益〻甚しきを加へたるに依り皇帝陛下にも恐らくは大事既に去りたる後今直に予を起し給ふと無かるへく予も亦直に其召命に應し難き事情なくんはあらす然れとも吾人は固く信すウイッテ氏か先見の明此の如く夫れ透徹せり此の寧馨兒豈に好んて今日の如く渾沌として綱紀紊亂せる露國の朝廷に入り群小朋黨の渦中に投するの愚を爲さんや倡れ若し內閣に入るとせは必すや媾和の後最も財政の盤根錯節なる時機に於て冠帽を彈くへし此の時こそ氏か魁偉絕得の才幹を顯はして以て戰後の財政料理上に成効すへけれ吾人は氏の行藏に就き今より刮目して注視を怠らさるへし

公海に水雷を布設することの可否を論ず

「リテラリー、ダイゼスト誌」

「六月四日」

日本が旅順の港口に水雷を布設し、以てペトロパヴロスクを破壞したる當時露國の內務大臣デ、プレーヴ氏は大に憤慨して叫んて曰く「世界の通商に要する航路に近く、かゝる危險なる水雷を布設するは、實に世界の災害にして若し流れて公海に出てんか彼將た奈何せんとするや。是れ寔に許すへからざるの所置なり」と。

然れども露國の旅順總督は內務大臣とは異なりたる思想を抱けると覺ぼし、何となれば彼は日本艦隊の航路に添うて浮泳水雷を散布し、其二つを以て初瀨及び吉野を沈沒せしめ、其時爆裂せざる他の水雷は皆浮びて其近邊を流れたりといひ傳へらるゝを以てなり。ロンドン、タイムス通信員の端艇は旅順を去る百哩の地に於て水雷の二つの過ぐるを見、シカゴ、デーリー、ニユースの端艇は其八つを見、支那の船舶は十二以上の水雷に逢へりといふ。海洋の潮流は太平洋のあらゆる所に之を運び、其危險は延いて中立國の商船に及ぼさんなれば之が爲めに憤慨するもの漸く多く、其可否に就て論ずるもの少からざるに至れり。

ロンドン、タイムス、及びニユーヨルク、タイムス の通信員はいふ。「旅順港に於ける露國人は皆狂氣となり、以て今回の如き浮泳水雷を布設するの狂惡なる事をなせるなるべし、露人は此兇器を單に自國の海岸又は自國の海洋に布設せるのみならず又之れを船舶に載せて遠く海中に出て夜中霧深きに乘じて日本艦隊及び運送船の航路たるべしと思ふ所に置けるといはる、此等の水雷は公海又は支那海に出て中立國の船舶に對して非常なる災害を釀さんとす。如何に狂氣なる守兵の處置なりとするも是れ明かに國民の法則を破りたるものといはざるべからず、日本は其全力を盡したり而かも終に此惡業によりて三隻の船艦を失へり、如何なる明智ありと雖も公海に浮び出てし此兇器を防ぐの術なかるべきなり」

フヰラデルフイア、レッヂヤーは「水雷を公海に布設するは許すべからざる人道の破却なり」と論じ、ニユーヨルク、イーヴニング、ポストは「國民は死に陷るべき兇器の布設したる海上を航行せざるべからざるか」といひ、又スタンダード、ユニオンハ、「公海に於て水雷を布設するは實際上中立國に向て戰爭を宣言するに同じ、露國のかゝる無法なる行爲は單に文明國の同情と好意とを減殺するに終るべきのみ」と論じ、フイラデルフイア、インクワイラーは之に附加して「若し露國水雷が中立國の船艦を沈沒せしむること初瀨の如くならば露國は如何なる災厄に陷るべきか」といへり。

オックスフホールドに於ける國際法及び外交史の教授トーマス、アースキン、ホーランド氏はロンドン、タイムスに報じて曰く「戰爭の際と雖も水雷の如き兇器を公海に布設するは如何なる國際法も決して之を許さざる所なり」と

英國海軍のホルセイ將軍は又ロンドン、タイムスに書を寄せて曰く、「領海を超え公海に於て水雷を布設するは、ひとり人道に背反するのみならず、又實に國際法を無視したるものといはざるべからず、何となれば公海なるものはヴアテルに於て記せられたる如くあらゆる國民の共通財産なればなり、彼の初瀬を破壞したる水雷は或は其近海を航行する中立國の戰艦又は商船を破壞することなしとも限らず、若し吾等英人が戰鬪を開けるとき其領海を越えて英吉利海峽に水雷を布設し、以て中立國の危險を釀すをあらば如何なるべき、若し世に傳はる如く初瀬艦の沈沒は陸を去る十哩の公海に於て水雷にかゝりたりとすれば露國の行爲は實に全くの暗殺と罪を同じうするのみならず又人類全躰の敵として罰せざるべからざるなり」と

サー、ジヨン、マクドネル氏はニユーヨルク、タイムスの通信員に語つて曰く、「海戰に於ては今は昔と異なり、戰鬪國の蠶食を恐れて、中立國の結合するが如きことは最早や決して見ざるに至れり、單に一國又は二國が强大なる海軍を有せんとするときは他の國民は皆合同して之を防止するが如き行動をとれり、彼等は公海に於ける中立權の減少を妨ましく思ひたればなれり、然れども今は總ての狀態は一變化せり、多數の國民は强大なる艦隊を有し、且つ之を益々强大にせんとするの希望を有す。かゝるが故に彼等が若し海上權を増さんとするの望あれば、今回の如き擧を批難することを躊躇すべし、何となれば彼等が今日中立國として損害を蒙る所の行爲は他日自國の戰爭をなす時に當て敵國に應用して大いなる利益を受くべき所の擧なればなり」と



獨乙首相ビユーロー伯の中立

紐育發行のアメリカンも亦同一の疑を呈出して曰く、「戰爭の如き死活の道に處する國は專ら最後の勝利を得るの機會を見出さんことを勉め、條約の嚴格なる意義に拘泥して戰爭に與からざる國の不利を顧みるの遑なかるべきなり、若し非戰國の船舶が水雷にかゝりて破壞せられしとき、其水雷を布設せし國の分明なるとき、之が不法を鳴らし、其損害を請求するもよし、然れども露國が其敵國の航路を知りしとき、今回の如き擧に出づるとき果して批難すべきものなるや、頗る疑はしといふべし、已に戰鬪を開くや

互に其敵國の船艦を破壞するは第一の要事なり、あらゆる他の國民は出來得る限り危險の範圍を弘くせしむべきものとす、元來戰爭は善良なる事業にあらず、若し戰鬪國が無用の殘酷又は非戰國の迫害を避け極東に於て行はるゝが如き捕虜又は負傷兵に向て仁惠ある行爲をなさんとすれば、世界は終に戰爭なき程人道の行き渡りたる文明社會とならざれば不可能の事なるべし、今回の事の如き疑もなく、悲しむべき性質のものたるべきも、而かも是れ人性の免るべからざる所なるを奈何せん。」

戰爭の悲劇

「五月二十三日」「ゼ、サン紙」

日露戰爭の原因、及其後の勝敗は如何なりきとするも、吾等英人は自國の名譽の爲に其夫又は父を失ひたる兩國の寡婦孤兒等を憐むの念に堪へざるなり。兩國の陸海軍は實に勇敢なる戰鬪を試み、そが爲に惹起したる死傷及捕虜の數は將さに數ふるに違あらざらんとす。而して今後此戰爭が、如何なる結果を生ずべきかは何人と雖預言するに難かるべしと雖も、而かも其結果に至るまでには尚數次の戰爭をなし、勇敢なる軍人の多數を犧牲とせざるべからざるは又何人と雖も疑を挾まざる所なり。今や仲裁和解の道は既に絕えて　戰爭の狂犬は益々血を流さんとあせりつゝあり若し他に仲裁の道を講ずるものあるとするも兩國の人民によりて好意を以て受けられざるは請合なり。海軍に於ても兩國未だ決すべき多大の事業を有す。旅順及浦鹽に殘留せる露艦は日本の運漕に向て大いなる威嚇にして日本は必ず之を全滅せざるべからざるの覺悟を有すべく、若し戰爭が甚だ久しきに亘つてバルチック艦隊が戰地に着するの日に至らば日本は又之と大戰を開かざるを得ざるべし、而かも此新艦隊の効力如何は全く旅順又は浦鹽がなほ露國の有たるべきか否やに關係すべし、若し極東に於ける露國唯一の基礎たる此海港にして陷落せば新艦隊は途中より引還さゞるを得ざるべく、然らざれば日本に降服せざるを得ざるに至るべきなり。何となれば其新艦隊は石炭の供給地を失ふべく、而して近世の船艦にして石炭なきは恰かも陸兵に糧食なきと同一の狀態に陷るべきを以てなり、旅順及び浦鹽の陷落は日本の勝利に對して必要條件なるを以て日本は全力を盡して其事に從ふべく而して其爲めに起るべき死傷の多かるべきは想像するさへ人をして寒心せしむるものあるなり。吾等英人は一日も早く此事件の落着し以て慘憺たる悲劇の速かに終らんことを希望して止まず、此悲劇に倒れたる軍人の妻子たるものゝ不幸は吾人の最も同情して愛憐の念を禁ずる能はさる所なり。

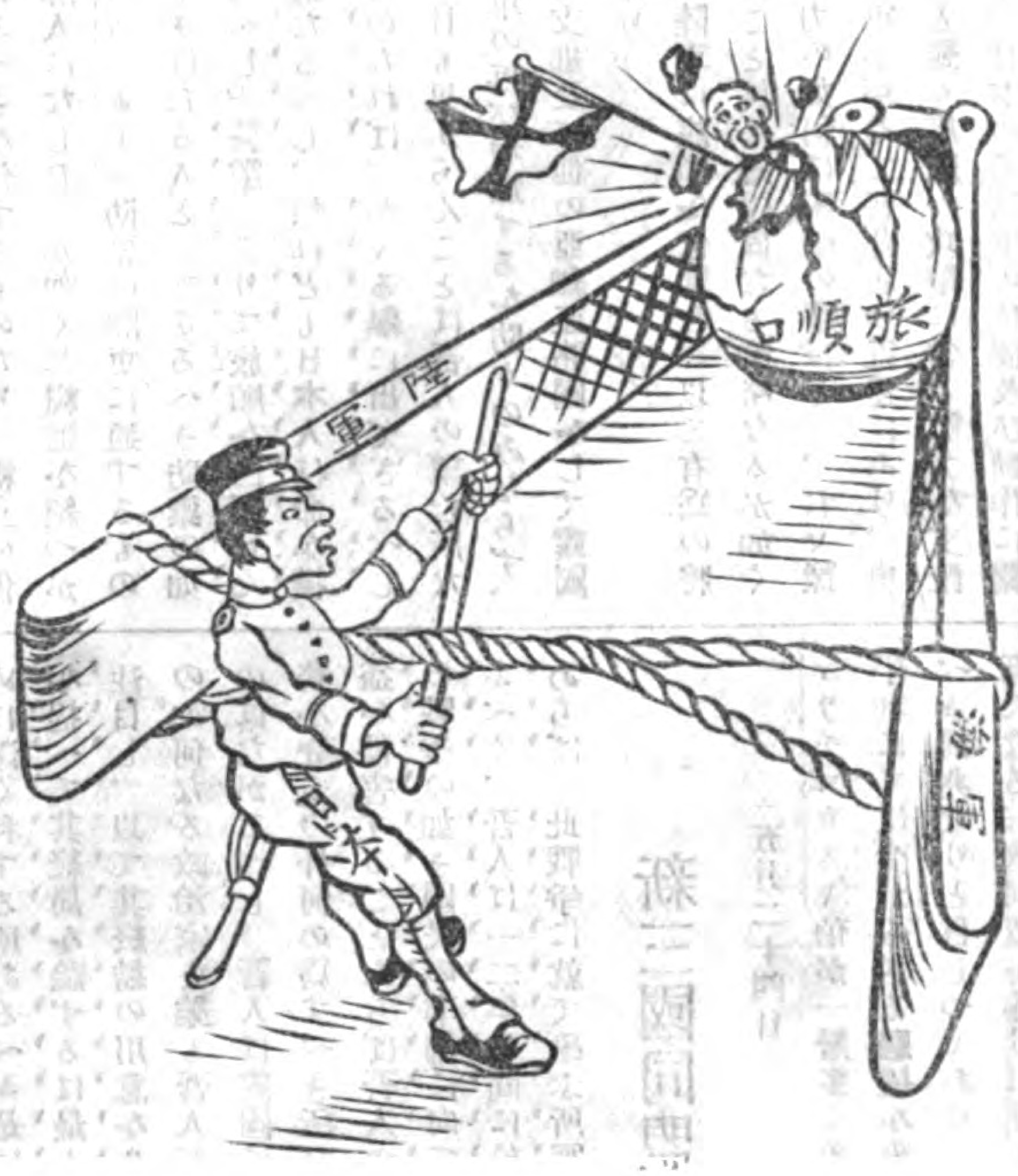
黃人榮えんか、將た衰へんか

「五月十五日」「ゼ、ウイクリー、タイムス、アンド、エコー紙」

近來獨乙皇帝が「世界政畧」に就て論ずる所ありしといふは今更怪しむに足らざる事なり、何となれば皇帝は現今の大問題は歐洲が黃人に對立して其位置を保ち得べきや否やを決するにあることを吾人の多數よりも尙ほ明かに了解する所の人なればなり。現今に於ては露人は黃人に向て對立すること能はざるの實を示したり、露人は自ら黃人に向て爭鬪を起し、而して全然不幸失敗の位置に立ちつゝあり、今日墺太利を除くの外歐洲のあらゆる國民は皆露國の勝利を祈るものなかるべしと雖も、而かも少しく思慮あるものは他の愚人と同じく露人を嘲笑してのみ居るべきにあらず、此戰爭の結果如何に思ひ至らば恐らく多少の心配なきを得ざるべし。予輩は敢て預言せざるべし、蓋し今の時代は預言を要せざる程明かに物の眞相を知り得べき時代なればなり。若し今回の事件にして落着せば支那は如何なるべき、恐らく最初に醒覺すべし、支那の滿洲營

理者は日本の干渉を受けざるべきは明白なり、彼等は支那公使が巴里に於て數日前いひたろが如く「國を防禦し與ゐる者は其主治者とならんことを熱望すること應ゝなり」との事情を知れり、然れども支那人は日本の人民に向て同情を表すること頗る厚きを以て若し日本の勝利にして連續せば支那の群衆は蜂起し、日本の助力を以て、舊明の一族を長とし、滿洲の朝廷を改め日本の保護の下に國を建てんこと恰かも今の印度が英國に於けるが如くに至るべしと思はる、若しかゝる出來事は起らずとするも、而かも起り得べき狀態にあるを考ふれば吾人をして何となく沈思せざるを得ざらしむるに至るべし。

吾人は亞細亞の人種が歐洲人と權力を爭ふが如きことを不可能と考ひ且つ島國人が歐洲文明を採用し以て今日の如き發達進歩をなすべしとは夢にも思はざることなりしなり、獨乙皇帝は久しき以前に於て「黃禍」の起るべきことを叫びたりと雖も、恐らく今日の事と其形を異にしたるべしと思はる。彼は今日に於て極東の時變を見、改めて「黃禍」に就て心を惱まさゞるを得ざるべし。佛と英は再び友誼の狀態にあり、露國は——(獨乙が政畧上親しかりし露國は)今や困阨の地位にあり、伊太利は吾等英人と同じく佛と親しく且つ三國同盟に加入するも單に形式上のことに過ぎざるなり、吾等は獨帝が望める如く南亞の國境まで行かざりしなり、今日獨乙は實に歐洲に於て孤立の狀態にあり、彼は確かに佛と爭ふの氣なきなり、兎に角黃人の榮ふべきや、衰ふべきやは輕々論じ難き未來の問題にして、吾人は黃人たる日本と友たるもの、未だ俄かに黃禍を叫ぶの愚をなさゞるべきなり。



旅順の包圍

日露戰爭概觀

「五月二十日」　「アーミー、アンド、ネーヴイ、ガセツト紙」

カンタンの半島の鼻端なる金州は木曜の午後露兵の退却によりて日本に占領せられたり、日本の進行は益ゝ連續するに相違なし、若し黑鳩公將軍は已れの優勢なるを確かむるにあらずんば旅順は終に陷落すべきも、然れども包圍擊によるか又は艦隊によるか尙ほ不明に屬す、世には日本が襲擊によりて旅順を陷落すべしと信ずるものあり然れども該地の守兵は少くも一万

の多きに達し又六千の水兵ありて其大膽、勇氣、及び技藝總て千八百五十四年より五年に亘りしセバストポールの戰に出てし彼等の父祖にも劣らざるものなり、或る確かなる筋の報告によれば守兵の勢力は一層大なりといふ、吾人は此城郭の軍器は充分に整ひ、且つ艦隊の大砲は防禦を強うせんが爲めに陸上に運ばれたるべきを信ずるものなり、糧食の供給は勿論數月分を具ひ又日本が支那人になしたるか如く其糧道を絶つが如きことをなし能はざるべし、セバストポール防禦の歴史に通ずるものはトッドレベンの精神によりて動かされたる人とになさるべき防禦の如何に強大なるべきかを想像するを得べし。襲擊によりて旅順を占領せんとするは恐らく最も人命を失ふの道なるべし、然れども日本人は命を犧牲とする勇敢なる行爲を敢てするものなれば、かゝる擧に出でざるべしとも限らざるなり、旅順の陷落の一日も早からんことは吾人の望む所なり、何となれば其れが爲めに露國海軍の再び增加するを防ぐのみならず、且つ露國の名望に一大損害を與へて支那及び他の亞細亞諸國をして露國の壓抑を脫せしむるを得べければなり。

他の一方より之を論ずるに、日本の陸軍は旅順を包圍し、以て有爲の將士をして遼陽の露軍を壓にせしめんことは一層強固なる策略なるが如く考へらるべし、此行動に當るべき勢力の如何は不確の事にして、たゞ豫測の問題なるべし。黑木將軍は第一軍を率ゐて普蘭店の近邊にあり、奥將軍は第二軍を指揮して西部にありと雖も旅順の攻擊に當る勢力を支配すべきや否やは未だ知られざるなり、日本の第三軍の位置及び動作に關しては種々の一致せざる記載ありて何れか眞なるかを知るに困しむと雖も、風說の最も盛んなるは遼東半島の西部に於て動作するものゝ如し、黑鳩公將軍の後陣に出でんとする目的を以て黑木將軍の右に動きつゝある日本軍の記載も現今に於ては未た餘りに漠然として其の眞相を究め難し、たゞ最も注目すべき一事は日本軍の進行は實に秩序正しくして、其特徵は熟練と注意の行き亘れることにあるなり。

吾人の最も記憶せざるべからざるは戰爭は今漸く開始せられたるのみにして、而して其終結に至れば世界の權力の新平均を生じ、吾人は之が爲めに深く利する所あるべき是れなり。何人も豫想すること能はざる事件を捉へて其終局を論ずるは最も愚かの業なるも、而かも其事件の進行に注目し、以て其終結の用意を心懸け置くは最も必要の事たるなり、英國の如何なる政治家と雖も吾人が盟約したる日本の狀態に向て無關心のものはなかるべし。吾人は露國にして不法の行動なき限り、長く中立の義務を守るの外何の爲すべき所なかるべし、然れども若し吾人の同盟の利益を侵害することあらば吾人の態度も亦一變せざるを得ざるなり、今回の戰爭の如き國民の準備に向て大いなる戰爭の教訓を示したるものといふべく、吾人は一二年の間に於て歐洲の他の國と戰端を開くが如きことあらば、此戰爭に就て學ぶ所實に多ゝなるを思はずんばあらず。

新三國同盟

「五月二十四日」　「ゼ グローブ紙」

ゴラチヨウスキ伯が一層多くの軍隊を要求したることによりて墺太利匈牙利にては少からざる騷擾を來たし、近東に於ける新たなる危險の起るべき前兆なりと目しつゝあり、ゴラチヨウスキ伯が備へつゝある危險は、新たなる三國同盟を作りたりと傳へらる、ブルガリア、セルヴイア及びモンテネグロに對してなることは疑を容れず。土耳古及び希臘にして其擧を贊成せば此同盟に加入することを許さるべきも若し不可とせば三國は彼等を加入せずして以て事を起すべし、同盟の目的とする所は極力墺太利に反對し、又伊太利にも敵意を洩らすにありてバルカル半島には歐

洲の如何なる國と雖も武力を以て之に干涉することを防ぐといふにあり三國は又其範圍を歐洲土耳古に擴張し若し贊同せば希臘にも及ぼさんとしつゝあり、墺太利は絕對的に排斥せらるべし、彼等は土耳古を襲擊せんとの考を有せざるもマセドニアの運命を改良せんが爲め必要なる改革を施さゞるべからざることに一致なるが如し、是れゴラチ、ヨウスキーが兵力の增加を要求したる所以にして、若し此三國同盟にして行動せばサロニカに於ける墺太利の野心は大いなる障害を蒙るべきを以て也。

海外雜纂 日本の新聞紙

「五月十三日」「セ、デーリー、クロニクル」

日本の新聞紙は二錢或は一錢の價を以て賣られ、其發行數は二萬乃至十四萬の間にあり、號外は戰爭又は珍奇なる出來事の起りし場合に發せられ、其記事は短小なりと雖も同一の價を以て賣らる。號外の發せらるゝや其賣子は各新聞社の前に集り、其紙片を攜へて「號外、號外、日本大勝利」など叫びつゝ市內を驅け歩むなり、若し珍奇なる出來事のあらざる場合には第二流以下の新聞には種々の事件を捏造し以て號外を發行するものさへあり、又各新聞は廣告の要具として用ひらるゝと雖も日本の廣告は未だ幼孩の域を脫せず、芝居の廣告の出づるは僅かに一「時事新報」あるのみ求婚の廣告あり又新年の賀詞又は缺禮の廣告あり、死亡の廣告あれども結婚及び出生の廣告なし、火災の起りし時は屢々次の如き感謝の廣告を見る、「昨夜は近火に付き御見舞下されし諸彥に謝す」と。



員の犠牲

平時にありては大いなる自由を與へらるゝと雖も、戰爭中は其取締極めて嚴重なり、軍隊の行動に關する記事は殆んど記載することを許されず、一事件の起ろ毎に〇〇を用ひらるゝこと實に夥し例へば

「〇〇〇〇聯隊は〇〇〇〇〇地を去り、直ちに〇〇〇〇〇に進行すべし、〇〇〇〇將軍は將さに〇〇〇の行動をとらんとす」、事斯くの如くなるを以て新聞の通信員は〇〇を用ふるの外、全く旅順の報告をなすことを得ざるなり、勿論あらゆる日本の新聞紙は外國の通信員と同一の束縛の下にあるなり。

「日々新聞」は日本に於ける最も古き新聞にして伊東男によつて主宰せらる、男は伊藤侯によりて助力せられ、侯は新紙を維持す、男は政治社會に打ち出すに當りて侯の力に與かること最も多く、又自ら才幹を負ふを以て未來の總理を以て目せらるゝものなり、三面は常に善良なる記者によ書りて書かれたる小說を載せ、其發行數凡そ六万にして其價二錢なり。

「二六」は近頃まで衆議院議員たりし秋山によりて發行せられ、神田を本陣となして社を其地に構ふ、彼は軍資を募集するに當りて、富者に寬にして貧者に酷なるの事實によりて政府を攻擊し、議員を辭職したり、之がために一時發行を止められしも再び發行するの機運に至りたり、「二六」は實に富者に激烈なる攻擊を加ふることによりて發行高の最も大いなりし新聞なり、「朝日」は日本に於ける「ニユーヨルク、ヘラルド」にして、「時事」は「タイムス」なり、此二新聞は何れも政黨の機關にあらず、「報知」は大隈伯の機關なり、其他多數の新聞紙あれども皆殆んど同一にして一々論ずるの要を見ざれば是れにて筆をとめつ。

英國旅行者の露國談

「五月二十四日」　「ゼ、ウエストミンスター、ガゼツト紙」

吾等は夜の八時に於て其夜宿るべき百姓の小屋に到着せり、八時間の旅行の後心身の疲勞甚しかりしも幸に待遇頗る親切にして、よき茶と黑麵包、及び温かなる雞肉を供せられ、温かにして廣く極めて奇麗なる客間に導かれて眠に就きぬ、忽ち夢破れて甚だ活潑なる人物の會話を聞けりそは客人の來りて物語をなし居ると覺ぼし、予は耳傾けたり。やがて女の聲は聞えぬ「ヴアシヤツサはペペ、ヤカに着きました、其家の壁は鶴の足て支へて、猫は人間の骨て、戸は皆頭蓋骨から出來て居るのです、して其頭蓋の眼玉はうつろて、火のやうに燃えて居るのです、ですから大變驚いて叫ぼうと思ふと思ふと雷のやうな聲が聞えて中からババヤガが出て來て、木の車に乘つて「ハヽ露西亞人の臭ひがするぞ」といふんでせう」……「面白い話てすれ、然しアングリチヤンキはどうなつたてせう」他の女の問ふ聲聞ゆ、話の主は再びアングリチヤンキの事を語り出し、彼女が黑衣を纏ひ六疋の黃馬を驅りて、コレラ病の流行せし當時モスコーの市中に入り、市民の喧喧々囂々を極めしかをいへぬ、其後其物語はやゝ久しきに亘り、終に延いて戰爭の談に移りぬ「皇帝はもう戰爭はないんだといふたつけれ、」「戰爭を起るべき筈がないんだけれども英吉利や亞米利加は露西亞を嫌だから、日本をおだて、おいら助けるから露西亞と喧嘩をしろといふたんだよ、そして亞米利加は日本に船を賣たり英吉利は港を貸たりしたんだ、だもんだから日本の兵隊は露西亞の知らない中に英吉利の港から立つておいらの艦隊を打つて來やがつたのよ、皇帝だつてそーなれば、だまつて居られないやれ、止むを得ず戰爭をすることになつたんだとさ、そして今でも英吉利は日本に船や鐵砲などを續けて居るんだ、然し今においらが印度をとつて英吉利に返報をするんだ、」露國の田舍物が戰爭の事情に不知なること斯の如し、予は此等の話を聞きつゝ再び眠に入りぬ。

戲作曲者としてダンヌンチオの缺點

「六月二十五日」　「リテラリー、ダイセスト誌」

有名なる佛國批評家、セアン、ドルニ氏はガブリエル、ダンヌンチオの

戯曲を評したる名文に於て此伊國作者は眞の抒情詩人にして決して戯曲家にあらざることを論じたり、其説を確かめんが爲めに彼はダンヌンチオの作劇「フランチエスカ、ド、リミニ」をとりて評論し、作者がダンテによりて不朽に傳はるべき此挿話の悲哀を舞臺上にあらはすを得ざりし失敗を擧げ、其理由を問ひ且つ答へて曰く。

「是れ偏へに吾人が劇場にあるによつてなり、戯曲はすべて實際の場景を眼前に彷彿せしめ、肉あり血ある俳優をして作中の人物と同化せしめざるべからざるものなり、然るにダンテの詩に於ける二人物は靈界の二影に過ぎずして想像を以て描き得る戀愛の精靈なるにあらずや、かゝる人物を捉へて抒情詩の高調を減し、以て普通の劇場に於て之を演ず、其平凡化し、俗化し終ること蓋し疑ふべからざるの數なり幕の開かるゝや觀客の心に浮ぶは夫の正當なる復讐により困しむ無法なる男女の外何物もあらざるなり、然れども觀客はダンヌンチオの表題したる人物によりて不快の感を抱いて劇場を出で、家に歸りて其脚本を讀めば舞臺に於て一文の價値なかりしものは忽ら深大なる讃嘆の念を起し、此詩人に向て多大なる崇拜の感を抱かざるを得ざるべし、彼は此詩人の作物は恰かも殿堂に等しく詩人は時に僧侶となりて法を説き、又神佛となつて道を講ずるが如く思はる吾等は此詩人の作物を讀むは恰かも彼と對話するが如く不知不識深き熱心に誘はるゝが如く感ぜざるを得ずと雖も之を舞臺に登すれば忽ち冷淡不快の念に襲はれざる能はざるなり。略言すればダンヌンチオの戯曲を讀めば吾人は一頁毎に此の抒情詩人が景物、裝飾及び動作の一致すべき舞臺の上に彼の思慮を表顯することの巧みならざることを痛切に感ずるものなり、此詩人が書きたる舞臺の書割の指定と雖も美しき名文句に乏しからずと雖も然れども舞臺と調和せざること甚しく、爲めに劇其物の價値を傷くること又大いなりとす、彼の作劇は名は戯曲といへど其實彼自身出でゝ語り以て詩的の對話をなすに過ぎざるなり。彼は著者をして詩人として常に自ら舞臺の上に出で居るなり、若し彼の舞臺にあらはれざることあらんか、俳優は扮せる人物の代りに彼ダンヌンチオを考へ、觀客も亦彼自身を考へざるべからざるが如きなり、古往詩才を有するものにして彼程自己を滅却して種々なる人物を活動せしむる才の缺亡したるもの恐らく少かるべし、如何なる人物も皆彼の影法師にして其感念は皆詩人の感念する所なり、彼のあらはす女性は悉く自己の願望、悔恨、感情を寫し出す所の明鏡にして其他の意義は殆んど見出すに苦しむなり、彼は此狹き範圍より脱出せんとして「フランチエスカ、ド、リミニ」を書けり、然れども終に前述の如き失敗に了りたり、彼は此戯曲に於て學者又は文學的美術家の如き態度を取り、此女主人公に向て同情の念を表することを極めて薄し。

ダンヌンチオの位置はヴイクトル、ユーゴーの定義によりて最もよくあらはさるゝものといふべし、其定義に曰く、「抒情詩の天才は已れ自身の天才によつて成り、劇詩人の天才は他人に同化し得ることの天才によつて成る」と此抒情詩人は未だ此定義に就て考慮するの時機に逸せざるものといふべきなり。





雜錄

北歐自然派の戲曲論（承前）

上田敏

『ゆり子』曲中にジアンが述べたる下級社會の人生觀は頗る有力なる說義なれども、これ必らずしも常に眞なりといふが爲めにあらず、他なし彼は自己の利を計りて、時に或は眞ならざる事を附加すればなり。下級社會の者は常に上流の壓制に苦むならむと、ゆり子が推測を試むる時、ジアンの之に和して應答する所あるは固より自然の勢なりとす。蓋し此令孃が同情を獲るは實に其目的とする所なればなり。然れども時として自己を俗衆の斑より脫せむとする事已に利あらむか、彼は其所說を變更して寸毫も憚ること無し。

ジアンは斯の如くにして已に發達の途に上ぼれる人物なり。之に加ふるに男子たる優勢を以てす。性別の見地より論ずれば、彼は男性の强健を有し、女性よりも更に發達したる諸官能と創業の資質とを具ふ。今暫らく服從する所以の者は、偶々社會上の地位に於て劣る所あればなり。而も斯の如き關係は一朝其僕衣と共に脫却し得べからむのみ。

彼が隷僕の心情は老伯爵に對する尊敬に顯はれたり。然れども其之を尊敬するや、己が將に進て獲取せむとする地位の現在所有者としてならむ。而もジアンは一旦令孃の心を服せしめ、皮殼如何に研美なるも核心旣に空虛なるを認めたる後と雖、終に伯爵に對する一片尊敬の念を失はざりき。

斯の如く相異る二人の間にも眞正なる戀愛の起らむとは予の決して信ずること能はざる所なり。故に予はゆり子の戀愛を以て其者自らの辯疏たらしめ、又若し之を以て社會の他層に起らしめたらむには、或はジアンも亦此戀愛を感ずることありしならむと思はしめたり。予謂へらく、戀愛はなほ玉簪花の如しと。之に麗

を開かしめむとせば、先づ暗黒の地に其根底を養はずむばあらず。而して玆に發芽し開花して忽ち枯死す。

曲中の一人物クリスチィネは婢女にして、獨立の心なく愚痴の性あり。到底これ竈爐の人、其道德其宗敎皆これ虛飾或は身代りに過ぎず、其寺院に詣づるは日常主家の錢を偸みたる罪過を以てイエスに負はせ奉り、同時に又新らたなる赦罪を得むが爲めなるのみ。且つ彼は畢竟するに此曲の副人物なれば、予は故意と之を略寫したること宛もわが悲劇。父親中の牧師及び醫師に於けるが如くせり。而して此等の副人物が多少抽象の風ある所以の者は他なし、普通人物が其業務を執るに當てや必らず或る意味に於て抽象の[illegible]を具ふ、即ち獨立の氣を欠くを以て常とし、其事に從ふや唯一方面を見はすに過ぎざればなり。人若し諸の方面より之を觀察する必要なからむには、予が抽象風の描寫にて蓋し充分ならむ。

又曲中の對話に關して論ぜむに、予は少しく從來の法を破りて、彼の曲中人物が對坐して徒に愚問愚答を交換する事を廢し、佛蘭西劇にある如く數理的對稱的の對話を避け、實際に於ける如く曲中人物の頭腦を活動せしめたり。それ實際に於ては對話一物の頭腦は絕えず一定の話柄に拘泥することあらで、そこはかとなく思の儘に種々の談緖を求むるものなれば、對話もまたあなたこなたに推移りて最初の一段に提出したる一の話材を後段に及て精察し再考し反覆し、敷衍し、攻究すること、なほ音樂の曲に於けるかの樂旨（テエマ）といふものに似たり。

此曲は頗る動作に富めり。固より事二人に關するのみなれば、勉めて此二人物の上を詳說するに止めて、唯一人の廚女を添へ、全篇の後ろに不幸なる父の靈を彷彿たらしめたり。何となれば、近代人の最も興味の感ずるものは、心理の發展にして、知を求むる吾人の精神は事物の經過を見て以て滿足せず、更になほ一步を進めて、其如何にして起れるかを解釋せむとすればなり。實に吾人はかの緖と機械と兩底の箱とを吟味し、繼目を見出さむとして魔術の環を手にし、如何なる符號の記されたるかを見顯はさむとして骨牌を熟視する底の徒ならずや。

更に作曲の技巧に就て云はむか。予が尋常の幕切を避けたる理由は、吾人の幻惑力に乏しき、大概幕間の爲め觀客は回想の暇を得て、作者の與へたる暗示の魔力より遠ざかることあるを以てなり。予が曲は恐らく

一時間半を以て演じ了はるべきが、講演、說教、會議等に臨みて此長さの時間若しくは更に長き時間に堪へ得る人士ならむには、一時間半の戯曲に疲れ倦む事ある可からず。

獨白はわが自然派の不自然として排斥する所なれど予が之を用ゐるに當ては、必らず眞に近き場合のみを採りて其効果を空うせざりしためなり。例へば辯論家が一室の上下を獨步して演說の草稿を朗讀し、或は優人が高聲に自己の科分を練習し或は少女が猫と間語し、慈母が愛兒と戯言し、老嬢が鸚鵡と喋々するは、敢て不自然の事にあらざる可し。而して俳優に獨立の行動を許しては、暫時作者の指揮を免かれしめむと欲する時は、此獨白を臺帳に表はさずして、單に之を演述す可き個處を記示するを以て最上の策とす。睡眠中或は鸚鵡或は愛猫に對する獨白にして、毫も歪曲の動作に影響を及ぼす事無きものを述ぶるに當てや、作者の文章より寧ろ感興全く熟せる俳優が當意即妙の科分のかた却て妙なる可し。後者はよく觀客が幻惑の繼續する時間を察し得可く、從て獨白を何時まで續く可きや否やを判定するに便宜多し。

獨白を用ゐて不自然なる場合には、容貌表情術の助を假りて可なり。優人は是に至りて益々自由なる可く又愈々作者を離れて自己の喝采を博し得可し。されど予は甚しく觀客に疲勞を與へざらむが爲め、此無言の表情術を行はしむる間、聖約翰祭に因める音樂を奏して、夜の祭の誘惑力を觀客に知らしめむと計れり。

舞臺粧飾法には對稱なき斷片的の印象派畵法を用ゐたり。觀客若し全場を望まず、全運動を見ざるときは、却て其空想を逞うして間缺を補はむとする所謂餘情の美感を覺ゆるならむ。予はまた此法に因て煩はしき洋戸の開閉出入を避け得たり。又人物をして其周圍とよく融和せしめたるのみか、近代劇の通弊たる過大粧飾の惡習を矯むることを得たり。而して後景に對して卓を斜に据ゑたる利益は、俳優の之を圍て坐する時、觀客に其正面、又半面を示して演技し得るにありとす。

予はまた舞臺前面の點火に就て少しく改良を施さむとす。抑もかの下方より俳優の顔面を照らす燈火は更に一段の工夫を加ふ可きものならずや。今日の狀況を以てすれば燈火は單に優人顔面の下半部を照らして其鼻の形を變じ其眼の影を大ならしむよしまた然らずとも、其視力に妨害を與へて、微妙なる眼の働を自由ならしめず、唯横さまに或は上方に眼球を回轉し得るの

み。予の見る所によれば、側面より強度の光線を投じ、また之に反射鏡状のものを具へて、以て此欠點を補ふことを得可し。

此他予が近代の心理戯曲に對して望む所は、漫に白粉を優人の顔面に施す古來の習慣を廢し、感情の高潮を示すに絶叫又四肢の運動を以てせず、微妙なる顔面表情術を以て之に代へ、又舞臺前面の樂部を廢し、士間の全體を少しく高くして、從來の如く視線を優人の膝以下に注がしめず、全體に就ていはゞ、劇場の規模を小にし、觀客の數を少なからしむる等の改良事項なり。

予が戯曲に對する意見は斯の如し、然り而して、新劇の勃興を期するに當りてや、自ら率先して數番の將來劇を作らざる可からず。新曲『ゆり子』の如きは其一なり。此作にして成功せざらむか、予は更に筆硯を新らたにして、第二第三の曲を公にし、敢て容易に屈せざらむとす。(完)

東京市の殖民地

横山天涯

一 東京市の研究に二様の觀察法あり

或意味より言はば、東京市其れ自身は、一の大なる殖民地なり、人爲的に作られたる都會なり、其の人爲的都會たるは、北海の原野に、旭川町勃興し、足尾の山中に、足尾町成立せると何等の異るとなきなり。故に、東京市の研究に、二様の觀察法あり、一方面より觀れば、東京市は、三百年の年月に依りて成長せる歷史的都會なりと雖も、亦他の一面にては、地方人の來住によりて組織せられたる一大殖民地にして、常に其の移住者に依りて、今日の如き膨脹を示せる也、特に維新の革命に依りて、其の組織に一大變化を來たせる以來、年一年に地方人の來住多く、其の人口の增殖せると共に、殖民地たる面目、益々顯著なるを致す。

東京市の人情、習慣、其の過去の變遷は、歷史家の研究に委せん、余輩は、未だ世人の意を置かざる東京市膨脹の社會的消息――殖民地たる東京市の現状を審にして、敢て膨脹の順序を明らかにすべし。

二 東京市は新開地に依りて繁昌加はる

新開地、と言へば、東京市民百万の耳に熟せる言葉なり、然かも東京市民は、新開地なる言辭に對して、一種の侮蔑を含めるが如し、解すべからざる心事也、知らずや、東京市の大都會は、此の新開地に依りて常に其の繁榮を加へつゝある事を。

蓋し人口が都會に集注するは、中央都會と地方都會と異るとなしと雖、其の膨脹の狀態に於て、中央と地方と自づから異る者ありて存す、地方都會の膨脹は、單に其の廣袤を加ふるに過ぎずと雖、中央都會にして然かも封建時代の遺跡を有せる東京市の膨脹は、其の廣袤の擴大するは言ふ迄もなく、其の都市の中心に於ても、同じく一の新開地を示しつゝあり、即ち殖民地の範圍は、地方都會は、單に其の「町外れ」が一町、二町、其の範圍を擴むるに過ぎずと雖、東京市は、人家の雜採せる市街の中央に、殖民地の形成せらるゝは、奇とすべきに非ずや、例へば神田「三崎の原」に文明式の三崎町生じ、下谷「佐竹の原」に下谷公園の稱ある竹町生ぜるが如し、是れ往昔封建時代に於ける大名旗本の諸屋敷徹せられ、其處に空地を遺こせるが故にして、其の原由甚だ單純なりと雖、其の結果に於て、兩者の間に大に異る者あるは、注目すべき現象たらんか、殖民地たる東京を研究して價値あるは、寧ろ此の都會の中央なる屋敷跡の新開地に存す、余輩は、中等以下の住民を集めつゝある「佐竹の原」を以て、新開地の狀況を明らかにせんと欲す。

二　最も繁華なる殖民地

丑寅は淺草公園、辰巳は兩國、上野公園は戌に方り、遙に未申に當りて万世橋及和泉橋を控へ、淺草下谷兩區の經界たる三味線堀に沿うて、一大繁華有り、所謂下谷公園の稱ある佐竹の原是なり、其の廣袤一万八千坪、戶數一千、人口四千三百、實に都下有數の繁華と爲す。

下谷公園の名稱、既に奇也、世人の眼を驚かすべき建築物有りや、無、意を怡ばすべき散策の場所有りや、無、何等の意を惹くべき歡樂の事なくして、公園の名稱ある、奇とすべし、唯、幅狹き往還に、犬牙雜採、路人の往來、絡繹たるのみ、而して一ト度足を裏通りに轉ぜば、馬小屋、荒物屋、屑屋の類、相列りて、其の陋言ふ可らず、然かも公園の名稱あるのみならず、三味線堀附近の淺草、下谷、及和泉橋以南の神田住民――特に職人徒弟の輩は、職業終り、晩食終れは、箸を

投じて

「佐竹へてもぶらつからよ

と草履を突ッ掛け、朋輩を伴ふて、何等の趣味も詩趣もなき此の索然たる佐竹の原に、散策を試むるを常とす、知らず、何物の有りて、斯くの如く能く附近の住民を吸引するや、解す可らざる公園也、然り、公園としては何等の備はるものなき也、然かも日夜路人の群集多く、特に夜に入れは、三味線堀に沿ふて、各種の露店は、油燄天を焦かして購客を集めつゝあり。

而して佐竹の原に於て、路人の最も注意を惹くは、古着屋の多きを特色とすべき歟、佐竹の原の表通りに店を開けるもの、半は古着屋の類也、特に繁昌を極むるは、朱字にて、一センもまけん、と特書する軍人屋と、同じく戰事に因める「まからん屋」と、にして、僅に五十錢乃至一圓、高きも二圓に出でざる少額の着類を商ふて、一ヶ年の販賣高八千圓に出づといふ、私が愛する職人諸君は、佐竹亭の浪花節よりも、足立屋の社會主義演説會よりも、此の古着類に一瞥を與ひ、ひやかし行くを快樂と爲す也、然り、我職人諸子の多くは、花より團子の實利主義者也、見よ、柳盛座と斜に相對して、三味線堀附近の一名物に數へらるゝ松壽司は、其の形甚だ大なるにも拘らず、東京市中に於て最價安きを以て名あり、同じく柳盛座の前に、湛くちやの爺が、臺を出たして商へる漬物は、其の向側に店を飾りて、壜詰、鑵詰、各種の漬物を商へる漬物屋あるにも拘らず、獨り路人の足を止めて、其の味の美なるを以て稱せらる、否、否、斯くの如きは、佐竹の原に附隨せる輕微なる物のみ、此の殖民地に於て、最も建築の大にして、店構の立派なるは、亀屋と言へる飲食店にして、而して是れ東京市中——日本全國に於ける最初の馬肉店なりと知らずや、馬肉元祖と誇りて其の看板に特書せるは、偶ゝ能く殖民地としての佐竹ノ原の性質を證明せるものと謂ふべし。

四　殖民地の内容

佐竹ノ原には、大なる富豪なき代りに、又著しき貧民も、之を見ると少なし、例令今日多少の資産ある者と言ふも、十年乃至二十年の前に溯れば、何れも無資無産の徒にして、諸所を食ひ詰めたる擧句の果、佐竹ノ原に流れ來りて、十數年の忍耐は、能く今日の如き産を致せる也、之を以て今日佐竹ノ原に在りて、一町の尊敬を博し、町政を扱へ、或は其の相談役たる者も、

明治二十五六年の十數年前を顧れば、或者は釣堀屋の大將たり、或者は玉ころがし屋の親方たり。

而して其の土地は、社會主義の徒が理想せるが如く、尺寸地と雖、一已人の私有に屬せるはなく、悉く是れ社會の公有――東京市てふ都市の公有に屬す、之を以て借地料の如きも、場所に依りて相違ありと雖、己人の私有に屬して、地價の變動容易なる一般市中の借地料に比ぶれば、頗る廉なるを覺ゆ、盖し東京市中の借地料は、一坪十錢乃至十五錢を普通とせるに、佐竹ノ原にては、表通の一等地は一坪八錢 裏通り或は横路の二等地は六錢、裏路次の三等地は四錢、殆ど市中借地料の半に在るのみ、亦廉ならずとせんや、佐竹ノ原に荷馬を扱へる馬小屋多し、都會繁華の地に馬小屋多きは、即ち借地料の至廉なるを證明せる最も顯著なる事實たらん歟。

而して佐竹ノ原にては、借地者は一種の地主たるが如き位置に在り、此の新開地に在りて、上等階級の多少は、借地者の數に依りて決せらる、即ち一人の地主だもなき代りに、借地者は悉く家屋所有者にして、市中一般に比せば、比較的に家屋の所有者多きは、注目すべき現象なるべし、目下借地者の數二百三十名、借地者の大なるは、四號地に住める島地某にして、各々を合せて三百坪の土地を使用し居れり、次は天野某にして、百坪の借地者たり、即ち佐竹ノ原一千戸の住民に對して、家屋の所有者は二百幾十名なるべき筈にして、而して其の過半は、目下他町に住めりと言へば、此の殖民地に居住して、家屋の所有者たる屋主は、百七八十名あるべき計算なれば、現住總數に對し、其の五分の一弱は家主にして、殘餘の七百幾十名は、借家人たり、而して此の殖民地にては、其の借地を他に轉貸し得ざる風習ありて存す、借地者に他町の者多きは、嘗て佐竹ノ原に居住して若干の産を作り、他町に出でたるなり。

其の屋賃は如何、と言ふに其の場所に依り家屋に依り相違ありと雖も、其の地代の廉價なる割合に、比較的に高價なるを覺ゆ、即ち二階附二間間口の家は、十圓を普通とし、路次の陋屋と雖、三圓乃至四圓の間に在り、之を家主に質せば、曰く、他町にては、祭典其の他の費用は、地主の負擔に屬すと雖も、佐竹ノ原は地主は東京市――市役所たるを以て、公園共同の費用は、悉く家主の負擔に歸し、然かも他町に在りては、當然家主の利得に屬する掃除代は、佐竹ノ原は一ヶ年

一千三百圓（時に一千五百圓）の額に出づるに拘らず、悉く市役所に沒收せられて、他に何等家主の利益となる者なし、乃ち自然の結果として、屋賃に騰貴を致せるにて、已むを得ざるなりと、余輩其の是非を知らず、唯、讀者の判斷を待つのみ。

五　殖民地の自治政

前項に於て、余輩は佐竹ノ原の土地に關する經濟狀態を擧げたり、更に殖民地内の行政組織を見るに、爰に多とすべきは、佐竹ノ原に一種の法制的自治躰の行はれ居る事是なり、即ち第十一號地に市役所附屬の下谷公園事務所ありて、地代其の他の事を扱へる外に、十號地に共同事務所ありて、衛生、火の番、其の他一般町内の共同に拘はる諸般の事務を扱ひ居れり、而して一躰に無學不文の徒多きにも拘らず、一種の自治政を布き、一町共議の上にて、殖民地の方針を決しつゝあるは異とすべし、讀者の爲に公園規約書を摘要せば、先づ

公園は素より壹個人元地主あるにあらざれば我等住民は衛生及經常非常總て他方と關連するの事務は勿論園内細大之事と雖も豫じめ自治の覺悟なかるべからず故に公園規則を遵守すると同時に下項を約し自治を營む所以なり

と園内自治の大本を定め、更に下項に町政の重もなる者を擧げたり、曰く

當公園は、都て二十四號地毎號一名の總代人即ち二十四名、及び相談役六名を撰擧し、左の五ヶ條を處理せしむ

一　町費徴收及び支拂に關する件
一　衛生幷に祭典祝賀に關する件
一　非常夜廻りに關する件
一　飲料井戸に關する件
一　衛生祭典祝賀等地方と關連して擧行する件

即ち以上の事項は、町民一般より撰擧せられたる總代及相談役に依りて決せらるゝにて、其の議決は、金科玉條として、直に實際に施して、町民一般之に違ふ者なし、而して總代の被選資格は、滿二十五年以上の男子ならざる可らざるは言ふ迄もなしと雖も、例令家屋を所有せざる此の殖民地の弱者——借家人にても、借地人にして適任者なき場合は、選出せらるゝの權利あるは異とすべし、現に總代二十四名の內、借家人にして總代たる者二名あり

其の行政組織を以て平凡なりと言ふ勿れ、其の住

民の多くは、職人、及馬力人足の輩にして、表通に店を張れる者といふと雖、古着商、菓子商、馬肉屋の類、其の上流を占むる間に於て、斯くの如き規約の下に、共同の利益を謀りつゝあるは、寧ろ大に珍とすべきに非ずや、而して此の殖民地一區域の經費は、幾何を要するや、都市研究の一資材として、下に之を掲ぐれば、昨三十六年度町費決算報告を見るに、一ヶ年の收入總額は、九百八十二圓九錢六厘にして、支出總額は九百〇七圓五十五錢と爲す、而して支出額の重もなる者を擧ぐれば

(1) 百三十五圓八十九錢三厘（事務所維持其他諸雜費）
(2) 九十七圓十八錢五厘（井費用）
(3) 三百十九圓六十九錢（火の番費用）
(4) 九十六圓八十錢（入營祝賀等の兵事費用）
(5) 百三十八圓九十二錢五厘（衛生費用）
(6) 十圓六十一錢三厘（下谷神社負擔額）
(7) 百八圓四十四錢四厘（御輿飾附費用）

の計費を示す、此中御輿飾附と稱する一費用を除けば、他は悉く普通の經常費に屬す、其の費用の多少に依りて、此の小自治躰が意を置くの大小を見るべし、右數字に示せるが如く、此の自治體にては、火の番に意を注げるの一事は、讀者の早くも認むる所なるべし。

蓋し舊幕時代の頃は、五人組制度の事行はれ、町內共同の利害を見るや最も嚴重なりき、之を以て、今日と雖も、「己ア神田ッ兒だ」など無意識に稱へらるゝ言語の中に、其の住所を誇ると共に、自づから町內共同の利害を顧み、個人と社會との間に擁すべき眞情を具しき、然るに維新以來、百事制度の壞敗せると共に、隣保の關係も、頗る散漫に赴き、社會的道義は、地に落ちんとせる今日、獨り佐竹ノ原の如き新開地に於て、早くも斯くの如き一種の自治躰を見るに至りしは、大に注目に値すべきに非ずや。

六　殖民地の發達

A　井一ッにも歷史あり

歷史に富める奈良、京都、或は鎌倉の地に遊べる旅行者の記行を見れば、一木一草にも歷史ありと稱して、驚嘆しつゝあり、東京市の新殖民地たる佐竹ノ原の如き、此の意味にては、何等の歷史的事實あるとなし、然れども例令陳腐なる歷史家の眼には、稱すべき者なしと言ふも、余輩社會研究者には、十年乃至二十年の

少年月と雖、其の間に幾多の消息あり、波瀾あり。

例へば今日尙見ゆる二十一號地の井の如きにも、其の來歷を探れば、幾多の話說あり、顧れば明治二十一年迄は、佐竹ノ原にては、僅に四號地に井一ッあるに過ぎざりしが、釣堀を業とせる長谷川某（後日佐竹ノ原住民の爲に、反抗運動を試み、一般町民に幾多の便宜を與へたる）と言へるが當時無上の權威を揮ひたる熊谷某の壓伏に抵抗し、隣保の贊助を得て、數年苦心の結果、漸やく成就せる紀念の井なりと言へば、井一ッと雖も、輕ろずべからざるなり、今日佐竹ノ原第一の繁昌を極むる鍋屋の馬肉の如きにも、傳ふべき幾條の話說ありて、社會詩人の研究を待つ、佐竹ノ原發達の跡を究むるは、亦た東京市膨脹の消息を知るの一方法たるべし。

B　醜業婦は殖民地開拓の卒先者なり

今より三十年前に渡らんか、今日都下有數の繁華たる此の佐竹ノ原も、三味線堀の水濁りて、黑く、七ッ藏の跡、草茫々として、晝尙往來を絕つ、而して後日「佐竹ノ殿樣」を以て稱せられたる熊谷某が、東京府廳より、龍の口勸工場移轉を名として佐竹ノ原一園を借地せるは、今より二十一年前なる明治十六年二月と爲す、然かも當時は三味線掘附近に、人家五六戶、散在せるのみにして昔ながらの原野なりし也、而して佐竹ノ原開拓の聲傳はるや、直に入りし來りしは矢場銘酒屋の類にして、醜業婦は、實に佐竹ノ原開拓の卒先者たり、次いで幾多の觀世物來り、寄席建てられ、遂に今日の如く繁華を示すに至れるなり。

讀者は、佐竹ノ原の一區域に入れば、表通の中頃に、佐竹亭と稱する、土足の儘に出入し得べき浪花節の常席あるを見るべし、是れ佐竹ノ原にては、寄席を見たる最初の建物にして、佐竹ノ原の繁華を作らんが爲に、建てられたるもの、當時醜惡なる活惚を演じて、多少の人氣を集めたり、斯くの如きもの殆ど十年間、明治二十二三年頃迄は、觀世物の數加はり、妖魔の出沒、增殖せるの一事を外にしては、眞面目なる生民の來り住む者、甚だ稀なりき、以て佐竹ノ原の初期の光景如何を想像すべし、顧るに西比利亞、滿州、若くは濠州等の殖民地に於て、醜業婦が常に其の先を爲せるは、我國移民の狀態にして、世の非難を受くる所なるが、焉んぞ知らん、都市の新開地にても、其の消息を同ふする者あらんとは。

C　地主と借地人との衝突

佐竹ノ原開拓後十年、明治二十五年に至りて、一の革命起れり、即ち佐竹ノ原の草分者を以て任じ、殿様を以て呼ばれたる熊谷某と、一般住民との衝突是なり、蓋し佐竹ノ原は、舊幕の頃は、秋田藩主佐竹氏の屋敷跡なりしは、讀者の普く知る所なるべく、維新後東京府の有と爲り、明治十五年頃に至る迄、草木の生へる儘に打ち棄てありしが、熊谷某、或緣故に依り、殆ど無代價同樣の低價を以て、二万坪といふ廣漠たる土地を一と手に借り下げ、自ら奔走して與行師等を誘ひ、其の開拓に從へり、之を以て土地に對する所有權は、東京府に在りしと雖も、封建時代に於ける地主のそれの如く、名は借地者といふも、一種の大地主なりしにて、其の專有に歸したるを機として、多額の地代を收めたるなり、年一年、移住者の增殖せると共に、茲に暴橫なる借地法を行へり。

即ち土地一坪に對し、當時六錢乃至七錢なりしが、熊谷は其の權力に任せて、縱に其の地代を高めたるのみならず、若し地代を延滯する者あれば、退去を命じ、甚しきは地代延滯の都度、一錢宛地代を上げ、後には、土地を借らんとする者には、二ヶ月乃至三ヶ月の前金を徵するに至れり。

之を以て月一ト月、年一年、熊谷の暴橫を憤る者增加し、互に之を語りて、其の橫暴を議し合へりしが、倘、一人の起つて、公然反抗運動を試むる者はなかりき、然かも熊谷の橫暴ます〳〵甚しく、遂に一坪の土地に對し、十錢以上を拂ふ者を生ずるに至れり、機は熟せり、明治二十五年の春、正月に近かんとする急忙の時に臨み、當時第十五號地に住めりし長谷川某、私かに本鄕區新花町に住する飯島某に圖り、今日常務員の職に在る岩倉等と牒めし合せ、其の橫暴を東京市役所に告げ、實に二三の辯士を聘して、公然熊谷某の暴狀を公衆に訴へたり、當時大名以上の勢力を揮ひたる熊谷は大に驚き、黃金を散して其の連名者を買收し、或は常に佐竹ノ原に徘徊する惡漢を指嗾して、之に抵抗を試みたりしが、大勢の赴く所、如何ともすべきやうなく東京市當局者も大に一般住民の意を諒とし、恰も借地期限の來りしを機とし、熊谷の手より奪ふて、遂に市自身之を取扱ふ今日の如く爲るに至れり、其の間喜劇あり、悲劇あり、幾多の事實遺れりと雖も、紙幅に限あるを以て、略す。

要するに、佐竹ノ原に於ける件の衝突は、民性發展の歷史にして、此の小やかなる土地の小やかなる事實

にも、一種の民主思想の澎湃たるを認むることを得べし。

＊　＊　＊　＊

熊谷の暴横消滅して、地代低廉と爲るや、四方より來住する者多く、特に日淸戰役以後、銘酒屋の繁忙を示せると共に、商家の數も、大に增加し、明治三十二三年頃に至りて、遂に兩國の繁昌を奪ふて、今日の如く都下有數の繁華と爲るに至れり、而して警察の注意は、往日佐竹の名物たりし醜業婦の輩をして屛息せしるに至りたるは、喜ぶべしと雖も、何れの新開地にも存する「遊人」の徒、尙跋扈しつゝあるを悲しむべしとせん。

滿州片信

拜啓、御無沙汰の段、衆位諸君に對し、失禮仕候。小生は、目下、尙ほ寬甸城に罷在候、此地は、北の方、懷仁縣、通化縣等と共に、近年の開墾に係り、土人の言に由れば、二三十年前までは、全くの樹林なりしものなるが、山東省の土民、漸次に此地に移住して、山澤を開き候ものにて、今日尙ほ人口多からず。縣治を布けるは、光緖三年の時の事の由に御座候。

△人口　小生、少々都合ありて、縣廳に至り、當地の人口を取調べ候處、思ひきや、知るものとてはあらざりしとは。依りて、僅に城内のみの人口を取調べ候も、縣廳の戶科の官吏は、之を知るものもあらず、直ちに鄕約とて、日本にて言はゞ、差配人の如きものを集めて、取調べ候に、曰く、二百八十餘戶、内商家九十八戶との事に御座候。戶科にて、之を知らぬとは、呆れざるを得ず候。

△縣廳　寬甸縣の知縣は。榮禧と申候。滿洲族人にて、年の頃は五十の上を四五も過ぎしかと存ぜられ候。書を能くし、畫を能くし。溫厚の君子人にて、日本軍隊の命令は、惟々として承り、孜々働き居り候。勿論、一個の木偶漢にて、土地の狀况にも通せず、部下をして事務を辨ぜしめ居候。部下は、庫科、戶科、吏科、工科等に別れ、外に裁判事務を司どる所も有之候。官吏どもは、毎日遊逸に日を過ごし居ること、吾人の如き忙殺せらる人に取りては、浦山しく存居候。

△監獄　縣廳の附屬獄舍之れ有り候。獄內に、罪四十五六人も在り。內、女四二人、皆な是れ婆様に御座候古風の監獄、頗る趣味を覺え候。

△教育　此地の教育は、頗る哀れむべき狀況に御座候官吏の一部、商人の一部のみ、僅に四書を讀み、五經を素讀し、古文を知るのみにて、士人の多くは、文字を知るものとては殆んど之なく候。學校とも申すべきものもあれども、子供を集めて、三字經、百家姓の如きものを讀ませ、字を習はしむるに過ぎず候。更に驚くべきは、此地の人々の無智文盲なる、午後二時に來れと言へば、二時とは何頃なるやを知らず。日を指して、コレガコノ邊まで來る頃なりと言へば、漸く用を辨じ申候。只々呆れ還る外之れなく候。

△宗教　此地方の宗教とて、別に記すべき程にも之れなく候へども、佛教よりも道教の寺院多く。此の地にある廟宇としては、關帝廟、城隍廟、文昌宮、何れも道教の觀に御座候。但し、中には佛教を信奉して、酒を呑まず、吃飯せざる者も多き様子に御座候が、寺院は殆んど之れあらず候。外に天主教の一會堂之れあり。牧師は、支那人に有之、佛國教會の管下に候由、佛人を肩に着て、威張り散らし、頗る惡らしく存せられ候。日本兵の宿舍に割り宛てたるに、牧師先生謂て曰く、各國みな天主教を保護す。獨り日本は何が故に保護せざるやなど。日本人の之を惡むこと頗る甚しくみな之を罵詈致居候。或は間諜ならんかとて、頗る嫌疑をかくるものも之れ有り候。兎に角、注意人物として軍隊の注意するところに御座候。

△間諜　之に就て、面白きは、間諜の嫌疑に御座候。六月十二日夜、小生等兵站部にあるや、風紀衛兵所の衛兵廿一名、突然來り告げて曰く、今夜露國の間諜、某中隊に放火したり。形勢不穩、露兵襲來するやも知れず。今夜特に哨兵を增加す。御注意あれ云々。次て聯隊本部よりも、同様の注意ありて大さわぎを爲せり然るに、安んぞ知らん。小生翌日その實況を檢査するに、同夜、某支那人の家に病人あり。迷信の盛なる國柄とて、祖先のたゝりなりとの事に、紙を燒きて物怪を祓ふとか。之が爲に燃え上りたるも

のと聞き終りて之を隊に報ずれば。一座之が爲に洪笑致候。

△名物男　寛甸縣の名物男と云へば、當市馬隊の長に李得勝なる者あり。年齢は五十位、頗る心を日本に寄せ、日本軍の寛甸に入らんとするに先きだち、豫じめ露國の事情を屢々我軍に報じ、便宜を與へたること頗る大なる由に御座候。その後ち、愈々寛甸攻擊の當夜は、敵兵の眼を忍びて、敵の狀勢を報じ候。之が爲め日兵の進入に多大の便益を與へ、又々日軍と共に馬に跨がりて、露兵を追擊せりとの事。今日も、糧食輸送敵狀探索等の事に關し、便益を與へ居り候事少からず日本人にありて、誰れも之を賞せざるなく、逐ては恩賞あるべきことゝ存ぜられ候。

尙ほ、戰報、敵狀等に關し、申し述べたき事山々あれども、今日は之を以て擱筆致候。晝間熱度七十餘度、漸く暑氣甚しからんとす願はく健在なれ。匆々啓具

寛甸縣兵站司令部にて

六月十四日　西山榮久

お笑ひぐさ

此の程文壇の些事として面白かつた事は、中島孤島、正宗白鳥對新詩社一派の喧嘩であつた。馬場孤蝶といふ男のおせつかひは別として、彼等に對する孤島、白鳥兩人が解嘲の文を比べて見ると頗る面白い。孤嶋の「矢文」は實に厭味たつぷりてある。あんな事をいふから人に擧足を捕られるのだ。飜譯と創作とを區別して一を、自然人生から直に得來るといひ、一を藝術から得來るといつて居る。凡そ牽强附會も之れほど無茶苦茶はない寧ろ、白鳥が平直に肌を脱いて誤謬は誤謬として謝り、更に巧拙の點に於てグッと敵手を捕へた所は甘い。鐵幹一派が「文壇の進歩を計る云々」といふ厚皮面を側面から引剝ぎ、最後に至り「原稿料を十分に越せば返事を遣る」と喝したのは嬉しかつた。此の一句直に文壇の醜類が肺腑を抉ぐるものである。全体彼の輩はつまらぬ小風波を文海に起し、其の喧嘩宿をして雜誌の十册も餘計に賣らうといふ汚い腹に過ぎぬ。全く田舍の小料理屋と撰ばぬのだ。



思潮

我國民將來の理想

「太陽」　箕作元八氏

凡そ世界歴史上で、强國となつた國民は、必ず强健なる大理想を抱いて居た。此の理想の性質は、其の國民の特殊の地位と品性とに基いて居る。そこで其の理想が、國家の利益上に、餘り多くの用をなさぬ時代に至れば、其の國家は衰退する。

偖て吾が日本は、如何にして今日の隆盛に達したかと云ふに、これ連綿として續ける皇室を戴き、曾つて外侮を受けたことなき金甌無瑕の國躰を維持せむとする理想が今日の隆々たる日本を作つたのである

此の理想は、極めて國家的であるから、今日世界の日本となつた以上は、此の國家的理想と、兩立して而も國威を發揮すべき世界的理想を立つべきである、然らば其大理想とは何か。東西文明の融和で、其の天職を全うするとは、將に吾が國民の今後勉むべき所である。而も此の理想は、從前の理想と抵觸することはなく、或る意味に於いて、其れを擴張することになる、乃ち我が國民は將來に於いて、啻に自國の爲に計る許りでなく、世界歴史の大潮流に乘して、全人類の爲めに、平和幸福の福音を宣ふべき理想を有たればならぬ、此の理想たる偉大なると共に崇高であつて、萬國に衿るに足る。而して我が日本が、此の理想を抱き得る地位に在るとは、我れ等國民の幸福である

こゝに一言して置かればならぬ事は、我國が西洋の文明を吸收したことは、形而下の方面に多く、形而上の方には、未だ十分に、其結果が顯れて居らぬ。然し乍ら此形而上の事こそ我々が東西兩文明の融合上に、最も手腕を顯はさなくてばならぬ所である。

故に我れ等は、今後に於いては、政治に、宗教に、其の他文學美術等有ゆる方面に向つて、此の崇高偉大の理想を心中として、活動しなければならぬ。これ我が國民に、不退轉の活氣を與へ、國家をして絶え間なき進歩をなさしむる源泉である。

そこで我國民をして一般に、自己の地位を自覺せしむるには、種々ある手段中、最も重要なるは、教育である。孔孟は戰國に居て、仁義を説いた。人は是れを迂遠と嗤つたであらうが、是れ實に最も肝要なる根本的改良である。

近い例を取れば千八百〇七年頃のプロシアは、ナポレオンの爲に、領土の三分の一を失ひ、莫大なる償金を課せられ、國家の存立すら覺束ない窮狀に陷つたのにも拘らず、千八百十年を以てベルリン大學を創立した。これスタイン、ハルデンブルヒ、ニーブール等諸名士の主張に成つたもので、其の意は、教育に由つて、國民に根本より高尚な思想を植え付け、以つて國家の爲に、奮勵せしむるに在つた。スタイン、ハルデンブルヒ等は、決して迂遠な學者ではない、非常に實際的の大政事家である、而も此國家衰弱財政困難の時に當り教育の爲に巨萬の資金を投じたのは、今日のドイツの覇となり、世界に雄飛するプロシアを産んだ所以である。

我國にては、維新の當時國家の存立さへ危くして、内外多事、財政は非常に困難なるにも拘らず、國威發揚の大理想を貫く爲め、借金をしても諸種の學校を起した。此點に於て當時の爲政家の着眼確かに敬服の價値がある。今日の日本の隆盛は、實に其の時蒔いた種子の結果である。

獨佛戰役の後、或人がモルトケに戰勝の源因を問ふたら、夫れは全く小學校教師の力であると云ふた。先頃余が或る軍人に聞いた所に從ると、其類なき働を以て世界を驚かしたる旅順口閉塞隊員は、久しく軍隊に於て訓練されたものゝみであるかと言ふに、決して左樣ではない、入團後、日尚ほ淺き人々が澤山であるさうだ。即ち其の勇敢なる行動は、軍隊の機械的教育から生じたものでなく、國民的教育が、其の地盤となつて居るのである。

顧るに、今日の我が教育には、尚ほ不完全なる點が多い。然るに、今徒らに時局に托して、教育にまで消極的方針を取り、偉大なる國民たるべき運命を有する我が子弟の教育に關して、一層力を用ふるとなくば、吾れ等は、前途に就きて安堵することが出來ぬのである。

活動の時期

國民新聞

今日は手を袖にして、不景氣を喞つの時節にあらず。又は爪に火を點して、消極的の引き込み儉約を爲すの場合にあらず。苟も爲す可き事あらば、遠慮なく爲す可し。人往々戰爭の後と云ふ、されど何んぞ戰後を待たんや。乃ち今日に於て、爲す可き也。爲さざる可らざる也。

而して吾人が希望は。單に内地に業を起すのみならず、亦た宜しく進んで海外に業を起す可き時節の、既に業に到來しつゝあるを認めずんばあらず。朝鮮半島の如きは、事實の下に於て、既に戰塵を絕ち、何人にても、何時にても、如何なる場所にても。自在に往訪し、自由に企業し得るにあらずや。吾人は我國の所謂實業家の、餘りに呑氣なるに驚かざるを得ず。若し此の儘にて經過せん乎。折角朝鮮經營の地は、我が國家の力にて出て來りたるも、其の惠に浴する者は、我が國民にあらずして、外國人たらずんばあらず現に米國人の如きは些少の油斷もなくそれ〳〵着眼しつゝあるを知らずや。一日忘れば、一日の損あり。吾人は彼等が異日に於て、臍を噬むの悔あらんことを恐る。

若し我が國民に、奬勵す可き氣風ありとせば、そは事業を愛するの氣風是れ也。一歩を推進して云へば、事業の爲に、事業を愛するの氣風是れ也。然るに有力者を始めとし、此れが鼻息を覗ふ者、動もすれば唯だ絕對的儉約論を鼓吹し、得することよりも、損せざらんとのみを奬勵し。遂に國民の雄心を挫げて、一種の高利貸的氣質に、變生せしむるが如きは、吾人が甚だ同意するを難しとする所也蓋し國には資本を以て、一國の基礎となすものあり。又た國民の活動を以て、基礎となすものあり。我國の如き若し徒らに資本を積蓄する事のみを奬勵せば。其の目的の未だ遂せざる以前に、國民の多數は、早くも若隱居に化するの外なかる可し。是れ實に深憂大患也。吾人豈に張膽明目、此れを排斥せざるを得んや。

戰爭と家庭教育

國民新聞（島津家家庭教師ハウアード談）

自然の準備　今回の戰爭に日本が着々好結果を得つゝあるは決して偶然でないと思ひます。即ち日本では以前から戰爭の爲めの教育と云ふ次第ではありませぬが日々學校及び家庭にて教訓しつゝあることが自然に此の好結果を得る準備となつて居つたのであります。故にイザ國家の大

難と云ふ場合に遭遇しても格別慌ることもなく騒ぐこともなく好結果を得るのも畢竟之が爲めでありませう。勿論此は幼年時代からの教育の功能で學校に於ては別段注意して居らぬ事も却つて他日重大な準備になつて居ることが解ります。學校の演習や遠足の様な事之に體操などでも單に身體を健康にすると云ふだけでなく大切なる精神教育にあるやうであります。

目前の教訓　私一箇の考でありませぬが今回の戰爭に於て日本が常に勝利を得ることに付いて單に露西亞が弱く日本が强いから勝つと云ふ事だけを小供に聞かせるのは甚だ親の心得違であつて、斯様な教へ方をすると小供に高慢心を吹込むやうなものであるから今回の戰爭に付いて小供を教訓せらるゝに當りては日本は正義であるから勝つのであると云ふ事を説明し如何なる場合でも正義が必らず勝つと云ふ感念を小供の腦中に吹込むが最とも大切である。又た正義を行ふ爲めに一致すると云ふ事を説明し如何なる難事にても一致の力によりて必らず成就すると云ふ事を時勢に照らして教へることが大切であらうと思ひます。又平素英雄豪傑の史談などを書物に就て小供に讀み聞かせる事は教育上有益の事であるが今日のやうな場合には目前活きた模範が澤山あるから、人の親たるものは此時充分小供を教導する事が必要であると思ふ同じ英雄豪傑談でも過去の事を書物によりて語るのと、現在目前の事實より語るのとは小供の感情を教錬するに餘程の相違がある、殊に上流に立つて人を指導する地位にあるものは國民忠勇の實例を目前に見れば自分達の責任如何に重きかを自覺するやうになつて身を捨てても人を扶ければならぬと云ふ精神を喚起するだらうと思ひます。一方から申すと戰爭は實に多くの壯丁を殺し家庭を破壞し悲慘極まるものでありますが又一方から見ればこれが爲め國民的教育の材料を供給し將來益々國民の品性を高くする良結果を齎らすもとであると思ひます。

感情と活動　誰も外國人は云ふことでありますが日本人が感情を外面に現はさぬのは不思議な程である。大災難にも大幸運にも日本人は飽くまで沈着な態度を守つて、叫び廻るとか狂ひ廻るとか常軌を脱れたことはないやうに見受けられます。これに依つても日本人が何れだけ感情の表示に謹んで居るかが解りますが、それと同時に如何に一生懸命の力を籠いて居るかと云ふことが解かると思ひます。

戰死者の妻女、

時事新報

戰死者の遺族に對しては政府より扶助料を與ふるの恩典もあり又民間にも夫れ〴〵救助の仕組ありて差當り生活に苦しむことはなかる可し此點は我輩の先づ安心する所なれども生活の問題を別にして遺族の悲嘆慘狀は人をして酸鼻に堪へざらしむもの多き中にも結婚匆々の新婦人にして良人の戰死を聞き遽に綠の黑髮を斷ちたりとの沙汰は往々新聞紙にも見え世間にては目するに貞女烈婦を以てして之を稱賛するものなきに非ず當人の心事を察するときは唯涙の外なしと雖も傍より斯る擧動を稱賛するに至りては實に無殘の極にして我輩に於ては決して當人の爲めに親切なるものと認むるを得ざるなり今度の戰爭には戰死者の多きと共に必ず幾多の若未亡人を生ずることならん實に人生の不幸にして忍びざる所なれども國家の大變に際しては止むを得ざる次第なりとして其人々の爲めに謀れば今後老先きの長き身を處するに成る可く其不幸を輕くして將來の幸福を得せしめんとするこそ人情の當に然る可き所なるに一時の感情より其擧動を稱賛して當人一生涯の幸不幸を考えざるが如き我輩の取らざる所なり我國の習慣に於て婦人が夫を喪ひたる後、自ら斷髮するは再

び二夫に見えざるの決心を示すゝものに外ならず或は其婦人に子供もあり年齢も相應に老して自ら子女を養育するの責任あるものならんには生涯を未亡人として送るの覺悟も尤も至極なれども結婚來幾年も經ずして未だ子女をも有せざる若婦人の夫の戰死に遭ふて哀慕の情に堪へず自ら髪を斷つが如き其心事は實に察す可しと雖も傍より考ふるときは年若きに婦人の身に前後の思慮もなく斯る擧動に出づるものにして其行末甚だ掛念すべきものなきに非ず今日の社會に婦人が獨立して一生涯を送るが如き實際に容易ならざるのみならず青春の婦人をして終身未亡人たらしむるは本來人間天性に反するの沙汰にして其不幸慘狀をしてますます甚だしからしむるものと云ふ可し古來我國には彼の女大學流なる貞婦二人に見えずなど一種の女訓世に行はれて今の婦人も自ら感化を蒙るもの多きが故に今回の如く男子が戰場に壯烈なる戰死を遂げたる場合に其妻たる婦人が自ら髪を斷つの決心は敢て怪しむに足らず即ち古流の女訓に於ては天晴れ貞女の鑑とも認むる所のものなれども從來とても實際の事實は往々これに反して却て女德を汚したるの例なきに非ず況や斯る女訓は取りも直さず東洋儒教主義の流弊として識者に於ては極力これを排斥して德風の一新を期しつゝある今日に當り尚ほ古主義の流弊を脱せずして斯る擧動を稱贊し爲めに婦人の一生涯を誤らしむるが如き思はざるの甚だしきらのならずや當局なる婦人の身としては悲哀失望の、一時前後の分別を失ふも無理ならぬ次第なれども其父兄親戚もしくは友人たるものは斯る婦人に對しては其不幸を慰むと共に篤と行末の利害を考へて其身の爲めに謀るこそ肝要なれ戰爭は一時の變にして人生の一生涯は甚だ長し一時感情の爲めに永久の幸不幸を忘れて可惜その身を誤らしむるが如き我輩の忍びざる所にして呉れぐれも世人の注意を望まざるを得ざるなり。

冥想の樂み

「萬朝報」　黑岩涙香氏

世人多くは歡樂を形色の美に求めて、冥想に無盡の樂あるを知らず、不幸なる哉、其れ冥想する者は窮する時なし、一室も天地なり、財無きも富み、事無きも樂し、凡そ心頭に浮動するもの一として味ひて以て深く造化の秘に到り觸る可からざるは莫し、獨逸の學者エルネストケルは科學が前人の未だ知らざる「美」の新世界を發見し得たりと稱し、顯微鏡下に幻出する小宇宙を寫眞にして世に公けにしたり、世人は實に小宇宙の美、平常目睹する所の大宇宙を凌ぐ者あるに服し、美を樂むの道の一進歩なりと稱せり、小宇宙の美に接するは渉獵の區域を大宇宙に限れるに比して一の進歩なるには相違無し、然れども何ぞ如かんや哲人が更に遠く心界の領分に入りて無限の美を顯微鏡だにも達する能はざる所に求むるの更に大なる進歩なるには

余は思ふ、人の最も大なるは品性の修養にして、而して修養の最も大なるは冥想に得べし、冥想は單に美、單に樂と云ふのみに非ざるなり、冥想する者は樂みの中に修養を得るなり、蓋し人の一身に三の我あり、饑て食はんと欲し、悲くして泣かんと欲するが如きは一の我なり、此性は禽獸と通有なり、故に『獸我』(エゴージー、アニマル)と稱す、『獸我』を制御して宜しきを得せしむるは人の性格なり、所謂る品性なり、人の人たる所以の者なり之を『人我』(エゴージーマン)と稱す、彼の『獸我』より發する樣々の欲望のうち『人我』と相合する者が採用せられて我れの實行實動と爲る、心理學者の稱する動機即ち是なり、動機とは獸我と人我との調和點なるに外ならず、故に人、『獸我』強くして『人我』弱ければ即ち動機低くして其行ひ禽獸に近し、之を墮落と云ふ、品性の最も下

なる者なり、『人我』強くして『獸我』に勝つ人は即ち人並の人たる也、性格あり品性ある人なり　唯だ『人我』と『獸我』との分量は、之を天に受く、生れながらに定まれるなり、然らば天分に於て『人我』甚だ少くして『獸我』獨り强き人は不幸なり、天を恨むの外なかる可きか、曰く是れ修養の意味ある所以なり、我は生れながらにして『人我』少し修養を以て『人我』を多くせざる可からず

先づ自ら省みよ、我れの天分は『人我』多きか『獸我』多きかと、斯して『人我』の少きを知らば之を慨き之を悲むの心起らん、此の之か慨き之を悲むの我は何者ぞ『人我』なるか、『獸我』なるか曰く、『人我』に非ず『獸我』に非ず、宛も人我が獸我の上に立てるが如く更に人我の上に立てる我なり、之を『神我』（エゴーシー・ゴッド）と云ふ、人は『獸我』をば『人我』に屈從せしむる程度に從ひ『人らしく』成り行くと同く、更に『人我』をば『神我』に從はしむるの程度に從ひ『神々しく』なりゆくなり、見よ人にして並上の崇高なる行動を發し、人並以上の偉大なる事業を遂ぐる人あるとを『神我』に依らずして爲んぞ之を得んや

更に問ふ、生れながらに『神我』の弱き人は如何にするや、更に神我の以上に『某我』（エゴーシー、サムシング）ありて『神我』を救ふや、曰く是れ我が所謂る冥想なり、人は冥想して『神我』を養はざる可からず

孟子曰く我れ善く吾が活然の氣を養ふと、又曰く是れ餒ると無きなりと、彼れが浩然の氣と云ふ者は『神我』なり、彼れや神我に於て餒えず、故に能く孟子たるを得たり、心を靜にして獨り思へ、一輪の花は如何の顯微鏡を以てするも、竟に彼れが何の機關を以て、如何に之を活勝せしめて、地より、空より、日光より、養分を吸ひ、色を奪ひ、力を採れるやを知る可かず、南山の戰、得利寺の役、天地を動す活劇なりと稱せらるゝと雖も、吾人が一日諦視して猶は何の變化をも看取し得ざる爪の延びんか爲に時々刻々に戰へる細胞の戰爭の慘憺たるに比すれば、彼れの此れよりも小なるは、常人が此れの彼れよりも小なりと思ひ倣せる割合よりも更に小なるなり、思ふて極の極に至れば至小無内の内に至大無外の外を蔵するを知り、造化絶妙の機微、直ちに人の『神我』と接觸しての我の此世に來れるの偶然ならざるを知るなり、汝の『神我』をして造化の絶大なる力に觸れしめよ、『神我』は自ら奮ひ起りて、其の熾なると永久に滅せざる火の如くならん、神我をして斯の如くに極の極に接し到らしむるもの冥想の手段を置きて何かある、之に賴るものは貧しきにも苦まず、饑渇にも餒えざるなり、又形色の美の外に、味ひて盡きさるも歡樂あらん

吾人は嘗て本紙に於て我が邦の文學に顯はれたる國民氣質を論じ、また前號に於て寄席と風敎に就いて所思を述べおけり。本誌論說欄の三上博士が「時局と歷史敎育」中に說かるゝ所と吾人の所思と一致せるものあるを見て愚見の遂に空しからざりしを明にするを得たり。



詞藻

短夜　漱石選

短夜の明けて社の太皷かな　初聲
豆腐屋の臼ごろ〱と明け易き　同
短夜の船に明けたり川手水　同
短夜の水車場ごとり〱かな　同
瓦斯燈に明け易き夜の大路かな　同
明易き夜汽車の窓や海の月　柳波
魚河岸や魚の荷着いて明け易き　青龍
短夜や放ちし猫の戻り來る　五遷
短夜や山越して來る魚賣　可七
進軍の喇叭や陣の明け易き　同

凱旋の夢や野營の明け易き　破蕉
短夜や蚊帳に居てきく蟬の聲　同
明け易き夜や寐ずに居る山の茶屋　亭雄生
餌に呼ぶ鵜鳥の聲や明け易き　同
吉原を出てゝ入谷や明けやすき　蒼月
川口や汽笛に宿の明けやすき　同
明け易き夜や草の戸の豆ラムプ　一歩
短夜や宿場はづれの大銀杏　同
鯉釣の舟や河尻明け易き　三溪
短夜や橋番の灯の消えてあり　同
江に臨む樓の絃歌や明け易き　蘆風
短夜の戸をあけてまた眠りけり　同
隣村の醫者迎へけり明けやすき　翠謌
代り立つ歩哨や森の明け易き　同
短夜や同じところに墓　圓外
短夜や山良の戸渡る舟もよひ　同
翠帳に短夜の灯や明けのこる　英子
約束の橋の袂や明け易き（待戀）　同

裏山の梟の聲や明けやすき　浦亭
轉寐や短夜すでに明けの空　同
宿とりて瀬音に悔や明け易き　黄村
短夜や歎は其儘の金魚鉢　同

選者吟

短夜や敵前の架橋成りにけり
魚河岸へ急ぐ小斷や明け易き
短夜や逃げをゝせたる牢破り
靜まりし道頓堀や明けやすき
鳥けもの動物園の明け易き
もやひ井戸明易き夜となりにけり
波よする大磯小磯明けやすき
短夜の使は明けて歸りけり

九月分課題　蘭　八月十八日限
十月分課題　霧　九月十八日限

歌

尾上柴舟選

前田夕暮

美しとあこがれにしは慕ひしは飢ゑしこゝろのまどひなりしよ
十年へてふとわが胸にかへりきぬ前下髪のあどけなのおも
あを梅にそとひそめますほそ眉にきみが里居の夏うつくしき
眺むれば趣(しゆ)もなき世のたゝずまひみ筆に入りてみなひかりあり
あゝさだめさだめとならば「零落(うらぶれ)」よ汝がひやゝけき手に抱(いだ)かれむ
うらぶれのわが身の胸をふる郷と愁の鳥のまたかへりくる

東薫

よき名得てわがしかばねを埋めむにはあまりに淋し遼
東の山

静やけきあめの光に靈のせてわが身生きたり死なむこ
ともよし(短命の宣告をうけて)

光得てわれらが領ぞあらたまると大和ますらを勝どき
あぐる

曾我岫雲

さだめぞと思ひさだめし夜すぐればをのゝきまたも胸
に迫り來

文子

戸によりてひくうわが誦す秘歌をたゝふるごとく風和
して行く

鈴子

戀うみぬ罪はたうみぬこれぞわがもだえほこりの五尺
くろ髪

正富汪洋

九つまで乳房によりし子にしあれば二十の戀もからあ
どけなし

わが集をやがて燒かむと官の子が談らふらしと人笑み
てよる

たえて見ぬ初々しさを君に見しこの夜の日記は神もの
ぞくな

前號正誤。燭さえて小琴に松のかげ淡しこよ
ひかぎりの下嵯峨の宿。華子。

和歌募集題隨意

八月十五日限

野の草

大塚甲山

眞晝の暑は　石をも溶かせ
か弱き小草の　豈たへめや
萎へてかげなく　埃に伏して
哀や枯るゝに　程もあらじ。

來て見よ、黄昏、　月を踏みて
露は愛の手　隈なく覆ひ
一日の痛手を　めぐひつくし
眞珠はてなく　溥々と溢る。

仆れし小草は　皆起き出てて
綠の勢　昔の如し
捧げし葉の面に　『夜の平和』
讃歌はさやかに　しるされたり。

重たき人の世　荷にしたへて
喘ぎ倒るゝ　彼等なれど
尊き訓は　涌く白露
かしこき攝理は　夕べの月。

つかれし心を　奮ひ回し
强き望に　攀ぢずあらば
野路のほとりに　蘇れる
草にも如かざる　我等ならむ。



評論

戰時の教育

成川生

軍國多事の際と雖も教育の事は忽にすべからず
其局に當る者克く勵精せよ

これ叡聖文武なる

天皇陛下　が、帝國大學卒業式に行幸あらせられしとき、文部大臣を召して、特に下されたる御沙汰書なり。優渥なる聖旨を拜する者、誰れか又感激せざるものぞ。

去れど吾人は惧る、徒に形式の完備を怡ぶ教育界の一部が、聖旨の在る所を、誤解せむとを御沙汰書は簡なりと雖も、其の意味の深大高遠なる、一朝にして盡すべきに非ず。平々凡々の教育家の如きは、恐らくは此の高大無限なる聖旨を解し得ざるべし。吾れ等凡人、亦之れを窺うて、全然會得しかたかるべしと雖も、感激の餘り、禿筆を呵して、管見を述べむと欲す。

御沙汰書には、「教育の事は」とありて、「教育の形式の事は」を書せられず。これ吾人の注目すべき要點なりとす。

開戰以來、教育界の一部には、教育縮少の不可を說く者多かりき。吾人は當時に於いて、其の愚論たるを說きしが、頑迷なる形式崇拜の徒は、ますく其の論調を高めたるが故に、遂に聖旨を煩はすに至りぬ。彼れ等愚昧の教育家、將に慙死すべきなり。何となれば、彼れ等が、教育不振を說くと其の物が、教育の事を忽諸に附するものなればなり。

彼れ等教育者が、教育不振の實例として掲ぐるものは何ぞや。曰はく、山口高等學校にて生徒を募集せざる事實なり。曰はく、諸地方に於いて、校舍の新築を見合はせたる事實なり。曰はく、秋田、長野地方に於ける教育費節減の事實なり。此の他文相が二部教授說を唱出したるも亦、非難を受けし一原因なりとす。

斯くの如き事實は、果して教育の縮少を證明するものなりや。吾人の看る所を以ってするに是れ教育の形

式を縮少したるもののみ。而して又文相自身が言へるが如く(七月十六日日本新聞參照)戰爭を一の機會として、積年の宿弊を一掃したるものゝみ。何ぞ教育其の物を縮少せるものならむや

教育の普及には、固より多少の形式を必要とすと雖も、形式備りて後に、教育振興するものにあらざるは、吾人の贅言を俟たずして明白なるべし。森の蔭、芝原なればとて、教育の出來ぬといふ理由はなく、校舍あらざれば、教育を施し難しとの理論は成立せじ。一歩を進めて論ぜむか。形式の完備を欲するは、實質の進歩發展を害する塲合、決して尠しとせざるなり形の爲に盡すは、屢ば精神を失ふ第一歩たり

我が教育界に於いては、斯くの如き惡しき傾向あるは、吾人の屢ば論じたる所否有識の士が、夙に看破する所なり。一個人に譬ふれば紳士たらむと欲して、先づ外形風采の裝飾に、苦心する者は、何時しか、精神上にて、紳士たることを忘却し、遂には、形ばかりの紳士となる。形式の完備をのみ尙ぶ教育も亦、何時しか無精神の教育と變ずるは、火を睹るよりも瞭かなり。かの情實なるものゝ如きも、畢竟するに、形式を尙ぶ主義より生ずるものに外ならず。

されば軍國多事の際、形式の上に於いて、多少の縮少をなしたればとて、教育其の物の進歩には、何等の障害もなく、又之れを一の好機會として、宿弊を掃除したるは、むしろ慶すべきものならずや。戰爭のために、有ゆる形式は破壞せらるゝとするも、教育には何等の障害もなく、ますます其の光彩を放ち得べし。乃ち教育家其の人の精神如何によりていかに美しき形式あればとて、教育は滅ぶべく、又不完全なる形式なればとて、教育は隆々たるべし。教育の盛衰を論ずるに當りて、形式とか、物質とかを標準とする徒輩には、尊儼なる御沙汰書は、到底解釋すること能はざるべし、乞ふ反省せよ。

帝國教育會の學制調査

帝國教育會の評議員が研究した學制調査は參考として文部大臣の手元まで呈出された。今其の重なる點を摘摭して見れば、左の通りである。

一、義務教育を六ヶ年として、尋常高等兩種校小學の區別を廢すること

二、中學校を現今の通り修業年限五ヶ年として其の名稱を高等學校とすること

三、高等女學校の修業年限を五ヶ年とするを原則とすると

四、今日の高等學校の或る者を改めて、帝國大學豫備門とすると

五、今日の高等學校の或る者を改めて、實用的人物を造る大學とし入學者は中學卒業者て、修業年限を豫科本科合せて四ヶ年とすると

此の他、帝國大學圖書館を公開するとか、或は視學官制度の改正とか、或は學課目、教員待遇とかの點に關して、詳細の注文がある。此れ等は文部省にとりては、有益なる參考箇條であるかは知れぬが、學制改正の上には、左程の重きをなすものでない。

徒に此の改正意見に就いて、如何程の改良案あるかと、討究して見たならば、遺憾ながら吾人は不滿足に思ふ。

先づ第一に吾人の問はむと欲する點がある。學制政革の必要は何に依つて生起したか。これ先决問題であるにも拘らず、多くの人々の等閑視する點であるが帝國教育會の評議員諸氏は、果して此の點を考慮したてあるか、これ甚だ疑はしい。何となれば其の形式を過重する點を見れば、去もあらむかと思はれるからである。一寸見た所でも、小學校の名目を廢して、國民學校とするとか、中學校の名を廢して、高等學校とするとか、或は公立學校長又は教員の文官待遇の制を更めて、文官とするとか、助教授、助教諭などの名義を廢して、教授、教諭とするとか、其の他、隨分形式に拘泥した點が多い。否むしろ改革案の大部分は、形式の方面であると言つて宜しい位てある。意見書中には、『學校事務ノ繁文褥禮ニ渉ルモノハ』一切これを廢すべしとあるにも拘らず、意見書其の物が、中々に繁文褥禮に渉りつゝあるは、抱腹絶倒すべきてある。

枝葉の問題は、別として、前記せる疑問、即ち何が故に、學制を改良すべき必要あるかを研究して見やうと思ふ。

吾が輩の見る所では、學制改革の必要は、將來の國民に、自活の道を與へねばならぬといふ方針から生起したものである。教育學から論じて來れば、教育の目的には、種々あるであらうか、要するに、健全なる國民を造るのが、其の第一目的であり、また其の國民なるものは、衣食住の不足なくして生活する者であるとは、明白であらうと思ふ。即ち教育は、人の世話に

ならずして、生活し得る道を教ふるのが、大原則である、

此の點に關しては、誰人も異議を唱へぬであらうと思ふ、然らば現在の教育は、果して此の目的に適合して居るものであらうか。如何なる人と雖も、大目的に背馳して居ると言ふに憚らぬであらう。毎年諸種の學校から、千百の卒業生を出すが、其れ等の人々は、直に自立することが出來るであらうか、否、實際に望んで、有用なる技量を有して居るであらうか。吾人の見る所では、大多數は、所謂學校出で、實際社會に有用なる貢献を爲し得ざる人々である。もし假りに實際的知識ありとしても、日本の社會は、さほど多數の學者を必要とせぬ場合も多い。折角親の身代を潰さむ許りにして卒業しても、用ひ手がない、需要がない。さあ在學時代の美しい夢は、悉く消へ去つて、一つ違へば、米鹽の料すら取れぬ場合もある。斯樣の例は、決して尠くない。社會の一部に、子弟を教育するは、余程の考へ物だとの歎聲あるは、畢り此の狀態を說明して居るものではあるまいか。

智あるものは、却つて不幸であるとは、或る哲學者の歎聲であるが、其れは全く哲學的議論で、常識から言へば、教育ある人は、幸福であると論ぜねばならぬのに、今日の狀態では、教育ある人が、却つて不幸であるとは、そも〳〵何等の因果であらうか。今日の教育は、教育ある人を不幸に陷れた原因である。人には其れ〳〵の性質あつて、或る人は學者となるに適し、或る人は學問を應用するに適して居る。即ち學者的人物と、實際的人物との二種ある。而も加へて境遇の差別あつて、學者的人物も、其の本能性を發展するとが出來ぬ場合がある。然るに我が教育界は、此の區別、先天的差別を等閑視して、只學問の注入を目的とする許りである。去ればこそ夥多不幸なる國民を作る。

維新後、西洋文明の滔々として流れ來つた時代には、知識の普及は、國家の發展上、已むを得なかつたから、なるべく多くの知識を與へやうとして、人の性質や、境遇に頓着なかつたのは、無理のない話でもあり、また時勢に適した方法であつたらうが、今日となつては只其の混同的教育法は、却つて國家の進歩を害するものと言はねばならぬ。何となれば、只一筋の教育路あるのみで、而も之れを辿るものに二種別ありといふ場合では、甲の爲にもならず、乙の爲にもならぬ教育法が行はるゝからである。

維新後の知識渇望時代の教育方針は、依然として今日に存して居ればこそ、教育を受けて却つて世路難の多くを感ずる人々を養成するのである。さて此の狀態が、即ち學制改革の必要を生ぜしめたのであるとは、恐らく世人の反對しない點であらうと思ふ、帝國教育會の意見は、果して此の窮狀を救はうと言ふ熱誠があるのであらうか。

此の窮狀を救はむとすれば、教育道が、根本から二途に分れねばならぬ。即ち小學校から二種に分れて、一は實用的國民を作り、一は、中學校に進むべき人物を教育するを大目的とせねばならぬ。中學校、高等學校、大學校等、皆な此の方針で二種に區別する、即ち一系統は全く實際を主とし他の一系統は、學問の蘊奥を研究する道とせねばならぬ。是れに於いて始めて、人の性質と境遇とに因つて、相當の教育を施し、從つて社會を進歩せしむることが出來るのである。

然るに帝國教育會の意見書では、たゞ高等教育の上で二種を區別した許りで、根底には何等の區別も立てゝない。兩目的に同時に適せむとするは、人間の爲し得ざる所であるは今更喋々する必要もあるまい、該教育會の意見は、其の根底に於いて、截然たる區別を立てゝない以上は、何のために苦心して、長々しき意見書を起草したのか、吾人は之れを解釋するに苦むのである。吾人總ての教育家が、教育制度の完備を考案する前に當つて、先づ國民を完全に健全にすべきを、討究せむことを望むのである。精神の如何に因つて、衣裳の形が始て定まるものである。

社會主義と戰爭

日本の社會主義同志者は、來八月和蘭國に開かるべき萬國社會主義大會が、日露戰爭の終局に向つて、大に努力せむことを希望するために、左の決議書を發したさうだ。

日露戰爭は畢竟兩國に於ける資本家的政府の行動に過ぎずして、爲に兩國の勞動社會は至大の損害を受けざるべからず、故に吾人日本の社會主義者は爰に來八月アムステルダムに開かるべき萬國社會主義大會の各員に向て、彼等が各自國の政府を督勵し、速に日露戰爭の終局を告げむか爲めに、全力を盡すべき決議の通過せられむことを求む

社會主義者ならぬ人々とも、戰爭が一日も早く終局を告げむことを望むのである。又戰爭なるものが、如何

に多くの弊害を生ずるかも、社會主義徒の言を俟たずして、誰れしも知つて居る。何も社會主義徒の觀察ばかりが、眞理に近いと言ふとは出來ぬ。

惡いもの、平和を害するもの、秩序を紊すものは、百方盡力して、之れを除かねばならぬのは、社會主義者の考を俟たずして明白であるが、其の惡を除くといふ方法に就いて、社會主義徒は、偏狹の意見を抱いて居る。否、吾人をして言はしめたならば、社會主義徒は、非戰論を主張するだけ其れだけ多く。自家の主義に遠かるものである。平和と勞働の神聖とは、其の大目的てある以上は、是れを害す一勢力を防遏する一手段を、是認しなければなるまい。

論者は今日の戰爭を指して、資本家的政府の行動てあると言うて居るが、其れは單に社會主義の井底から見た批評てある。戰爭が東洋の平和を鞏固ならしむるを目的とする許りでなく、これが物好きの起されたのてもなく、有ゆる平和手段を盡しても、到底平和を確立せしむるとが出來ぬから、已むを得ず非常手段となつたのてある。戰爭のために眞に困憊する者は勞働社會であり、且つ平和が蹂躙されるは、明かであるが、其れは要するに一時的て、軈て大なる平和と幸福とを獲る手段てあるとは、三才の童兒と雖も、了解し得る所である。

社會主義の人々に一言しやう。假りに露西亞の自由行動を許して、滿州の曠野は、其の勢力の下に立つと見做したならば、所謂平和と勞働社會との上に、如何なる結果が生ずるてあらうか。露が、善良なる君子國てあるならば、何等の惡結果も生じないてあらうが、彼のキルギスの曠原に、平和の農業に從事して居る農民を苦め、黑龍江畔に、瞞着手段を用ひた露人の掌中から、平和幸福とが蒔き散らされるてあらうか。恐らくは兎角を求むるに異らぬてあらう

元來日本は人口の割合に土地が狹い。狹いに從つて個人間に競爭が始まる。即ち平和の擾亂、勞働社會の窮狀が生ずるので、これ獨り日本のみでなく、土地の割合に人口の多い國々には、自然に生起する現象てある。されば平和と幸福とを全うせむには、他の土地に出掛ける必要のあるは、社會主義者と雖も、決して反對を唱へぬ所てあらう。現今の日本は、かく他地方に手足を伸張せざるを得ざる場合に臨んで居る、而して其の天地は、滿州であるとは、言はずして明白てある、これ惡意の行動てはなく、善意の行動である。

斯く論ずるならば、社會主義徒は、例の世界主義――實は個人主義――を擔ぎ出して、日本人が滿州に手足を伸すには、必ずしも政府の關係を要せぬ、また滿州に於ける日本政府の勢力を樹立する必要はない、主權者は誰であらうと、其れは問ふ必要がなく、個々人は、平和と幸福とを獲れば充分であると論ずるであらう。

眼中に國家なく、たゞ人類の平和といふ美しい夢を眺めつゝある社會主義徒に向つて、人種的とか、國家的とか言ふ標準を用ふるは、糠に釘であらうから是れは暫く別問題として他の方面から論じて見やう。

凡そ一の理想ある場合には、之れを現實にしたいと言ふ欲望がある、否、むしろ實現すべき責任があると言はねばならぬ。社會主義者に於いても亦仝樣でなからねばならぬ。偖て勞働社會の平和は、必ず是れを實現せねばならぬとすれば、其の幾分なりとも、現實たらしむるが、社會主義の希望であらう。たとひ一村落の中なりとも、一町內の中なりとも、其の理想を實現し得たならば、これ社會主義徒の勝利であらう。

此の理想の實現、詳言すれば成るべく多くを實現するが、社會主義徒の義務であると言ふ點は、彼れ等自身も承認する所であらう、偖て然らば、滿州の曠野に於いて、日露何れの政府が勢力を占めたならば、多分の理想を實現することが出來るであらうかとこは社會主義者の當然掲ぐべき問題ではあるまいか。此の問題の解釋は、多言を用ふる迄もなく、日本政府の勢力を占める方が、利益であることは明白であるされば。今日大軍を派遣して、彼れの軍と戰ふは、社會主義者と雖も、是認しなければならぬであらふ

元來社會主義徒の論には、幾多の矛盾があるのである。政府を嫌ふ位ならば、政府のない國土にても行くが宜しからうに、去程の勇氣もなく、たゞ個人利欲主義を基礎として、世界的平和を欲しつゝある、現狀態は如何樣であるか。其の目的實行の爲には、如何なる手段を用ふべきか等の點に關して、冷靜なる思慮も廻らさず、たゞ感情一遍の狹論を唱ふるが如きは、社會主義其の物のために、吾人の取らざる所である。露國や、獨逸あたりの社會論者が、絕叫する所を見て、直に之れを我が國に應用するは、大なる誤謬である。我が國は我が國、何も西洋人の眞似をする必要がない。吾人は日本の社會主義者が、健全なる論理を組織して社會幸福の福音を傳へむことを希望すると共に、今日の感情論を中止せむことを薦めたいのである

社會非耶個人非耶

◎社會を怨む聲は、年毎に高く、罪を社會に歸する者、月毎に多し。社會果して非なるか。個人果して非なるか。

◎罪を社會に歸するは、最も便利なる論法なり。自身の缺點を隱蔽するには、社會を罵るを以て、最上の策となす。

◎人は根本より惡しき者に非ず。それ等の人々が組織せる社會とても、善の分子を含まざるものに非ず。

◎社會我れを容れずと慷慨する前に、我れは社會に容れらるべきだけの能力ありや否やを討究せよ。

◎須臾らく我れを客觀視して、我れ自ら社會となり而して我れは、客觀化せられたる我れを歡迎し得るや否やを檢せよ。

◎社會か怨めしいとは、多く一身の不幸より發生せる歎聲なり。而して其の不幸は社會の不完全より生ずる場合よりも、個人の不完全なるより生起する場合多しとす。

◎己れを知れとは、古聖の訓言なり。己れを知つて後、徐に社會の是非を判定せよ。

◎自身の價値を公平に判定し來れば、社會が冷遇するも無理ならじと思はる場合、決して尠しとせず

◎或る者は自己を、優等なりと信ずると、餘りに強きために、社會を怨み、或る者は自ら社會の契約を破つて、而して罪を社會に歸せむとす。

◎物質の欲さへ棄つれば、社會などは、是非の問題となるものに非ず、その討究の必要あるは、他の物質欲多き人々の爲なり。

◎食つて、着て、寒暑、饑渇をさへ凌ぎ得れば、それにて充分なり。牛肉も食ひたし、絹布も着たし、樂にして眠たいと思へばこそ遂に我れに金錢を與へざる社會が恨めしくなるなり。

綠陰漫言

◎露のストシグスチー驅逐艦々長の夫人、はろ〴〵我が海軍大臣に書を送つて、夫の安否を問ふ。其言や淚を以て滿つ。誰れか又此の憐むべき夫人に同情を寄せざる。

◎さるにても怪らぬは駐露佛國公使なり。夫人の書に曰はく、曾つて佛國公使に、夫の安否を日本海軍省に問はむとを哀情せしに、無情なる公使は、日本は斯る質問を拒絕すべしとの口實を設けて、夫人の懇願を斥けたりとか。あきれた男もあるものかな。

◎我が海軍大臣の秘書官より送れる返書は、彼の夫人に深大の苦痛を與ふべし、而して佛國公使は赤い顏すべし。さはれ彼の女を、徒に煩悶せしめたる露國政府は、禽獸の群居に異らざるなり。斯くの如き政府を

賊ける軍人こそ浮ぶ瀨はなけれ。

◎露國の文部大臣は、開戰の理由書なるものを諸學校に配布し、我が文部大臣は、尊き御沙汰書を奉して聖旨に悃ふべしとの訓令を出せり。これ兩軍の對峙よりも、遙かに面白き對比ならずや。

◎假りに局外者となりて、此の二事實を眺めむか。露政府が、開戰の理由を造るために、如何に苦心しつゝあるかを知るべく、一歩進むれば、國民を瞞着するために、當然らしき理由を作らむとするものなり。

◎日本には箇樣の必要なし。開戰が正義人道の爲めになるは、邊陬の翁と雖も知る所なればわざ〳〵理由書を配布するの必要はなく、只教育を忘るべからずと訓令すれば足れりとす。兩國文明の差、言はずして明白なり。

◎日本人は、何故に戰ふかを知る。露人は是れを知らず。故に文相の理由書配布あり。露軍の敗衂は當然の結果なりとす。

◎露軍の暴行は、いよ〳〵暴露せられたり。頑迷なる露人は、斯かる惡行も、さしたる惡事とは思惟せざるべし。

◎或學者は黃禍は、決して存在するものに非らずとて、其の理由は日本人元來黃色種に非ず、白皙人なりと。まだ歐羅巴が難有きものと見ゆ

◎露國の捕虜は、日給若干にと、日本軍に雇はれたしと云ひ、日本の捕虜は、露の麵飽を喰はずとて餓死せり。此の一事を以つて、兩軍の優劣を知るべきなり。

◎浦港艦隊、津輕海峽通過したればとて、敢て驚くに足らず。これ寧ろ自滅を迅かならしむるものなればなり。

◎旅旅口陷落せずとて憂ふる勿れ。遼陽陷落せば、旅順口に白旗を見るべければなり。

◎露の黑海義勇艦隊、ダーダネル海峽を通過せり。通過させたる士耳

古も意氣地なし、默して抗議を呈せざる列國も無能なり。

◎凱旋紀念の大美術館を設置せんとの議ありとか。我が美術家よ今日より世界の美術界に凱歌を擧ぐるの覺悟を持せよ。

◎海門艦長高橋守道氏の最後、いかに美しきかよ。廣瀨中佐を謠ひたる社會は、何が故高橋艦長を賞揚せざる。

◎曾つて英艦隊の、地中海にて演習を試むるや、一艦誤つて一艦に衝突せり。方向を誤りし艦長は、全員を他船に移して後、軍帽を打ち振り、フエヤ丶エルの語を殘しつゝ、不幸なる軍艦と運命を共にせり。

◎歐洲の諸新聞は、英艦長を激賞せり。我が勇剛なる高橋艦長の最後は、これにも增して忠勇なるものならずや。

◎元來戰爭と共に、國民の判斷力が、感情の爲に支配せらるゝこと多きは、已むを得ずと雖も。苟しくも社會教育の任務を帶べる新聞紙の如きは、沈着なる態度を守つて、社會の情に偏するを防がざるべからず。





賣藥屋

（附、戰時の賣藥）

沈鐘堂

滑稽なる日本賣藥――種々の肺病藥――無害無効の理由――風俗壞亂的賣藥――女は欺き易い――十八錢が二十圓――瓶を賣る目藥――口錠は食味減殺す――賣藥部外品――廣島事件――清韓販路杜絕――獨逸の賣藥

地黃丸に滿足し、葛根湯を天下無二の發汗解熱藥と信じた草根木皮の德川時代はさるとながら、電話電信は言はずもあれ、近くは無線電信空中飛行器の何物なるかを解し得る日本今日の文明にも似ず、其國民の多くか病患を托する所の賣藥に至つては實に驚くべき野蠻を繼續しつゝあるのである、其需用者なる一般國民が概して科學思想に缺乏せるは何人も異論なく、文明を口にするは唯外部に煙突聳え汽車走るあるのみにて、同胞個々の腦裏には存外舊習が蔓つて居る、其處を奇貨として躰よく同胞を欺き、己れは紳士然として何々名譽職等に迄も列りつゝあるは今日の賣藥屋である、少しく科學的頭腦を養つた者が一歩側面に去て此パノラマを觀察する時は、實に噴飯に堪えぬ狀態である、全く日本今日の賣藥は滑稽である、其滑稽を眞面目に享け病患を之に托して信ずる國民は餘りに歎かはしく亦心細さのきはみである、同時に惡むべきは賣藥屋其者である、今茲に賣藥屋がいかなる手段を以て無智蒙昧な同胞を欺きつゝあるかを聞かば定めて一驚を喫し寒心するであらう、いでや照魔鏡の蓋を拂つて映さう。

種々の肺病藥

名は言はぬが、醫科大學の專科を出た藥學得業士某はキニトールと名を打つて一の肺病藥を賣出した、原料は何かと分拆すると、キニーネと薄荷の外何物も混れて無い、人を馬鹿にするのも方圖のあつたもので、風邪か發熱の爲とならば兎も角名有の重病肺結核がコンナもので治るとなら西から朝日が昇る、噓にも藥學得

業士とか云ふ肩書の有る者がマザ〳〵追剝に均しき所業を爲るとは何たる文化普き聖代であらう、其男は其肩書で甘く世人を釣込み今では數万以上の財産家となつた、思へ其財産は貧に泣く肺病患者の血咯の凝結したものであることを。

次は、農事雜報が騷ぎ出して以來讀賣新聞が尾鰭を付けた彼の田ウコギ草、之れが爲には近來販賣者迄も現れて來た景況であるが、頃日目黑の惠比壽ビール會社に上野藥學士を尋ねて聞くと、該草は君が過般其成分の研究をしたとはあれど、肺結核に效の有るとは認むることが出來ぬと語られた、この草はビデンス、トリハーチヤーと唱ふるもので予は丹羽藥學博士から親しく其詳細を聞いたこともあるが、決して肺治の効力は發見することなく終つた、然るに奸商輩は此期逸すべからずて、中には最も越幾斯劑に製出し賣藥にして高價に販賣仕様と計畫中との事も耳にした、成程無害無効には相違ないが到底治肺藥の資格はない、

其他種々の賣藥を數へ來らば卷を代ゆるも盡きぬ次第である、既に前に掲げた藥學得業士某の手段を以て他を類推することが出來る。

元來賣藥屋の口癖に、新賣藥を發行するならば肺病胃病の二藥が一番儲かると云つて居る、之れを以て全國に肺胃の患者がいかに多く、亦如何に欺き易いかは判る、專門大醫と雖第三期を經過した肺結核は到底治術の見込なしと斷定されて居る譯なれば賣藥の肺病藥如きは全然無効力のものと承知すべきだ、この賣藥が無効には理由があるのである。

賣藥が無害無効の理由

玆に獨逸の例を引き度がそれは別項として、日本の賣藥が何故無害無効であるかといふに、內務省は賣藥を無害無効のものに限り免許するといふ規定が設けられてある、有害の性質を帶びたものを許可せぬは當然であるが、何故有効無害のものを許可せぬかと言はんに、賣藥を有効ならしめるには是非とも劇藥毒藥の配量を充分に許さなくてはならぬ、若しも賣藥如きに劇毒藥の配量を自在ならしめたならばドンな間違が起らぬとも限らぬ、玆に於て賣藥は無害無効と認めたものを許可する、即ち毒にも藥にもならぬ素湯の如く茶の如き程度に均しいものを許可するのだ、故に賣藥は兒童の甜める飴と大差はない、これが許可になると賣藥屋の芝居が序幕となる、先づ第一着に有名な博士學士とい

ふ樣な所へ尠なからぬ贈物を順々橋渡しを拵へて甘々受納させ、何々院何博士何位勳何等何の某大醫證明と丸で法性寺入道も三舍を避ける樣な肩書が一二行から多きは十行位迄ズラッと並ぶ、杢兵衛田吾作君等は其肩書を見て南無天道大日如來と無性に難有がつて仕舞ふ、時によると頑固な醫者があつて其送賄を押返し、コンなつまらぬ藥に證明は出來ぬと斷られるともあるが、考へて見れば無害にして云々といふ程の事だから大抵の醫者は山吹色に兇じて證明を與へる。次に各新聞雜誌に誇大な廣告を爲る、讀むと耆婆扁雀も跣足で逃る樣な效能書がある、中には何々姫御遺法とか一子相傳とか何神何佛御夢想とか天竺傳來乃至は世界無二などと劃註する、税が出ぬから勝手な熱が吹ける道理だ、少しハイカラがゝつたのになると出鱈目に獨逸大醫アンペラ何とか米國博士ブリキとかトタンとか好きな事を言つて居る、丸で緣日の銀流し又は高野は麓に於て產ずるところの難有き弘法樣の石芋で御座いと疇るのと五十歩百步である、次に町の角々へペンキ塗の看板を掲げ市中を樂隊で廣告する、ト不思議にも世間には馬鹿が多く、成程と感心して買ふ、賣藥屋先生忽ち身代何萬と來る。蔭で賣藥屋は笑つて居る、先づ難有い終々世間の馬鹿を旨く釣り當てたと。

中には怎んなのもある、○○堂の腦病藥と稱する○丸の如きは店員を腦病と僞らせて○○ドクトルの處へ遣りウマ〳〵投藥させ、その處方の儘を丸藥にして印紙を貼り賣出した、ところが中の效能書に何某の調劑といふ文句が無いと鳥が懸らぬから、この新藥は○○ドクトル先生の方劑にしてとやつて口を拭いて居ると、何時の間にかドクトル殿臭付けて怒るまいとか耕の樣な顏をして堂主を呼付けた、賣藥屋先生青くなつて百方其罪を謝した末何う說き落したか遂に○○位○軍醫○○ドクトル先生方劑と肩書を書かせて仕舞つた、其口說き方の旨いにも驚くが、其手腕に至ると盜賊の上前も取兼ぬ程の技量である、此の詰ひらきの一幕は濟んだが亦一場の滑稽が初まつた、先づ內務省へ許可の手續に及ぶと、賣藥規定以上の有效分子が含まれて居る、劇毒藥の配量に反いて居るから最ッと無害無効のものにせよとお目玉を頂戴し、ソップの出し窟見た樣なものにして發賣となつた、其效能書に吹き立てる法螺が頗る面白い、空前絕後の最新腦病藥であると、成程空前絕後の最新腦病無効藥に相違ない。

發汗劑、風邪の發汗藥としてはアンチピリンとアンチ

ヘブリンの二種に限つて居る位だ、ピリンは新藥で隨分立派な原料である、ヘブリンは腦を害する虞があるのでピリン發見後は需用が餘程減じた、この二藥も亦劇藥であるから是亦賣藥になつて居るものには効力ある程配量するとは出來ぬ、故に賣藥屋は據なく極少量のピリンへ澱粉（葛粉の類）を入れて量を多く見せる處は、所謂枯木も山の賑と云ふ格である、世人は量が澤山であるから、是れだけ呑まで必ず利くであらうと、ウマ／＼賣藥屋の鈎にかゝる、で謂はゞ漸く一日分で文久一文位の葛粉へ印紙を貼つたのを五錢十錢と出して買つて喜んで居る、實に抱腹でないか。

風俗壞亂的賣藥

賣藥の中には隨分淫猥なものがあつて、其甚しきに至ると、父兄の前で新聞廣告を音讀され赤面する樣なのが尠くない、快味減少に効ありとか呑むと何時間より効驗ありとか、更に極端なるものに至つては玆に列するに苦しむ程のものがある、で一歩進めて是等賣藥の原料如何にと窺ふ時は最早療病藥の範圍を脱して、怪しからぬ場合に用ゆる奇怪なるものを發賣して平氣で居る所は一種の破廉知漢とも言ひ得るのである。

玆に何々の際用ひよ云々といふ藥がある、之れは非常に恐るべきもので、只でさへ多淫のものは顔色常に蒼白となり、其結果心臟病又は肺結核に罹り亦腎臓炎の不治症を發し十中の八九は致命するのである、婦人は殊に生殖器を害して色情狂となり亦ヒステリー等の惡症に罹るとは免かれぬ、實に目も當てられぬ悲慘を實現するとは暫々見るところであつて、既に如斯狀態であるに之れに上記の云々藥等を用ひたならば更に甚だしい短命者を出すは明かである、よしさらば縦令其病に陷らぬ迄も必ずや情慾を刺激し神經を昂騰せしむるから、觸感に魔痺を來し、腦は鈍くなり、記臆力は減少して到底も健全な身躰にはなれぬ。これ等の奇怪極まる賣藥は療病藥としては無害無効であるから賣藥免許の本旨には實に能く協つて居れど、唯恐るゝのは肉躰の媒介を借りて初めて人間に害毒を與へるものであつて、藥力が直接に人躰に害を及ぼさぬの理から取締も如何とも策が無いものと見える。

亦、〇强丸など稱する賣藥はドンな原料かと調ぶれば、蝮蛇の黑燒に鷄卵の蛋白質を配合したもので、用法には之れを酒にて用ひよとある、天下に是程の愚藥はあるまい、敢て藥を用ひずとも飲酒すれば精神が興奮す

るのは當然の理て、况や加ふるに前記藥を服用すれば無論である、是等は藥でも何でもなく其馬鹿氣さ加減たら無い。

女は欺き易い

賣藥屋では亦婦人に關した藥を澤山拵へる、毛はへ藥、子の出來る藥、乳のでる藥、子宮病藥、其他數へたら幾らもある、婦人は男より知識に乏しいとは無論、其處を付込て賣藥屋が巨利を占め樣として居るは新聞廣告を見ても明かに判る、十年の血の道がカミツレ、甘草、肉桂、茄子のへタ位で治癒れば世界に婦人科醫の必用は無い譯だ、又毛はへ藥の如きは到底無理な注文であつて、外部をアルコール劑などで刺激した位で毛髪が發生るものでない、然るに女は唯外見の醜いか悲しさに欺かれるとも知らず無益の金を捨てゝ居る、毛髪は藥力で發生させるとは出來ぬものである、賣藥屋の言草がいかにも憎い、曰く肺病は治らぬもの毛は生へぬに極つて居るから此二藥は一番都合が宜い、今に治るか今に生へるかとそれを樂に永續して藥を買ふ人間がある、この位利益のあるものは無い、世を欺くなら女に限る、女を瞞して顧客にするに限る、女は智慮が淺いから對手に仕よいと、婦人諸君奈何、亦人參を服んだ位で生殖機關の難病が治り子が孕めるか否かは何人にも知れさうなものである、消炭に均しい黒燒へ草の根を入れた位で乳が出るものなら、乳母を捜して苦心する者は無い、賣藥屋が兎角人の弱點をつけ覗つて居るから眉に唾を塗らぬと化される。

十八錢が二十圓

ビットルとは日本語で苦味と云ふのだ、それにアルコールを配したものが即ち苦味丁幾である、賣藥屋に云はせると、近頃胃病が流行するから胃病液躰藥を發賣した、これが一番儲かる、一磅十八九錢の苦味丁幾を小瓶に詰め賣藥にすれば二十圓程になる、諸賣藥の中てこれ位割の好いものはないと、この事情を知らぬは普通世人の常であるから、二三厘の苦味丁幾に印紙が十錢定價には一錢二十錢には二錢貼用し、即ち一割の印紙を貼用して賣藥となつて居るのを、患者が胃病全快藥かなどの積りて難有がつて用ひつゝある。

賣藥屋は流石に抜らぬ、素人がこの胃病藥は苦味丁幾斗りだナと氣の付かぬ樣に下らぬものを一二種加へて、何か餘程効く藥の樣に思はせて居る、だから世上賣

藥として盛んに賣弘める處のビットル、何々ビットル、胃病何々藥と稱するのは、皆この一磅十八九錢の苦味丁幾であるのだ、コンナ賣藥を二三日分も買ふ金で苦味丁幾を一磅も買ひ次にカルヽス泉鹽一磅(十二三錢)と重曹の五錢も貯へ置かば賣藥の二十圓分位は有る。

瓶を賣る目藥

名前は種々仰山なれど、賣藥屋で製劑する點眼藥の原料も皆同じものである、尤も最新發見藥として有名な高峰博士のアドリナリンはあれど、利にのみ走る賣藥屋が夢にも用ひはせぬ、神何水とか何々水とか其名を聞き効能書を見れば盲目も開き相てあるが、實は手桶の水に毛の生へた位の効能が漸くあるのだ、て賣藥一般の點眼藥の原料は何であるかといふに、水の中へ極々少量の黄礬を入れたものに過ぎぬ、黄礬は劇藥である、故に是亦充分の配量を許されない、成程黄礬は點眼藥として決して惡くはないが、賣藥には効のある程の量を許されて居ぬから、謂はゞ只の水を點すのと大差が無い、彼の無効無害たれとの本旨には實に能適つて居るのだ、甲の賣藥屋が僕は今度眼藥を一種新に發賣せうと思つて居るがと談せば、乙の賣藥屋が又瓶を賣るのかと笑ふ、然り全く一錢に三ッ位の罎へ鐵管の水を入れ、印紙貼用の金箔がついて、神の賜物であるかの樣な名を附して市中に現はれるのである。

口錠は食味減殺す

紅さした唇から風がもて來る香錠の薫りはいかにも艶て小説家であるか、眞面目になつて言ふと、この口中口錠類、即ちゼム、淸心丹、センセー、サンテー、カオール、メサマシ等は皆肉桂が加味されて居る、賣藥家が香錠を製造する第一の目的は味をよくし香をよくして他を凌がふと勉めて居るのみで、口錠を味ふ際に起る弊害などには頓着せぬ、香錠の原料と云ふものは何れも五十歩百歩である、先づ甘草、肉桂、薄荷、其他は各自の算盤玉をハヂいて少しづゝ相違があるとして、之れに香を持たすべく麝香の少量を加へて、密又は米糊で丸藥にするのだ、其上に金銀箔をつけるとズッと位が上つて何となく効があるかに見える、ところが其實何にも効なぞあるものではなく、只嚙み碎くと薫りがして鼻が喜ぶのみである、尤も舌に甘味が殘つて、「能い味だ」など云へど、其際尤も恐るべき事が現はれて來る、この香錠に用ひてある肉桂は味感を減殺し

て食味の美醜判別力を失はせる、て必ず食前に忘れても香錠類を口にしてはならぬ、賣藥屋等は言語に絶した聾て命とする三食の趣味を減殺しても目前一寸味の能いのに釣込て買はせやうとする、亦片假名で何々とゴヂック風に藥名を書き包裝をハイカラ式に仕立てゝ、一見西歐輸入の藥品かなぞの樣に見せかけるものもあれど其原料に至つては所謂藪井竹庵時代から紋切形の調劑で、考へると馬鹿々々しさに噴き出し度なる位である。

賣藥部外品

近來賣藥部外品として局方劑等を賣るとが盛んになつて來た、これは印紙税の心配が脫ける爲、夫れだけ安く賣れるので比較的賣行がよくなつた、これには劇毒藥に關したものはなく殆んど日本藥局方の普通藥乃至は本局（本局とは歐洲各國の藥局法の略名）の普通藥を瓶詰、貝詰、カプセル詰、其他種々に躰裁を粧ふて賣弘めつゝある、其代り効能書と代價附をするとは出來ぬ、賣藥は印紙を貼用するだけで能書代價等勝手な熱を吹いて居るが、部外品は只其特權がないのみて實質の藥品に至ると少しも差のないものが多い。

この部外品には賣藥程馬鹿氣たものが割合に尠い、水銀軟膏、沃度膏、沃度ホルム、などいふ鹽梅で、夢想の傳授でも何でもない化學上立派な藥品がある。

戰時の賣藥

廣島事件

賣藥屋が其野獸に均しい本性を現はして大失敗を來した珍談がある、一二ヶ月前より廣島に軍人の居たのを好期逸すべからずて、早速種々の賣藥を賣付けに往つた處、遂に競爭が起つて我先に多額を賣らうと苦心の結果、土地の醜業婦を看護婦然と裝はせ各軍用旅舍に入込ませた、醜業婦の目的は賣藥の依托販賣と共に己が本領の淫を鬻いた爲め、終に軍隊よりは嚴重の制規が出て、凡ての賣藥を買はせぬととなつた、これ等は前諸項に語り來つた賣藥屋の行動と尤もよく一致して居るでないか、之れを賣藥屋は廣島事件といつて非常に殘念がつて居るものが多い。

戰地携帶賣藥

兵士が戰地に出立の用意として求むる賣藥は、淸涼劑、切疵藥、止下劑、胃病藥等が多くを占めて居る、就中

清涼劑は尤も賣行のであるが、寶丹等は先づ無難のものなれど其他の清涼劑に至つては味感減殺ぐらいが落て左迄効は無い、寶丹に就ても滑稽がある、丹羽藥學博士が獨逸に着してからポッケットを探ると寶丹が出た、何時入れて來たのか覺は無かつたが、蓋を開けて舐めると同席して居た獨逸人が何だと聞くから、之れは日本の賣藥であると、云ふと手に執つてウフ、ンと笑ひ出した相てあるから、他は推して知るべしだ。

清韓販路杜絶

我國の賣藥を清韓方面に擴張仕やうとの計畫は隨分久しいものてあつたが、この戰時を當込み一は同胞の顧客を得、一は支那朝鮮に其販路を開く目的にて渡航せし賣藥屋も尠くはなかつたが、又しても自國を欺く筆法を以て支那を對手とし失敗した事といふのは、清國婦人の室外に出てすして身體に來す運動不足の爲め貧血性多きを突止め、鐵劑を以て强壯藥を製出し販賣せし所、鐵劑を服した脫糞は黑色を呈するのが常てある、之れを見た支那人は非常に驚き黑死病にはあらずやと騷ぎし結果大失敗に終つたことがある、これは賣藥屋が人情風土に通せず其常識だも無きをよく證して居る、朝鮮に於ての珍事は錠劑の僞物を製造し、紅柄を以て溫飩粉を染め薄荷を加味して清涼劑の如く粧ひ賣りたるところ、折柄の暑期に一兩日を出てす腐敗を來し遂に日本賣藥屋は盜賊視され逃歸つたのは頃日てある、これにて清韓地方に向つての輸出は杜絶して仕舞つたのである。

獨逸の賣藥

丹羽藥學博士歸朝後予に語られたる話中には、彼の有名なるシルレルの劇の批評、ワグネルの劇上場談、其他獨逸文學談等あれど、それ等は後日本誌に掲ぐるとして今は唯賣藥に就てのみ聊か記し、述べ來りし我國賣藥と如何なる軒輊あるかを對照して見やう

獨逸にはドロギス(藥種屋)アポテーケ(藥局)の二種がある、ドロギスは我國の田舍のよろづや然たるもので賣藥を筆頭に帽子等に至る迄販賣して居る、このドロギスでは我國の如く藥局方劑を賣ることを許さぬ、又アポテーケは醫士の處方、藥局方藥、乃至は賣藥も僅か賣つて居る、が賣藥など買ひに來ると懇々說き聞かせて然るべき藥局方劑を投じて遣る、其鹽梅は實に親切なものて、我國の如き我利々々盡とは同日の談てない、然

らば獨逸の賣藥は日本の如く下らぬものであるかと言ふに、決して仲々、獨逸は既に賣藥に向つて劇毒藥の配量を充分に許してある、如斯立派な賣藥を持つ獨逸は不思議にも賣藥に信用を拂つて居ぬ、若しも日本の賣藥を見せたならば、其馬鹿氣た狀態に絶倒するであらう、醫藥學の進歩した獨逸などは一般世人が斯う云ふ工合に多少とも科學知識を備へて居るから、賣藥屋輩位に馬鹿にはされぬが、我が國を顧ると其無邪氣さに泣きたい位である。



雜評



隨感錄

醉美生

▲人を意見せんとする時、ひたすらに其行爲の惡をのみ指摘し、其過をのみ詰責するは、却て其人の反抗心を高め、意見する目的を達すること甚だ難し。寧ろ其人の位置に立ち、其人の性情を察し、其行爲の實に止むを得ざるに出てたるべきも、而かも終に之を改めざるべからざる所以を諭すべし、人は理に動かずして情に服し、言論に從はずして同情に靡くものぞ。

▲羽左衛門の厭味あるは、其藝の餘りあるを示さんとして悠長に過ぐる所に存し、高麗藏の批難あるは、其藝の足らざるを憂ひて窮屈に陷る所にあり。

▲團菊世を去つて、梨園の寂寞冬枯の野邊にもまさる今日此頃、些か人意を强うするに足るもの、實にわが八百藏なりとす、其熱心にして謹愼に、絶えて高慢輕浮の

▲新柳樽　（久良岐撰）

京女左官屋殊に上手なり　不機嫌
雨の彈空雷火など爆發し　同
合歡の窓夕の祈禱餘念なし　同
歸省して大家を氣取る新學士　寒貧坊
大枚の受驗料度々フイになり　同
美術家は見て來た事を書て話し　同
これならと後家門口に犬をかひ　土佐坊
ペランメー杯と拳固て西瓜割り　芋生
先生は美しいのにかみふくめ　同
金槌の川流れぢや危ぶないよ　同
朝寐坊晝貌よりは早く起き　櫻坊
切符色の帶を客車はメてゐる　同
半裸體其次裸體其次は　宮坊
競賣を買つてソコ〳〵逃出し　同
朝貌が咲いてよ兄さんは寢坊ネー　同
玉乘を幕の外から囃し立て　一波坊
髷付おデコがグッと器量上げ　同
氣狂が二人碁盤に睨み合ひ　同
憎らしいよッと蚊遣を煽り付け　同
後から投げた手裡劍喉へ立ち　同

脱いだ羽織前座頻に氣にしてゐ　同
同病の相憐れむは避暑の宿　同
先生が女の人と歩るいてゝよ　雲突坊
妻は縫ひ主人は書見下女は漕ぎ　同
小刀を借りて答案ソットのぞき　病猩々
掛取が來る度び旦那避暑に行き　同
緣日へ式部密月の前稽古　日の丸
油畵師モデルに抔と妾を置さ　同
手土産で親類先へ伊勢屋避暑　同
避暑だとて腰帶一ツは餘ンまりな　佐久良
新盆の佛は長く御逗留　秀耳
ヒーフーと細君客を目に數へ　同
蚊帳の裾大きな蚤が首をつり　同
唐茄子は大きな尻を賞美され　同
肅然と壇家は鼻を啜り上げ　同
源氏節の蓄音機はどつとせず　同
寢坊の隊長未だ入谷は知らぬ也　酒突
歸省して幼馴染の山へ行き　岐陽女
不首尾故受驗いつてもコッソリし　同
今度こそ分目の受驗毎度聞き　同
大男半人受驗いやだ事　同

美術家の妻でないかと叱られる　同
美術家はモデル拾ひにのつそ〳〵　同
美術家の書室戰場見たよなり　同
六疊て五人て避暑は暑い事　金比古
避暑旅行麥の飯にはちと弱り　同
花引にとも云ひかねて避暑に行く　同
人間を輕んじて僧は法を説き　同
禮盤てお布施の高を和尚よみ　同
出水の門並障子洗つてる　同
藪入の麥稈帽子マゴ〳〵し　水日亭
ハンドルを片手朝貌ブラ下げる　同
肩書の名刺を出して反身なり　同
避暑旅行角帶どうも納まらず　同
其實は嗅の里へ避暑に行き　同
燒芋の竈へかぶす波の幕　同
褌を屑屋リウ〳〵しごいてゐ　同
大急ぎ岡持丈は靜かなり　同
受驗生車上書見は駄目な事　顚台師
關ケ關只此一戰と受驗する　同
母背て戀愛神聖論者なり　幻怪場
華嚴の瀧のぞけば巡査コリヤといひ　同
哲學者流石に戀は反悶し　同
棚經や念珠サラ〳〵揉んで行き　同
宣教師ある夜秘かに戻つて來　啞竿捧

慈善から說いて牧師は絞上げ　同
雨宿これ幸と牧師說き　同
讃美歌の唄ひ樣までほめそやし　同
救世軍藥師の前へ陣を張り　同
耳へ來て蚊は殊更に聲を揚げ　久良岐
山の手の盆は精靈丈の事　同
下宿屋へ米築城を文士据ゑ　同
腰衣然と式部は袴穿き　同
ヱヘン將然已然連體連用終止言　同
文法家ひひるひれてドット落ち　同
左の數題を說明せよと知らぬなり　同
苦しめた崇點數調べなり　同
棧敷て白旗をふるはつらい事　同
新夫婦棧橋へ來て叱られる　同
チヤブ〳〵と云ッてお江戸て笑はれる　同
ボンさんお前いまだねと油かけ　同
料理屋に豚の丸煮がぶら下り　同
精靈に西洋桃など先づ供へ　同
地雷火のモトは屁のよな事實也　同
素人の琴唄兎角ふやけてゐ　同
素人の手琴はいつもけつまづき　同
士用の入大のお灸をすゑたやう　同

態なく、一興行毎に其藝の上達するが如く見ゆる、ひとり優のためのみならず、又實に我劇界の慶事なりとす、先月演ぜる小野道風の如き殆んど缺點なしといふも不可なし、優たるもの益自重せよ。

▲嫉妬深き人にして、美しき夫又は妻を持たば、一生氣の休まる時なかるべし。されど戀の樂しみは、半ば以上其氣の休まらぬ所にあるものぞ。

▲人は苦勞に厭くのみならず、又實に安逸にも厭く。安逸も長きに過ぐれば退屈に堪へず、却て苦勞を求めて人生の單調を破らんとす。ショーペンハウエル氏曰く「人の一生は心配と退屈との間を往來す」と、至言なるかな。

▲「此世は夢ぞ、苦も樂もなし」といふ人あり、されど人は一夜の夢にだに猶樂しからんことを願ふにあらずや、況して五十年の長夢、我は最も其夢の樂しからんことを欲す。

▲高山に登れば、獨り飄々として俗寰を超絕したるが如く、大海に臨めば忽ち洋々として清濁を併呑したるが如し、前者の心は屈原の如く、後者の思は莊周の如し。

▲成効せるものは成効よりして人生を悟り、失敗せる者は失敗よりして世態を觀ぜよ。味は必しも砂糖にのみあらず山葵にも唐辛子にもなか〱妙味ある者ぞ。

▲眞に夫を愛する女性の特徴は累に於て殆んど遺憾なく描き盡されたり、其悲喜哀樂の移り易き、其愛着と嫉妬の深くして理性の光薄き、如何なる女性も之を見て多少の感慨なきを得ざるべし。

▲豚は腐敗せるものを食して猶且つ旨き肉となす、傑物は失敗の事業を化してよく偉大なる効果を收む。

▲世には書物さへ讀めば賢くなると思ふ人あり、また書物など讀みて何の役に立つものぞといふ人あり、共に愚かなる心かな、書物には書物の智識ありて、實際よりはなか〱に得難きこともあり。實際には又實際の智識ありて書物よりは到底悟り難きことあるものぞ、よく其見界を立てゝ書物を讀み、實際に當らば始めて賢くなるを得べし。

▲人は容易に現在に滿足し得るものにあらず、醜き人は、美しく生れしならば此世の願足るべしと思ひ。弱きものは健かに、貧しきものは富める身とならば如何ばかり樂しからんかと考ふべきも。扨て美しき人、富める人、健かなる人の身となるも又夫れ〱に足らはぬと思ふこと數限りなく出で來て、苦勞の絕えぬことは殆んど同一のものぞ。

▲日露戰爭目出度終結を告げなば其お祝ひとして第一

になすべきは砲兵工廠の移轉問題なるべし、東京市の中にありて肺病患者を製造すること幾何なるを知らず

▲上野公園は詩人の如く、淺草公園は俗物の如く、日比谷公園は官吏の如し。

▲見せたくもあり、見せたくもなきは戀人の寫眞

▲其根本を尋ねれば終に肉慾に歸す、故に戀はきたなしといふものあり、知らずや、薔薇の花は糞土より生じて、而かも其美よく人の目を喜ばすに足るを。

▲昨日よしと思へるもの今日に至りてあしかりき。今日のよしと思ふもの誰か又明日に至て惡しとならざるを保し得べき。されどかく考え來れば徒に迷妄の中に彷徨して何事にも決斷するの勇を失ふべし。宜しく今日のよしと思ふものをよしとしてなし、而して明日に至て此事の或は惡しとなるやも知れずと心に留め置くべし、さらば今日に於て迷妄なく、明日に至りて悔恨なし。

▲冬の刺すが如き寒さなければ温かき火の惠みを悟るによしなく、夏の燒くが如き暑さなければ凉しき風の心地よさを知るに術なかるべし、そこが人生の六つかしくして而かも面白き所ぞ。

▲二十以上にもなりて少しく世の様、人の心など知れる樣にならば親は成るべく其子を放任するがよし、自ら躓きて自ら起き、自ら傷けて自ら癒するにあらずは眞に人らしき人になれぬものぞ。



讀者之文壇

學生と妻帯

高山血來

○世間はめつきり暑くなつて、氷屋の店頭、賑はしく、たそがれの見付々々、橋の上、公園といはず河のほとりといはず、苟も風のあるところ蟻の這ひ出る如くぞろ〳〵と引きも切らぬ人波、凡そあらゆる階級の人は皆この夥しい波の高下、向鉢卷に羽織袴、銀杏がへしや丸髷、靴と下駄と草履と足袋洗足、いふまでもないみな是れ男と女とて、倘區別すれば子供と大人と老人とである、但し人間ばかりと言ひたいが、犬を連れたのもあり、時には猫を抱て出るのもある、なかんづく

吾人の眼に觸れ易いものは、俗稱猫と呼ばるゝ白いのを連れ、或は犬の代りに美しいのを携へ、人中を行くときに限り一間二間のあひだを置き、物を言ふにも小聲でいふ、所謂番ひ〳〵の連中である。

○而して此の番ひ〳〵の連中について、一々之を研究して行くのは最も趣味あるものゝ一にして、時としては意外の新材料を得る事あり、新智識を與へらるゝ事あり、或はまた社會に流れる人知れぬ罪惡を發見することもある、敢て研究したといふ程でもないが、これ等のうちに於て不思議と感じた一種類を擧げるのも、貴孃の友の好讀物と信ずるからである。

○細君かと思ふに、さうでもない、妹であるかと見るに然らず、學生らしくして、それでもない、素より新柳の產物ではない、さらば良家の孃かといふに、こもまた疑問たるを免れない、男も同じく疑問ながら、これは多少鑑定の仕やうもあらう、まづ學生、

○派手な浴衣に紫がゝつた繻子の夏帶、片側は友染の去るまがひもの、これが當世の女ハイカラ流、つかんで投げたやうなる頭に花束を括り付けたるが手に團扇を持ち、左の手で帶の垂れ即ち尻のあるところを、ちよい〳〵と撫でたり抑へたり、ものをも云はず、男を去る一間後より從いて行く、貴郎待つて頂戴な、若しいわ、と常ならば縋りつきたいのを、それもならず、男は麥藁帽子を眞直に、片手を兵子帶に添へて何時にない水臭い素振り、眼鏡越しに人の顏を盜んでは振り顧り〳〵、流石に早く來いともいはず。

これ果して何者であらう、仰山にいふではない、全く其素性は容易く得知れぬのである、而も疑ひもなくスリではないケブリでもない、焦らさずに一口に言つて了へば單に學生である、女は而して其の女房にして去年までは行燈袴の隊長、尤も今でも時々は行燈を穿かぬではない。概して歐かるたに達してラヴの講義に得意な風が見ゆる。

○これは單に一と番ひに就いての觀た事柄であるけれども、僅か一つの橋の上にも同じ種類は珍らしくなく入り替り立替り幾組となく見得るに至つては、誰しも驚かぬはないのである。

○然り、驚くのである、若し氣の弱い昔氣質のお爺さんをしてこれを聞かしめたなら、腰を拔かさねば幸ひであらう、その昔といはず、たつた五六年以前まで、書生は天下の書生也、滔々たる濁流中にあつて僅に其稜々たる氣骨を示して、居るのは自分ばかりと大手を

振り、破れ袴に袖のちぎれた手織もの、裳高々とひつからげたる、髭茫々と黑鐵の顏色、正にこれ枯れ野に立つたる案山子よろしくてあつた。

○女を見れば惡魔と叫び（謝つて置く、女の方からも惡魔と思つたに相違あるまいが）苟も垢抜けた風をするものがあれば直ちに捉へて軟派と卑み、勿論頭を梳づり香水を浴びるなど以つての外、罪かさらずは汚れたものと思つたのであつた。

○かくの如きは尙ほ人の記憶に存ずるところ、即ち男色の盛んに流行したのも一方女色を制した反動であつた、つまり十九世紀末の書生なるものは、かばかり蠻的に堂々たるものであつた。

○而も二十世紀といふ語は彼等に大なる影響を及ぼしたのである、千九百年と千九百一年とは、其間たつた一年の差、否僅かに一日の差、一瞬時の差であるけれども、其際の十九世紀と二十世紀とは實に百年一世紀の差を生じたのである、即ちこの百年一世紀を只一跳りに飛び越えたものは、書生に限らずそれだけの進歩をしたのは事實であらう、

○然り、千九百年の終りの夜の黑幕が、千九百一年の最初の朝日と共に開くや否、彼等案山子は其餘りに我身の汚穢しいのに驚いて、先づちぎれ／＼の袴を脫ぎその亂髮を梳りて香油を光らせ、髭を剃つて湯にも入り、其眼尻をして下らしめ、急に鳥嚇したりし資格を更めて丹二郎と濟まし込み、而してその實に！昨日まで彼等が呼んで惡魔といひし美人の手を攜へたのではあるまいか！、

○學生が公然妻帶するに立至つた歷史順序は略ぼこの通りである、話は一廻轉じて夕涼みのそれに返つた、而して吾人はそれからそれへと同種類の觀察を續けたと讀まれたい、いよ／＼入つていよ／＼面白い彼等の消息の、細かいところは省略にして、大體の筋道でない其狀態を觀て行くとする。驚く可らず

○角帽を脫すれば自ら二十圓の高給取にならうといふ大學生は尙ほ且つ可い、而も中學校にＡＢＣを教はりつゝある諸君にして子供を抱へたる妻なるものあるに至つては、垂涎百尺、とゞめんと欲するも豈得んやである、上は大學より下中學にいたる諸種の學校にして一校少くとも五六の良人といはれ、お父さんと呼はれるものゝないのは恐らくない、今こゝに例證として槍玉に擧げんとするときは、これが材料には苦まないが罪もないのを氣の毒にさうもなるまい、而も己れが知

人をや。

○多くは女は女學生、中には曾て左づま取つた者もあるが、懐の温いのは一軒借りて下女も置く、二階の六疊と四疊半位をかりの宿として朝な／＼共同水道に米を研ぎに行つて、近所合併の注意を惹く、所謂手なべ提げての世帯もあり、別して中は睦まじい、これといふのが若し女が女學生ならば、双方から月々決まつた國許からの送金があり、敢て贅澤をせねば下宿屋よりは安直く上り、金に不自由がない處へ日頃の理想を持つて來る、氣は樂なり親姑はなし、喧嘩の初まらう筈もないのである、夫婦いさかひ元は貪からの古諺に背かぬ。

○いふまでもなく自由結婚が大部分、國へは秘密といふのが半ば、然るに此處にまた更に吾人をして其父兄の寛大なるに羨望せしむるものがある、田舍者ぢやて馬鹿にやならぬ、二十世紀の風は萬里同風である、悴が進歩すれば從つて田吾作も洋服を着る、村會議員の肩書もあるのだ。

○父兄曰く『若いものを一人でお江戸の眞中におッ放して置くのは心配でなんねえてがす、華厳の瀧をやらかすかも知んねえ、女ッ子を付けて置くべい』何ぞ夫れ氣の利きたる、かくて其子息は妻君が飴ん棒を持つてチョイ／＼アワ、をやりつゝある側にて、一生懸命に而も案樂に This is a dog を繰り返すことが出來るのである。

○父兄又曰く『婆さん八釜敷云ひなさんな、若いものぢや女も拵へえては、結句こつちで世話を焼かせぬだけ可いわの、十兩や二十兩送つてやるだあ』臍くりもかくの如くして惜しからず絞られるのである、常識を以つて考へては信じられない事實は吾人の知るところばかりでも數ふることは出來ない。

○吾人はまたこれ等の外一の最も聞くべき話柄を持つて居る、熊本市の一資産家は其子を東京に遊學さしたが人に語つて常に曰ふ、只學問をしやうとも、或は藝者狂ひをしやうとも、遊んで居やうと酒を呑まうが、些つとも頓着はしませぬ、何をするのも勉強です、何んぼ學問が達しても世間に昏くては困ります、と誠に一理ある言ではないか、或人の放蕩野郎か却つて出世するといつたのも此邊の消息を道破したのであらう、話はわき道へ外れたやうだが、これもものゝ序である

○兎に角天下の書生か進化したのと、其父兄等の開けたのとは思ひも及ばぬ程である、萬朝報紹介欄に「第

一高等學校生徒養子に貰はれたし、姓名在社」などゝは最も世間に暗いものにして、千百年の廣告も徒らに勞するに過ぎないのである、宜しく去つて細君もてる汝が友に其秘決を聞くべしである。

○吾人は學生が直ちに紳士にして、而して良人亭主たりお父さんたるの是非を知らぬものである、只々淡ましいといふに過ぎない、けれども單に憂ふるものは、私は兒の餘り多からざると、物を闇へ落さぬこと是ればかり、贅澤をいへば其睦まじさをいつまでもといふこと也。

○聞く昔は學生の所謂用のない門を二度三度は寄宿舍の幼年室のほとりであつたのが、今では女學校の門の口、中にも赤門派と早稲田派とは、女子大學の所屬を爭つて接戰の眞最中、折角の夏期休業に親の顏を見んとも思はず、毎夜々々納涼に事よせて、此處かしこに伏兵を置き、他處のものと淡みつゝあるといふではないか、

短文

●納涼

▲夏になると身體も心も半分は死んだもの同様じやが、夕暮から團扇を手にして木の下などに涼を納れると、其心地よさといつたら、さうさ、何に譬へたらよからう、冬の寒い時炬燵に入るよりも餘程心地よいし先づ世にこれほどのことはないわ、宗教家などにいはせると神は此涼しさを知らせんが爲めに特更に暑さを示すのぢやなどゝいふだらうよ （半白老翁）

▲松陰よし、柳陰よし、川岸よし、海岸よし、又家の中にても日のさゝぬ風通しのよい坐敷よし、すべて納涼ほど心のすがすがしきものなし、僕は夏は大嫌ひなれども納涼あるが爲めに些か捨て難き處なきにあらず （宮口三郎）

▲屋外の納涼も納涼じやが、奇麗な二階屋の簾を捲き上げ、浴衣を引かけて團扇片手の美しい意氣な奥さんなんかの涼む處を見ると納涼の特徴は却て後の方にある様に思はるゝよ （助平翁投）

▲大木の下に仰臥す、納涼の妙味始めて悟るべし （直進生）

▲ハンモックに寢るのはハイカラのするいとだよ、男子宜しく郊外に散策して納涼すべし、一方は心を廣らし、一方は身を健やかにする、其益盡し千里といふべしじやれ （發發生）

課題

▲月 （八月十八日）

▲讀書 （九月十八日）

新刊批評

▲地球發達史

石川成章著
大日本圖書株式會社發行

「地學叢書」第一卷として發行せるものにして理學士石川成章氏の著なり、此叢書發行の趣意とする所は地學は最も人生に對して適切なる關係を有するものなるに係らず、其範圍廣汎にして多岐に容易に之を會得すること難く、且つ在來の書籍は概れ冗漫に失し、適當なる羅針盤なきを憂ひ、大いに材料の適切精選を勉め、記述の斬新正確及び程度の高尚詳密なるに於て一頭地を抽けるものを出し、以て學界に貢献せんとするにありといふ、而して其著者は皆各專問の學者にして最も愼重の態度をとり、敢て輕々しく杜選の著を出すが如き陋なからんといへり、其敍述の事項は大いにして、星雲說より地球の構造及び人類其他の生物を說き、地球の物質氣候等の變移を究め、更に地球の宇宙に於ける位置等を敍述すべければ全部三十卷の完結する日には一万乃至二万頁の浩瀚なる全書となるべしと此地球發達史は約二百六十頁に亘る美麗堅固なる書籍にして中には數多の說明圖を附し體裁頗る宜し、第一編緒論より第五編新生代に至るまで頗る簡明なる記述、一讀して地球發達の經過を了するを得べし、斯道に志あるものを利すること少からざるべし（定價六十五錢）

▲人種學

鳥居龍藏著
大日本圖書株式會社發行

同じく「地學叢書」の第二卷にして鳥居龍藏氏の著なり三百六十頁に餘る大著、外に附錄四十頁を附し體裁は總て第一卷に同じ、人種學及び人種分類の大體より說き起して各洲に於ける人種を細說し、殆んど此種の書に於て遺憾なきに近し、第一卷よりも一層面白く且つ出來よき如く感ぜらる、人種問題なかく〳〵にかまびしき折から、獨り學者のみならず少しく經世に志あるものゝ必ず一讀する價値あるものなり

（定價一圓廿錢）

▲女夫波

田口掬汀著
金色社發行

「女夫波」は田口掬汀君の新作である。吾人は此の頃の小說を讀むのが厭て〳〵たまらぬ。此の頃の小說といつても、紅露の書いたものは何を讀んでも皆格別の興味を感ずる。滔々たる今の寫實小說には日頃中てられて居るのである。吾人は矢張り三馬や種彥のものや、篁村の「むら竹」などを好く。今の某々々の如きは打明けていへば吾人の如き素人にも直ぐ作れるのである。自分は江戶系の作を好むこと前に申した通りであるけれど、また今日のつまらぬ第二流大家の作を好まぬが爲めに、新しい作家のは何を讀んでも珍らしく思ふ。此の點からいへば掬汀君などは最も新しい作家で、鋭意創作に從事して居られるさうであるから吾人は十分の敬意を表して居る。「女夫波」の如き淳良なる作物が一層家庭の讀物として普及せんことを欲す。

（定價六拾錢）

▲日英新報

倫敦刊行

英國に於ける日本人の發行せる月刊雜誌なり、頁數は至つて少く、且つ漫畫の數極めて多きを以て記事は甚だ僅少なりと雖も紙質善良にして亞鉛凸版を用ひたるは珍らし、和文の部は一年の前金一圓にして發行所は英國倫敦市シーザンク街三九日英新報社なり。

▲速成 日露會話獨習

高須五湖著
文榮閣發行

時節柄最も有用の書にして其記載の體極めて簡明なり斯道に志あるもの

ゝ參考となる節少からず

▲清韓露事業案内　（定價五十錢）
成効雜誌社

雜誌成効の臨時附錄にして、彼地に渡らんとするものには大いる有益なるものなり

東洋銅鐵雜誌第一卷第一號　東洋銅鐵社發行　（定價十二錢）

横山天涯氏の主宰して生れ出てたる新雜誌、かゝる專門雜誌の少き折から益々其健全なる發達を遂げんことを祈る



戰事彙報

第六

戰事彙報

●旅順港外の夜襲又々敵の大小二艦を轟沈す

七月二日午後七時大本營着電東郷聯合艦隊司令長官報告の要領左の如し

第十二水雷艇隊(司令海軍少佐山田享)は六月廿七日夜旅順港外にある敵の哨艦に對し攻撃を行ひたり其報告に據れば同夜我艇隊は旅順口港外に進航せしに敵の覺知する所と爲り探海燈の熾なる照射と砲臺軍艦の猛烈なる射撃を冒し黄金山下にある二檣三煙突の敵哨艦(戰鬪艦又は一等巡洋艦ならん)を襲撃せしに該艦は水柱を揚げて轟沈せり此時敵の驅逐艦は我を攻撃し來りしを以て之と砲火を交へたりしが其内一隻は艦腹を現はし白煙を揚げながら轉覆沈没せり是れ各艇が齊しく敵の探海燈光の下に明認する所なりと云ふ

此攻撃中戰死海軍大尉權藤薰義以下十三名負傷海軍中尉矢野柘太郎以下二名なり

●十二艇隊戰死者

第十二水雷艇隊の戰死者左の如し

大尉 權藤薰義
上等機關兵曹 種子田善之進
二等兵曹 野口卯助
一等機關兵曹 犬塚伊四郎
二等機關兵曹 玉手長次郎
三等機關兵曹 高橋末次郎
一等水兵 水城關主
一等水兵 福田留三郎
一等水兵 知花清一
一等機關兵 馬場伊三郎
二等機關兵 三宮重雄
二等機關兵 大野鶴松
三等水兵 有田善太郎

●摩天嶺の逆襲

七月五日午前大本營着電
黒木大將報告

七月四日未明濃霧に乘じ敵の歩兵約二大隊は摩天嶺に在る我前哨に來襲し突撃三回に及び彼我接戰我前哨は激戰の後敵を擊退し金家堡子(摩天嶺西麓約一里半)迄追擊せり

敵は樣子嶺(甜水站の西方)方向に退却す我戰死十五、負傷將校一、下士以下二十九名なり敵の死傷は無數にして戰場に遺棄せしもののみにても死者三十傷者五十餘あり

●黒木軍戰報城廠の占領

七月九日午後大本營着電
黒木大將報告

我一大隊は去六日夜敵騎約三百を驅逐して城廠を占領せり我に死傷なし敵は北方に退却せり

(附記城廠は寒馬集の北方に在り)

北分水嶺の來襲

同上

五日午後チヽンスキー第一聯隊の千三百騎は北分水嶺附近に在りし我一部隊の前面に來襲せしも擊退せられて北方に退却せり我戰死下士以下四負傷卒二なり

●蓋平占領公報

第二軍は昨九日蓋平附近の敵を驅退して正午頃全く同地を占領せり其經過左の如し

其一

七月六日午後大本營着電
奥大將報告

本日午前九時前後に於て軍の一部は四方臺東北方約一里の山頸を守備せし敵の歩兵約千六百名を驅逐して該山頸の線に止まれり該地に在りし敵は北方に敗走せり軍の主力は其進路上に在りし敵騎を驅逐しつゝ前進し金家匂より小藍旗を經て二道河の經に達し左翼の一部は淮家屯の高地を占領せり我損傷は岩崎少佐(初太郎)重傷下士以下即死二負傷十にして敵は死體約二十を遺棄しあり軍の右翼方面に敗れし敵は蓋平附近に退却せり

其二

七月七日午前大本營着電

軍は本日砂樹臺附近に在りし敵を驅逐して正午頭塔子溝より大望海寨東方の高地に亘る線に進せり敵の歩騎砲の若干は我軍の溯路上に在る隘路に於て逐次に抵抗を試みつゝ北方に退却せり土人の言に依れば蓋平附近に約二萬海山寨に約二千同地附近に約一萬の敵ありて蓋平北方高地及西臺附近の高地には砲兵を備へ又大石橋附近には依然敵兵駐屯し漸次増加の模様ありと七月五日以來の死傷者左の如し

重傷　歩兵少佐　岩崎初太郎
輕傷　少尉　森田貞助
下士以下戰死重傷十一輕傷七合計廿四人

其三

七月八日午後大本營着電

敵は海山寨附近より蓋平附近に亘る間及び西臺北方高地附近を占領し午後一時頃より鐵道列車を以て海山寨附近に軍隊を下車せしめつゝあり湯池南方約二里の花紅附近にも敵兵あるものゝ如し

軍は豫定の計畫に依り此敵を攻撃せんとす

其四

軍は本日午前五時二十分より蓋平附近に在る敵に向つて砲撃を開始し午前八時頃太平屯高地、蔡家屯高地、東双頂山に在りし敵を驅逐して該地を占領せり敵は石門及海山寨附近に砲列を布き尙ほ頑強なる抵抗を續けつゝあり

其五

同日午後着電

蓋平附近の敵は昨夜來著しく其兵力を減じ蓋平附近の陣地を我軍の爲めに奪取せられたる後石門、海山寨、高家屯附近の險要に據りて再度の抵抗を爲したるも正午頃我軍は更に此敵を攻撃して同高地の線を占領せり敵の砲兵は其後紅旗廒、腰岑子、石福寺の高地に在りて我追擊隊を砲撃せしが午後三時に至り砲聲殆んど沈默せり

此戰鬪に於て小泉少將は大腿に銃創を受けたり

●蓋平占領續報

七月九日蓋平占領に關し第二軍より到達せし報告の要旨左の如し

紅旗廒腰嶺子に在りし敵の歩騎砲兵は其後十日太平庄附近に集合し次て大石橋に退却し其一部は五臺山に止りたるものゝ如し該敵は狙撃歩兵第一、第九師團に屬する部隊及び騎兵約二十中隊、砲兵約六中隊にして太平山牛心山、望馬臺青石山に亘りては堅固なる敵の防禦工事ありと又大石橋東方郭家桜子附近には數多の敵の幕營を見る

八日夜より九日の戰鬪に於て生じたる我死傷を合計すれば約百五十名を算すべし

敵の損傷も亦少なからざるが如きも未だ詳報に接せず

●旅順港口の襲撃

七月十日午前大本營着電
東郷聯合艦隊司令長官報告

第六艇隊(司令海軍少佐内田長隆)は八日夜旅順口港口に在る敵の哨艦を襲撃する爲め雨霧を冒し港口に近づき索敵せしも天明に至るまで敵を發見せず然るに翌九日午前五時三十分に至り第五十八號艇(艇長心得海軍中尉中牟田武正)は黃金山下環氣の内に敵艦アスコリドの碇泊するを認めたるを以て之を襲撃せしが其効果は未だ明かならず同水雷艇隊は敵の要塞より猛烈なる砲撃を受け第五十八號艇、第五十九號艇にて各下士一名重傷を負へり

●旅順艦隊の出港對戰

七月十一日午前大本營着電東郷聯合艦隊司令長官報告の要領左の如し

九日午前七時頃より敵艦ペーヤン、ヂアナ、パルラダ、ポルターワ、ノーウヰック、砲艦二隻驅逐艦七隻は數多の掃海船艇を先頭として漸次に港外に出て同日午後鮮生角より龍王塘附近まで來れり我驅逐隊の一部は敵の掃海を妨害するの目的を以て屢々之と砲戰し第三艦隊の一部は小平島附近に在て之と對應し午後二時頃に至り敵艦ペーヤンと多少の砲火を交換せしが午後四時頃

に至り敵は漸次港内に退却せり我艦艇には驅逐艦朝潮に於て給仕一名の輕傷したる外一の損害なし

●柝木城湯池方面の戰況

大孤山上陸軍方面に於ける戰況左の如し

七月十日午前大本營着電

大孤山上陸軍は本日一縱隊を以て、仙家峪、接官廳方面より湯池方向に又一枝隊を以て分水嶺を經て柝木城に向ひ前進せしめたり

接官廳附近に在りし敵は我前進を見て谷地を西南に向ひ退却せるも午後五時頃敵の砲兵周家庄西方高地に現出し射擊を開始せり其後の狀況に就ては未だ報告を得ず

柝木城に向ひし一縱隊は途中敵を擊攘しつゝ西羊拉峪附近に在りし敵の前進陣地を襲擊せしに敵は非常に狼狽せしが如きも後に至り歩兵約十大隊、砲兵二中隊現出せしを以て該縱隊は偵察の目的を遂し交戰の必要なきを以て戰鬪を避け某地に引上げたるも敵は急追せざりし

柝木城以南に在る敵は約一師團にして其騎兵の大部は牛心山方面に位置せるものゝ如し

七月十一日午前大本營着電

昨日の報告に繼續する戰況左の如し

接官廳及び仙家峪に通ずる二道路を取りて前進せし一縱隊の一部は九日午前九時より十一時の間に仙家峪及び芹菜峪南方高地に達せり然るに敵は仙家峪西方高地を占領して頑固に抵抗し夜に至るまで退却せざりし

接官廳方面に進みし同縱隊の主力は周家庄西方高地を占領せる歩兵約二大隊砲兵約一中隊の敵と九日夕刻迄對戰せしも終に之を擊退し接官廳附近にて戰鬪隊形の儘露營せり

翌十日拂曉より前記の諸隊は協同して仙家峪西方高地の敵を擊攘し之を追擊して秀才溝の高地を堅固に占領せる敵を諸方面より攻擊して占領せり

此戰鬪に於て騎兵中尉竹內治孝戰死す

●旅順口水雷襲擊

(七月十二日午前大本營着電)
(東鄕聯合艦隊司令長官報告)

第六水雷艇(司令海軍少佐內田良隆)は十一日午前零時過ぎ旅順口外防材附近に進行し港口の哨艇ヅアナ型に對し襲擊を試み第五十七艇(艇長心得海軍中尉大寺量吉)第五十九艇(艇長海軍少佐內田良隆兼務)は之に對し水雷を發射せしが其効果は未だ明かならず敵は猛烈なる砲火を以て防禦せしも我艦隊には一の損傷なし

●摩天嶺逆襲詳報

七月十九日午前大本營着電
黑木大將

七月十七日に於ける摩天嶺附近の戰況

摩天嶺方面

午前三時頃敵兵摩天嶺西方の前哨に來襲す岡崎少將の指揮する歩兵聯隊は直に摩天嶺に於ける豫定の陣地に就き又五峰觀西北方高地に在りし砲兵も同地砲列に就けり午前五時過敵の歩兵約二大隊我前哨の退却に尾して摩天嶺西方の山頸に開展す我全線之に向て射擊を開く爾後敵兵益々增加し午前七時卅分には其兵力約五聯隊以上となり屢々我左翼を包圍せんとせしも我摩天嶺最高地占領部隊の爲め其目的を達せず午前八時に至る迄我歩兵砲兵は此數倍の敵と對し頗る勇悍に抵抗せしが遂に敵は左翼より逐次退却を始む我步砲兵は射擊を以て之を追擊し更に此際到着せる歩兵第○(○聯隊の一部と共に全線追擊前進に移り騎兵聯隊も亦之に參加せり敵は甜水店及び塔灣方向に退却し內約七大隊は金家堡子附近の高地に停止せり午後二時敵の砲兵四門は塔灣附近より我追擊隊を射擊す由りて追擊隊は李家舖子西端に停止し敵と對峙せり

敵情偵察の爲め新開嶺よりマクーメンザ方向に派遣せし歩兵第○聯隊の一中隊はマクーメンザ東方に於て北方山地より來れる敵の歩兵約一大隊及び塔灣方向より來れる敵の歩兵二大隊と遭遇苦戰故も力めり增援隊と共に此敵を西方に擊

退し午後一時頃マクーメンザ東方高地を占領し摩天嶺より塔灣方向に退却する敵を猛射せり

小高嶺方面

小高嶺東方約一里に在りし歩兵第○○聯隊の一部は敵の歩兵約一聯隊の攻撃を受けしも此敵は摩天嶺の敵と同時頃退却を始めたるを以て該隊は小高嶺迄之を追撃せり

下馬塘方面

午前八時頃敵の歩兵一大隊騎兵一中隊下馬塘西北方に在る我前哨中隊に來襲す中隊は苦戰最も力め曹長以上悉く死傷せり其後敵兵増加して約一聯隊に至りしが我前哨本隊の二中隊及び第○○○聯隊の一部之に増援し午後四時五十分に至り終に之を黄家堡子方向に擊退せり又橋頭方向よりは敵歩兵約八中隊騎兵一二小隊徐家堡子に來襲し之に對せし我歩兵隊は工兵隊の増加を受け午後一時に至り之を西北方に擊退するを得たり

樣子嶺方面

樣子嶺方面の敵情偵察の爲め派遣せし偵察隊は午前五時りホ嶺を發し午後三時歸還せり偵察の結果敵は歩兵三中隊砲八門をスウヰテヤザンザ西方高地に現せり

此日來襲せし敵は軍團長ケルレルの指揮する狙擊第三師團及び第九師團を以て編制せる約二師團なるが如し四師團に於ける我死傷將校以下二百九十九名にして敵の損害及び鹵獲多數なるも其數未だ詳ならず

摩天嶺附近の戰鬪に於ける我死傷左の如し

戰死將校大尉田村亥佐美中尉後藤鶴治品田茂平少尉浦野幸治郎下士以下三十九名

負傷將校少佐高松銑太郎大尉牛圓重二郎末松四郎中尉小林榮之進出羽三洲澤整内松繩直太味岡玉喜菅原直吉佐藤次郎小尉佐藤悌三高橋雄三特務曹長熊谷又吉朝田清三郎稻葉數松下士以下二百四十一名

●摩天嶺死傷將校

十七日露軍が摩天嶺を逆襲し來りたる際に於ける某師團の死傷者は左の如くなりと

戰死者（四名）

大尉　田村亥佐美
中尉　後藤鶴治
中尉　品田茂平
少尉　浦野幸治郎

重傷者（四名）

少佐　高松銑太郎
大尉　牛圓重二郎
少尉　松繩直太
特務曹長　稻葉數松

輕傷者（十一名）

大尉　末松四郎
中尉　小林榮之進
中尉　柳澤整内
中尉　出羽重三
少尉　佐藤悌造
少尉　高橋雄三
少尉　味岡玉喜
少尉　菅原直吉
少尉　佐藤次郎
特務曹長　熊谷又吉
特務曹長　多田清三郎

下士以下戰死者（四十九名）

山本少將部下　十五名
島田中佐部下　八名
新發田聯隊　十五名
村松聯隊　十一名

負傷者（二百四十一名）

山本少將部下　十八名
島田中佐部下　六十四名
新發田聯隊　六十八名
松村聯隊　八十九名
野戰砲兵　二名

戰死者計　五十三名
負傷者計　二百五十六名
合　計　三百九名

●細河沿占領公報

其一（七月廿一日午後大本營着電　黑木大將報告）

軍の一縱隊は小甸子（城廠の西地約六里）方向に在る敵の步騎兵に對して步兵一部隊を派遣し其主力を以て十八日山咀子附近に達せり此の時兵力不明の敵は細河沿附近に陣地を領占しあり午後四時三十分頃敵は北方に退却するの狀ありしを以て我前哨大隊は偵察の爲め前進せしに敵は步兵約二大隊砲八門を以て應戰す此に於て同大隊は頗る苦戰し其の一中隊の如きは中隊長以下將校悉く負傷するに至れり我前營及他聯隊の一大隊は午後六時半戰鬪に加入し日沒に及ぶも敵兵遂に退却せず戰鬪隊形を以て夜を徹せり此敵は二回逆襲を試みしも我兵悉く之を擊退せり

細河沿附近の敵の陣地は隘路口を扼り二十乃至百メートルの比高を有する高地線にして遠く前地を瞰制し且つ堅固防禦工事を施し其左側は細河を隔て〻超べからざるの山地あり右側も亦遠く楊木溝より高峻なる山岳を攀縁するにあらざれば迂回するを得ず縱隊の主力は十八日夜半より運動を起し其の砲兵は紅廟子谷地及其南方山上に陣地を占め縱隊の主力は敵陣の正面に其の一部は右側に向ひ又小一部隊は老母山頂を占領して本渓湖方面を警戒し十九日午前五時より砲戰を開始せり敵は野砲三十二門を以て我に應戰し劇烈なる砲戰は午前九時過まで繼續せしも爾後は互に緩慢なる射擊を交換せり

翼に敵の右側に向ひし一部隊は峻峻なる山地を踰越して前進して午後三時頃敵の右側に達し同時に他の縱隊より赴援せし一部隊も又其附近に到着せり

此に於て縱隊の主力攻擊前進に移り砲兵も亦急射擊を以て之を援助す然れども敵の步兵は猶ほ頑强に抵抗し主力は苦戰最も勉め敵右側に迫し部隊並びに赴援部隊も敵の側背に向て奮進し其方面の戰鬪も又慘烈を極む

午後五時三十九分主力は遂に細河沿西南高地の敵陣に突入し右側攻擊の部隊は敵の退路を遮斷し午後八時過ぎ細河沿附近一帶の地は我有に歸せり

敵は中將某の指揮する步兵第三十四聯隊（四大隊）第三十六聯隊（三大隊）コサック一聯隊、野砲三十二にして其の主力は混亂して安平方向に一部は北方に逃走せり

我死傷戰死河野砲兵少尉及下士卒五十四負傷岡村、平岡少佐以下將校十六、下士卒三百五十一なり

敵の損害は未詳なるも二十日午前十時迄に我軍にて埋葬せし死者四十捕虜將校二下士以下四十五にして尙著しく增加の狀況あり捕虜其他の言によれば敵の死傷は少くも一千以上なるが如し

其二（七月廿一日午後大本營着電）

軍より派遣したる一枝隊は十九日小子（小甸子ならん）の南方約二里趙家堡に於て工事を爲しある陣地に據れる敵の步兵約一大隊、騎兵約一千を攻擊し四時間に亘り戰鬪の後之を太子河右岸に擊退せり我隊の負傷下士以下十七敵の死傷は未詳

其三（二十二日午前大本營着電）

細河沿の戰鬪に於て敵の步兵第三十（聯隊長？）負傷

一昨二十日中に我軍にて埋葬せし敵の死體百三十一なり其餘鹵獲品は彈藥車三個小銃三百被服裝具多數後方に運搬せる敵の死傷者は一千以上なり

平岡少佐遂に戰死せり

其四（七月二十二日午後大本營着電）

十八、十九兩日細河沿附近戰鬪死傷者如左

戰死　平岡步兵少佐　河野砲兵少尉

・下士以下七十

負傷　岡村步兵少佐　西久保步兵大尉

岩田步兵大尉　牟田口步兵大尉

日野砲兵大尉　青柳歩兵中尉
今村歩兵中尉　古川歩兵中尉
下田歩兵少尉　中島歩兵少尉
佐藤歩兵少尉　岸田歩兵少尉
小野砲兵少尉　末松砲兵少尉
谷三等軍醫　松本特務曹長
下士以下四百三十六

●大石橋營口占領公報

其一

●營口の占領公報

七月二十七日午後大本營着電

奥大將報告

軍の一枝隊は二十五日營口を占領せり營口停車場の諸建築物は悉皆破壞せられ同地に在りし露國船舶は遼河上流に逃れ其守備兵は東北に退却せり又遼河には中立國船舶自由に出入しつゝあり

其二

奥大將報告

軍は二十五日右翼部隊の强襲に次ぎ天明より敵の陣地を砲撃せしも二十四日の如く猛烈に應射せず依て午前六時過ぎ攻撃前進を開始せしに敵は今や退却を偽しつゝあるもの丶如し依て直に之を追撃して大石橋以北に前進せり敵は正午頃其大縦隊の後尾を以て大石橋を通過して北方に退却し大石橋及び牛家屯附近は目下盛に燒けつゝあり青石山附近の敵の陣地は其工事頗る堅固にして田家屯二道河との間約四里に亘り巧みに地形を利用して塹濠、砲臺、副防禦等を構築せり

聞く所に依れば露國軍艦シブーチは武裝の儘田庄台の上流二十淸里の遼河に碇泊しありと

二十四日大石橋附近の戰鬪に於ける死傷將校

戰死

砲兵少佐石川嘉三郎　砲兵大尉森　秀吉
歩兵大尉永井成太郎　歩兵大尉坂戸　直吉
歩兵中尉小河　義夫　砲兵中尉國川　完吾
歩兵大尉井上　勝　砲兵少尉久知　道雄

計　八名

傷者

砲兵少佐武内　順次　砲兵大尉川尻露太郎
砲兵少佐川瀬　房四　歩兵中尉松田　辰作
歩兵少佐千秋　勤　歩兵中尉二神　義治
歩兵大尉中村　恒太　砲兵中尉前田　實
砲兵大尉岩井齊一郎　砲兵中尉太田和三郎
砲兵中尉三宅　守彦　砲兵少尉名倉　定賢
砲兵中尉久保田鐵藏　砲兵少尉池田　正
歩兵少尉武永鐵之助　歩兵少尉吉見　隆治
歩兵少尉高田庫太郎　砲兵少尉黒江　敬吉
砲兵少尉大迫　新吉　歩兵少尉折田　有倫
一等軍醫阪本　靜一　歩兵少尉鍋津　義雄
三等軍醫河野　慶輝　歩兵少尉吉澤美代作
三等主計香村英太郎　歩兵少尉藤岡錄三郎

計　二十六名

外に氏名詳ならず　歩兵少尉一名

其三

七月二十八日午前大本營着電

奥大將報告

大石橋附近の戰鬪に於ても敵は蠻行を極め就中二十四日青石山東南方の戰鬪に於て午後九時山西頭北方高地に向ひ突擊したり歩兵某聯隊の一部隊は格闘の結果一時其陣地を離れたるに際し敵は我戰死者の左眼を抉り門齒二枚を碎き其眼腔に土を充實し又口内に石及び布片を塡實したるもの各一名あり

本派本願寺大法主猊下題字

再版

眞宗聖典　全

表紙總柔皮洋裝三方總金
金文字入菊判半截六百四十頁
全一冊特價一圓　郵稅八錢

現今佛教の最大勢力は眞宗なり。眞宗の教義は眞俗の二諦を立て、啻に未來の成佛を以て安心立命を得しむるのみならず之と同時に國憲を遵守し、倫常を愼むの掟あり。故に最もよく我國民性に合ひ最もよく現在の處生に適す。宜なる哉兩派本願寺の信徒は無慮數百萬に上り、支那朝鮮に、亞米利加、布哇に、海外布教の功績亦日に顯著なりと聞く。本書は眞宗に必要なる一切の經典を一冊に網羅せるものにして、正信偈三帖和讃全部、御文章全部、淨土三部經全部、改悔文、御聖教、御代々御消息等皆收めて其中に在り。印刷鮮明假名付にして讀み易く、裝釘堅固にして善美、袖中の携帶に便なり。庶幾くは內外信者をして、行住坐臥出入必ずこの聖典を懷にして安心報恩の行業を得しむるを得んか。今や我國露國と干戈を交へ、國力の發展振張前古未曾有ならんとする時に方り、妻子を棄てゝ戰場に赴くものも、子弟に別れて國內に止まるものも、均しく一大信心を決定して、この難局に當らざるべからず、僧俗老幼を問はず、希くは一本を携へて、二諦內外の相依を完くし給へと云爾。

一本書發行以來意外の好評を以て初版數千部忽ち賣盡し玆に第二版を重ぬるに至る亦以て本書の價値を知るに足る

發兌元　東京市神田區小川町一番地　書肆　文會堂　敬白

大賣捌所　東京本郷區本郷四丁目　文明堂　東京麻布區飯倉五丁目　森江書店　京都油小路御前通上ル　興教書院

投稿規定

毎月十八日を以て編輯締切日と致し候に就き何卒それまでに着する樣願上候猶投稿諸君は**住所記入**を御忘れ無き樣被成下度候宛名は東京市本郷區駒込西片町拾番地反省社

書籍の取次

愛讀者諸君の便宜を計りて今後本社にて取次を致し候東京市内にて發行の書籍は總て正確迅速に取次可仕候に就き申込の諸君は書名著者發行所等を認め代金及び遞送料を前金にて御送り被下度候

中央公論定價表

	一冊	六冊	十二冊
定價	金拾貳錢	金六拾五錢	金壹圓貳拾錢
郵税共	金拾參錢	金七拾壹錢	金壹圓卅貳錢

中央公論廣告料

一行（五號文字二十四字詰）	一回	金貳拾錢
四分の一頁	一回	金貳圓五拾錢
半頁	一回	金四圓
一頁	一回	金八圓
表紙の二三四一頁	一回	金拾五圓

送金注意

一郵便爲替は受取人指定欄へ必ず弊社町名幷に社名を拂渡局所を**東京駒込**局と指定せられたし弊社印鑑は駒込支局へ差出有之候に付決して途中にて盜取せらるゝ憂なし

一郵劵代用の場合は必ず壹割增のこと

一誌代、廣告料とも總て前金にあらされは御需めに應せす

一前金切の節は帶封に朱書いたすべくに付早速拂込まれたし然らされは其號限にて發送を止むべし

一雜誌の發送を以て領收の證といたすべくに付別に領收證を望まるゝ向は返信料を添えられたし

一御拂込み金額の端金の場合には左表に準し御勘定可致に付御注意成たし

一金七拾壹錢以下　一部金拾參錢の割

一壹圓參拾貳錢以下　一部金拾貳錢の割

都下大賣捌所

神田表神保町 東京堂
神田裏神保町 上田屋
本郷四丁目 文明堂

明治三十七年七月三十一日印刷
明治三十七年八月一日發行

發行兼編輯人 武田鷗松
印刷人 清水金右衛門

東京市本郷區駒込西片町十番地
發行所 反省社（電話下谷九一九）

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所 秀英舍第一工場

文學士 近角常觀氏著

信仰問題

再版出來

人、苦悶を經て、初めて人生の眞意義を悟り世界慘憺たる舞臺を過ぎて、終に靈の光明を發揮す、今や「信仰問題」の鐘聲は已に曉天に響き、國民は絕大の自覺を生じて火血の間に一大修養の功を積まむとす。震雷劇雨耳を劈くの後、夕陽西山の清淨界を出現せむ、國民信仰の地盤たる者、須らく二十世紀の最大理想を現に立ちて鍛錬陶治、世界に於て此の靈的需要に應ずべき者、實に實するの覺悟なかるべからず、本書ならむか。

本書挿入 寫眞九葉入

▲米國シカゴ靑年會館
▲英國議院及ウエストミンスター伽藍
▲フルトブルヒ城中ルーテル聖書飜譯室
▲巴里に於ける萬國宗敎大會
▲獨逸宗敎沿革の遺跡の圖五個

▲菊版二百六十頁 製本高尚
▲上製價六十五錢並製價五十錢郵稅八錢

發兌元 東京本郷四丁目 電話下谷(二〇二九) 文明堂

賣捌所 東京本郷森川町一番地 求道發行所

貴族院副議長 黑田長成君題字
東京市長 尾崎行雄君序文
萬朝報敎育記者 松山傳十郎君著

立憲國の少年

見本は郵劵十錢

全壹冊 大和綴頗美本 定價金八錢 郵稅金二錢

目次 國體、憲法、權利、義務、政治、議會、外交、自治

本書は唱歌體にして唱歌にあらず少年女子の爲に最も平易に日本の國體等以上目次の下に詳記せられたれば小學生徒賞與書としては無比の良書なり

陸軍少將 福島安正君作歌
小山作之助先生作曲

新刊

露國征討軍歌

全壹冊 定價金三錢 郵稅二錢

兩殿下鮮明御肖像入
東京敎育社說編

九重の華

定價金九錢郵稅金二錢
白井毅君吉田賴吉君合著

學生の憲法

定價十二錢郵稅金二錢

偉人と豪傑 少年時代
谷口政 先生著
定價金十二錢郵稅金二錢

家庭の敎師

千代田學會編
定價金八錢郵稅金二錢

發兌元 東京市神田區千代田町(電話本局百四十四番) 博報堂出版部